
なんでやねん！

B G L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでやねん！

【NZマーク】

N9105X

【作者名】

BG-L

【あらすじ】

平穏な日常を愛する高校一年生の天堂陸。

だが穏やかな陸の日常は、陸への恋心を燃やす幼馴染みの少女綾崎紫苑と五年ぶりに再会したことで、愛と情欲と陰謀が渦巻く日常に激変する。

財閥の令嬢である紫苑は、その可憐な容貌で綾崎グループのCMや雑誌で活躍中。その渋い若武者口調と男らしい性格で大ブレイク。

紫苑曰く乙女ザムライ。

紫苑は陸の恋人になるため、次々に愛作戦（ラヴ オペレーション）を実行！

夜這い、甘言、無理矢理、監禁、虚言、色氣、脅迫など。

そこへ、紫苑の婚約者にして世界有数の財閥の息子のアレックが参上。

三つ巴の恋戦が始まる！

この物語は、恋に狂つた一人の富豪と、平穏を愛する庶民が激動の三角関係を繰り広げる疾風怒濤の恋愛ギヤグである。

* 小説＆投稿屋に投稿した作品を加筆修正しています。

プロローグ

天堂 陸てんとうりく

夢を見ているのが不思議とわかつた。微妙に思い通りにならない体や意思。そして、ふわふわと捕らえどこひのない曖昧な感覚からわかる。

今回の夢は忘れもしない……小学校六年生の頃のある別れの記憶。

それは晴れた曇下がりの午後だった。
近所で有名なほど大きい家……というより屋敷に住んでいる幼馴染みの少女が、両親の仕事の都合でアメリカに引越しする事になった。

家の周りには少女の両親が呼んだ引越しの業者の人達が、忙しく荷物をトラックに運び入れている。

そして 視線の先には恐ろしく整った容貌をした少女がいた。

流れるように艶を帯びた天然の茶髪は背中まであり、一度視線が合えば吸い込まれそうな黒瞳が印象的だ。鼻筋のラインは綺麗の一言に足りるし、形の良い唇は視線を逸らせないくらい可憐さに満ちている。

まだ幼さを残すものの、もう数年もすれば、きっと誰もが褒め称える美人になることは間違いないと思う。

その少女の名前を綾崎紫苑といつ。
あやさきしづかん

「もう会えなくなるのだな……」

けれども、その綺麗な唇から発せられた言葉遣いは、容貌の可憐さとは正反対にとても渋い若武者のような凛々しい口調だった。そして、紫苑は激情を叫びと共に、俺にぶつけてきた。

「うるわしきのうらわ、おのれ」
一
二

長い茶髪を振り乱し獣のような咆哮を上げ、鬼の形相を見せる紫苑に、業者の人たちが作業の手を止めて、何事かと目を見張っている。

夢に出でてもうなぐらし鬼氣迫る表情で、幼馴染はお腹に入りのウサギのぬいぐみの首を引き千切らんばかりの勢いで振り回し、地団太を踏む。

止めないと、もう懲りたり、恐怖で声をかけれないでいた。
触らぬ神になんとやら……それにしても夢に出てきそうな光景だ。
いや今おれは夢に出でるのか……

シナリオはめはなた
ヘリティ

「お、落ち着けよ紫苑つ、頼むかひ……！ や、やめておいでー
そんなにウサギを振り回すと首がもげちゃうー！」

向く。

そして、もう一度おのれえええええええと尾を引くよくな絶叫を上げて、紫苑は続ける。

「こ」のまま幼馴染みの地位をガツチリとキープしながら、陸に言い寄るメスブタどもを排除し、中二くらいに無理矢理押し倒して、ラ

ブラブの恋人同士になろうといつ私の計画がああああああ！しかも、アメリカ！？ そんなの意思の疎通とかはかれないと、かああああつ！ しいていうなら作文書いうと思って本の題名書いて、自分の名前書いて、さあ、書くぞ、と思つたら何にも書かないうちに、物理的法則を無視して、一行田の「マス目」にいきなり句点うたれて、終わりつて感じじやないかッシッ！」「

紫苑の全声量をもつてして告げた恐るべし愛の告白に嬉しいと感じつつも、どこか素直に喜べない自分がいることに気が付く。

「どうか無理矢理押し倒して、なぜラヴラヴになるんだ！？」
「な、何言つてるとか俺よくわからないよ！？」それに、ちょっとと声のトーンを落として冷静にだな……」

「なんで、陸はそんなに落着いてるで？」「

尋ね返す紫苑の声は、雲を裂く稻妻よりも鋭い。切れ味抜群だ。こんなで髭剃りをしたら、きっと両頬は血塗れになるだろう。紫苑の心は不可解の三文字に縛られているのか、先程よりも酷く暴れだす。

ウサギのぬいぐるみの耳に歯をたてながら、壁にウサギのぬいぐるみを押し付け、そのボディに連続で拳を打ち込み、捻り込み、鋭くえぐるようにダメージを与える様子は目を反らしたくなるほど「む、むごい」と戦慄と共に絶句するしかない。

ウサギのぬいぐるみに命があるなら、悲鳴を上げてこることは間違いかなかつた。

そして 突然、紫苑はウサギのぬいぐるみをいたぶる手を

止めると能面のように無表情な顔つきでひつそりと呟く。

「縛り付けて、無理矢理車のトランクに入れて、アメリカに連れて行こうかな……空港に着いたら、そうだな……あのボストンバックの大きさなら入ることができるだろ？」「

誰をとは聞かない。わかりきつてているからだ！

「お、おおお、おおお落着けよ紫苑ツツ！ 一生会えない訳じやな

いだろ？ な？ な！？ なあツ！？

小学生の俺は必死の形相で、危険な笑みを浮かべている紫苑の肩を揺さぶって説得する。

小学生にして、俺は生か死かの究極の状態に追い詰められていた。「むう…… そうか？」

疑わしそうな視線だッ。全然信じていない目だ！ 狂氣が宿った瞳だ！！

「そうだよ、そう！ そうに決まってるじゃないか！」

悩む素振りを見せる紫苑に一気に畳み掛ける。じゃないと、俺は死ぬ。死んでしまう。

「そうだな……」

「そうだよ！」

紫苑が納得した顔で頷くのを確認して、俺は安堵の笑みを……

「アメリカはキスを挨拶代わりに頻繁に行いつらじいし、恋愛のほうも進んでいると聞くからな…… ラヴの勉強にはちょうど良いかもしね、なつ！」

凍りつかせる！？

確かにこの紫苑という幼馴染、転んでもただでは起きない所がある。

全身の血液が凍るような錯覚を覚えてしまう。

「フフフ……！ 待つていろ陸ツ！ 私はアメリカで恋の武者修業をすることに決定多数で、大決定だッ！」

ビシリと右手の親指を、俺の鼻先に突きつけて紫苑はのたまう。その瞳には、燃え盛る恋の野望が見えた。それはもう天下布武を唱えた織田信長はこんな眼をしていたのかと思うくらい。

「そう、再び陸に相見るその時は、私は天下無敵の乙女ザムライとなつて、陸を何て言つか、いただきますだ！ 押し倒すだ！ 無理矢理だ！ 陥落で愛の奴隸だ！」

ご近所の人々に響き渡るくらい声高に宣言する紫苑に、俺は乾いた力の無い笑いをするしかなかつたわけ……

第一章 穏やかな日常と、わざわざなら

天

堂家

『陸』

『天

「んつ……んーん……」

瞳を開けると、見慣れた自分の部屋が瞳の中へと、飛び込んでくる。

「ゆ、夢……か……？」

呟いて、ようやく思考が鮮明になってくる。

手に抱えていたクッションを布団に置き、ベッドから抜け出した。

俺には妙な癖がある。

それは、寝ていると無意識に近くにあるものを抱きしめてしまうといふものだ。

「ん～～～…………つ」

一、二度大きく伸びをすると、つこせつあまで見ていた映像を脳裏に思い浮かべようと、頭を働かせる。

大きく息を吐いた。頻繁と言つほどではないけど、数週間に一、二度くらいの頻度でよく見る夢。

詳しい内容まで覚えていないけど、懐かしい中にも衝撃的要素が

かなり併う幼い頃の記憶……。

少し気だるげに前髪をかき上げる。

「……暑いな」

時計を見る。そこに表示されてる時刻と温度を見た。

クーラーの冷気が消えた室内の温度は、28℃を表示している。窓を閉め切っていることと暑さを増してきた日差しのせいで、室内は蒸し風呂になりつつある。

窓辺に立ち寄り、勢いよくカーテンを開いて窓を開け放つ。

季節は夏。

網戸越しの外の世界は、朝からギラギラと暴力的に太陽が輝いている。

窓越しに聞こえる蝉の大合唱が、夏独特の雰囲気を運んでくる。夏の太陽を直視してしまい、思わず目を細める。今日も暑くなりそうだ。

学校は夏休みに入り、部活もバイトもしていない俺はのんびりとした夏を過ごせそうだった。

自然と唇が笑みの形を作るのを感じる。

透き通った青い空。鮮やかな白い雲。蝉の鳴き声。唐突に初夏の涼風が駆け抜け、窓に吊るした風鈴が軽やかな音色を響かせた。何といっても身体中に降り注ぐ、太陽の暑い日差し。これらを素直にいいなと感じられる穏やかな日常。

それを俺は大事にしていた。

「……午後から図書館に夏休みの宿題でもやりに行くかな」自分の部屋にある出窓の桟に腰掛けて、青空を見上げる。夏の雰囲気を一時楽しむと、洗顔を済ませてリビングへと向う。その途中で共通廊下の壁に掛けてある伝言板を見る。

「母さんは買い物で、海は、本屋……か」

海とは俺の双子の弟のことだ。現在同じ高校に通っている。

クラスは別だけど、隣のクラスなので体育とか一緒だし、休憩時間も一緒にいることが多い。

リビングにある壁時計は自室で見た時刻から十分ほど時を進めており、午前十時半に差し掛かっていた。

食卓に置かれていた食パンに、いちじょうジャムをつけて食べると、何気なしに食卓の上にあつたテレビのリモコンを取り、テレビの電源のスイッチを押す。

アナログ放送が終わり、地デジの開始と共にブラウン管のテレビから液晶TVへと買い換えた。

分厚さがなくなり、薄型のテレビは綺麗ではあるが、なんとなく頼りない気がするのは俺だけだろうか。時代の流れと共に何もかもが変わっていく。

変な物悲しさに囚われていた俺だったが、浮かび上がった映像を見て口を止めた。

テレビにまわった夢の中で出てきた少女　紫苑がCMに出ていた。

正確には夢の頃の小学生の外見とは違い、俺と同じく十六歳の姿でだ。

昔と違い、少しシャギーの入った大人っぽい印象のショートカットのヘアースタイル。

小さい頃よりもずっと綺麗に女性らしくなった美しい容貌は、多くの者を魅了して止まない。

だが、まあ……

『恋する女子にお勧め！　愛しきあの者の心を手にせよ！　いつもおぬしの唇を私に独り占めさせてくれぬか！？』

桃色の口紅の宣伝をする紫苑の性格は、どうも昔と変わってないみたいだ。

ところが、この紫苑の普通の女の子と違う独特の性格……つまり

見た目は清純派美少女なのに、性格は竹を割ったようなさつぱりとした氣質に若武者口調というアンバランスな魅力が、大衆に人気がでている。

今では綾崎紫苑と言えば、芸能人並みの知名度の高さを獲得していた。

CMに出でているわけは、紫苑の祖父 綾崎秀士氏にある。

彼は巨大複合企業経営者の社長で、様々な經營に着手している。そのため彼の事業のイメージアップの一環として、孫娘である紫苑がCMや雑誌などに出でているという訳だ。

日本人とは違う垢ぬけたファッションセンスが女子高生に受けている、女性用のファッション雑誌やクラスの女子の間で紫苑の名をたびたび耳にすることがあった。

少し寂しげな笑みを口の端に刻む。

昔は幼馴染みと言う関係だつたけど、今は元幼馴染み。仲の良かつたとは言え、おそらく小学校の幼馴染みなんて紫苑はとうの昔に忘れてしまっているだろつ……。

それこそブラウン管のテレビが徐々に各家庭から消えていくように、彼女の思い出の中の俺も消えてしまつていてるに違いない……事実、引っ越ししてから紫苑から手紙や電話の類いはなかつた。怒りはない。

あるのは何か胸の奥が寂しいような悲しさだ。

テレビの電源を消すと、食欲を失っているものの、食べかけの食パンをほうつておく訳にもいかないので、強引に残りの食パンを口の中に入れる。

いつもの甘さをどこかに置き忘れてしまったような……☆虚な味がした。

食べ終わると、図書館に行く準備をする。

藍色のジーンズを穿くと、肩から袖の部分がミリタリーの柄がプリントされた黒のTシャツに着替える。

それから洗面所に向うと、寝癖のついた髪を水で軽く整える。当

然の如く正面の鏡に映る己の顔。

父さんに似れば男らしい容姿になつたのに……そつ脱び中性的な顔立ちをしている。

しかも、声変わりがすんでもあまり低い声にならない。

パツと見て一瞬、男か女か判断がつかないと友達は言つ。

言動や服装、雰囲気からで男と判るらしいが……それはつまり、少し女の子っぽい服装をすれば、ボーカルシチュな女の子と思われるということだ。

だから女らしいと言わないまでも、男らしくない自分の容姿があり好きではない。逆に父さんのように男っぽい容姿に憧れてしまう。

ため息を一つつく。容姿のことなんて考えたつて仕方がないことだ。

「行くか……」

それから勉強道具をバッグに入れて、外に出ようと玄関まで来た瞬間のことだった。

プルルルルルル……。

「あ、電話か……」

慌てて履いていた靴を脱ぐと、共通廊下に置いてある電話を取るために、来た廊下に戻る。

プルルルルルル……。

急いで電話機に向かうと、受話器をとつた。

「はい、天堂ですが」

『…………』

返事をすると、相手は沈黙を保つてくる。

絶え間なく、何かのアナウンスとかが聞こえてくる。駄だらうか？

『……陸か？』

受話器から俺と同年齢くらいの少女の声が俺の名前を呼ぶ。綺麗な声だ。けど内心の芯の強さが滲み出た凜々しい口調。

ドクシ！

(「Jの姫……！…？」)

心臓の鼓動が大きくな上がるのを感じた。
電話の相手は、やつきてテレビのCMで聞いた少女の声に……似ている気がした。

「…………ツツ」

にわかに信じられない現実を眼前に突きつけられ、声なく固まってしまう。

『陸じや……ないの、か……？』

「あ、はい、そうですが……」

不安な思いを感じさせる声に反応して、戸惑いつつも慌てて返事をする。

けど俺の戸惑いは、少女の怒声にかき消された。

『遅い、遅い、遅い、遅いぞ、陸！』

「す、すまん……？」

謎の少女の剣幕に反射的に謝罪してしまう。い、一体何なんだ？
『全く、どうしてすぐに返事してくれないんだ！？』　凄く怖かったではないか！　だが、まあなかなか男の色気に溢れる声音になつたな陸！　私の乙女回路はピュアにドキドキと言つ感じで……？？　のわあああああああああああああああああああ！…？』

少女は語氣荒く続けたかと思つと、突然、鼓膜を破らんばかりの驚愕の叫びを上げた。

「ど、どうしたんだ？」

キーンといつ耳鳴りの音を抑えて尋ねてみる。

『いかん、テレフォンカードの度数がみるみる減つてゐるじゃねー。
？「うなぎ下りだ！」』

「う、うなぎ？？」
『と、とにかく国際空港にある噴水の側で待つてゐるから、早く迎

えに来てくれ。以上、通信終わり』

ツー、ツー、ツー……。

電話の音が、虚しく俺の鼓膜を打つ。
虚しく？

いや違う。これから何かが起きるよつたな、そんな合図のよつたな運命の鐘にも似た音で鼓膜を叩く。
まるで夏の夕立のような集中豪雨の如く言葉の前に、俺は一言も言い返すことができなかつた。

それはあの小学生の時の、なつかしいやり取りを俺に呼び覚ました。

受話器を元に戻す。

電話をかけてきた少女の正体は、だいたい見当がついている。
あの若武者口調。激しい性格。妄想癖の思考回路。意味不明のスラング。

「はは……嘘だら……」

思わず口元を押さえる。

期待と困惑。喜びと不安。それらが嵐のように胸に去来する。
たつた一つわかつたことがある。

今をもつて穏やかな日常が遠のくといつ変な確信がある……！

第一章 ニ女ザムライ参上！

噴水ロード

国際空港

綾崎紫苑
あやさきしおん

私の名前は綾崎紫苑だ。気軽に紫苑ちゃんと呼んでくれ。でも紫苑と呼び捨てにできるのは陸と私の血縁者だけだ。そのあたり、気をつけてくれ。

私は恋愛の初期段階である中学校時代を無念にもアメリカで過ごした。

だが、私は転んでもただでは起きない。

私は私を転ばした相手と一緒に引きずり倒してすぐさまマウントポジションを取るくらいのことはする性格だと自負している。ばっちりとアメリカでできた友とラヴの勉強をこれでもかー、つてなくらいで、ごつつかんと宣言し興奮に修業してきた！

「フフフ……抜かりはないぞ」

サングラスを右の人差し指で押し上げて、自信気に笑う。

ちなみにサングラスをしているのは、すばり格好つけているからだ。私は形から入るタイプだから、何だか企んでる感じがしていい感じだと思うからだ。

むしろ、抜かりがあったのは私の家庭の事情だ。

恋愛の本場である高校時代に意氣揚々と帰国する予定だったが、敬愛するお爺様との間に問題が生じてしまった。

「納得できるものか……」

胸中から湧き上がってきた苛立ちを、唇を噛み締める」とで抑えつける。

バックの中に収納されたウサビヨン」と、ウサギのぬいぐるみに拳を叩きこみたい気分で「ござる。

（気分を落ち着けるには……）

陸の成長をリアルタイムで記録してある写真集（小型携帯バージョン）を、胸の内ポケットから取り出す。

バリエーションは制服、私服、寝巻き、体操服など豊富な上に、陸の様々な嗜好から、交友関係まで網羅した完璧な陸攻略本！
陸の写真集を早速開き、光速で悶絶する！
せ、世界はバラ色に包まれているッ！

「なんと凛々しいのだ、陸は！」

思わず感激と興奮が口から衝いて出てくる。

さらりと女性のように艶やかな黒髪。切れ長の一重瞼。凛々しく整った鼻梁に、男の色気に誘われてつい重ねてみたくなる唇。引き締まった顎のライン！

どちらかといえば、中性的な感じが漂う美人 それが天堂

陸だ！

もう、何ていうか悶絶プリティ百年殺しだ！

「む、胸キュンだ！ 最高でござる！」

思わず流れた『よだれ』という名のラヴのほどばしりを、右手の甲の部分で拭う。乙女たるものいつでも身だしなみは大切だ。
だが、陸の一枚目な容貌だけに私は惚れたわけではないぞ。
惚れた大きな理由は、陸の真面目で優しい性格だ。ひたむきで真摯な態度も私の心に好感触だ。

電車でご老人に席を譲ったり、困った人をほおって置けなかつたり、陸は様々な善行をしている。

クラスでは友人も多いし、学校の成績も校内十位に入るほどの優秀さだ。クラス委員も務めているんだぞ！

ちなみに、身長172cm。体重60kg 血液型・O型だ。

なにせ綾崎グループの技術の粹を集結して造られたものだから、その内容の満足度は万歳無敵天下統一だ！

そう、ラヴのためならここまでやる。その根性こそがアメリカで磨いてきたもの。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ『乙女ラヴ魂』！

愛しい者を想う時間こそが、乙女のラヴを育てるのだ。

そして、私は陸を想い続けてきた。この想い、そんじょそじらの乙女には負けぬと断言できる！

握力60超えの右手をぐっと握り締める！

（そう、私は満身の力をこめて今までに殴りつけんとする握り拳だ！）

この暑い夏に負けぬ熱さで、私は陸を口説く！ 陥落させる！

完全服従だ！ 調教レベルマックスのCG率100%だ！

もう何て言うかメロメロだッ！ 容赦無用の必殺必中の無理矢理だ！

必ず私を好きだと言わせてみせる！

でないと……私は……綾崎家の運命——お爺様との約束を守らなくてはいけなくなる。

（何としても陸に……ッ！）

瞳をラヴ色に燃焼させる。私の小宇宙は今、無限の高まりを見せている。小宇宙が燃え上がる時、不可能は可能になるのだ。かの英雄も言ったではないか。

「世の恋愛に不可能と制限はない、と！」

カツと瞳を見開き、私は未来を見る！ 薔薇色と虹色に輝く絶対無敵の未来を！

私を抱きしめて口付けをして熱烈な言葉で私を口説く陸を妄想をしながら、私はラヴ必勝の決意を心に刻み込んだ。

「マジやばいな……」

期待が現実に打ちのめされた時、人はこんな絶望を吐きだすのだろう。

少年の幻想が打ち壊された時、少年は大人へとなるのだろうか。ならば、俺は大人になどなりたくないなかつた。

後悔に瞳を閉じ、少し前の自分を止めたくなる。

ようやく空港に着いた俺は噴水がある場所を空港の係員に尋ねた。それから噴水のある空港口ビーへと向かい、目的の少女を探して周りを見渡す。

まず、視界に入ったのは、見事な意匠をこらした噴水だった。見ていると、なんとなく涼しげな感覚に捕らえられる。

「…………と……やばつ、早く探さないと……」

我に返ると、周辺を見渡す。

あたりには人を待っている人たちがたくさんいた。ビジネスマン、女子大生、子連れの母親、カップルなどなど。

これだけの人の中から電話の相手を探すとなると、少し面倒なことになりそうだった。

「これじゃあ、見つからないかもしないな……」

ため息をつく。

ここで電話の相手を見つけるのは不可能に近い。空港のアナウンスなどを使ったほうがいいかもしない。

と
アナウンスの音が右の方から聞こえて、何気無く右の方を見た。

世界が切り取られたように停止したかのように錯覚した。

鼓動が高鳴る。血潮が震えた
そこには……そこには俺と
同年代くらいの少女がいた。

サングラスで目元が隠れているが、整った鼻筋や形の良い唇から
かなりの美少女と推測できる。

少しシャギーのはいったショートカットの髪。

テレビや雑誌などでも、滅多に見ることができない美しい少女が
そこにいた。

薄いピンクのニーのシャツの裾は短く、そのせいでお腹が見
えているのが眩しい。

豊かにシャツを盛り上げる胸の辺りにはLOVE & CRAZYの
ロゴ。大胆に白い太股を露出させて膝上でワイルドにカットされた
ジーンズ。

カジュアルなスタイルでボーライフな雰囲気なんだけど、それ
とは逆にスタイルはかなり……そのなんだ……思わず目がいつてし
まう胸の膨らみといい、くびれた腰といい均整のとれた女性らしい
体つきをしている。

思わずその少女に見惚れてしまうだろ？

そう、だろう、だ。

少女が普通に佇んでいるなら、俺は見惚れていたかもしれない。

本当に鼓動が高鳴る。血潮が震えた

ドン引きで。

「マジやばいな……」

少女はその可憐の容姿にまるで似合わないオーラを周辺に醸し出していた。

短的に言おう。

少女は、身悶えしていた。

少女は完全に妄想世界に あたかも初めて覚醒剤を使用した麻薬患者のようにのめり込んでいた！

口の端に少し涎をたらして虚空を見上げながら薄ら笑いをするかと思えば、突然、恍惚とした表情で自分の体をかき抱くようにして身悶える。

少女の体からはドスピングのオーラが陽炎のように噴出していた。そのせいで、少女の容姿の良さに惹かれた男性たちも、その異様なオーラに「うおおおつー？」みたいな感じで躊躇して、ナンパと言づ行為に移せないようだつた。

（今なら逃げれるツ）

俺の中の危険回避を司る神経が全力で警鐘を鳴らしていた。

それなのに。

そんな気持ちとは裏腹に、不思議と体は少女の方に動いていた。まるで闇の中に浮かぶ光源を求めるように。

まるで懐かしさに引き寄せられるように。

まるでこの時をずっと待ち望んでいたかのよう。

破滅するとわかっていても踏み出してしまつ……この感情はなんて説明していいのかわからない。

戦いの前に恋人や家族のこと話す一兵士の気分だ。それ死亡フラグとわかっているのに口にしてしまう。

(だつて口にしないと、セリフなしの一兵士として終わってしまう
じゃないか！)

そんなわけのわからないことを考えてしまつ。

あるいは蛇に唆されて禁断の果実を口にしたアダムとイブはこんな気持ちだったのだろうか？

と、不羨な俺の視線と接近に気が付いたのか、少女が不意に俺の方を物凄い勢いで振り向く。

それはさながら獲物を見つけた肉食獣の如く。

「！？」

失敗の一文字が頭を通り過ぎ、続けて手遅れの文字が赤点滅する。予想が確信に変わった際の衝撃を受け、少女を凝視する。その少女は俺がよく知っていた幼馴染みに、やはりよく似ていたから……

しかも、俺の目と耳の錯覚かもしれないが、一瞬……少女の口元が、「りく」と俺の名を呟いた気がした。

俺の顔を見ると、少女は喜色と安堵を顔に浮かべる。

その笑顔に既視感を感じた。景色とかで体験したことがあつたが、人で感じるのは初めてだった。

「紫、苑……？」

少女を見て呟く。

その声は空港の喧騒の中ではあまりにも小さく、情けないくらいに掠れていた。とても少女の元まで届いたとはとても思えない。情けないことに彼女を目の前にして、採るべき行動を探しあぐねていた。

行動は少女が先だつた。

「陸！」

俺を呼ぶ凜とした声。

いつもそうだった。

迷い惑つて立ち止まつている俺と違い、彼女は迷わないしブレない。いつだって真っ直ぐ前を見て走り出すんだ。

一直線に走るその背中が眩しかつた。だからいつもその背中を見失いように追いかけていた。

まるで翼が生えているみたいに軽やかに、その可愛い容姿と相まって彼女は天使のようだった。

「もう我慢できないッ！」

そう天使のよう『だつた』んだ。

どこぞのモーニングのコーンフレークの『ゴリラの如く』。発情期の『ゴリラつて危険じゃないの？ そんな疑問がぽんやりと浮かんだ瞬間だった。

「陸！ 陸陸陸―――ッ！ 好きだ、ラヴだ、抱き締めたい！

わあしよう！ すぐにやろう！」

その疑問はすぐにわかると思った。嫌になるくらい。（ああ、なのに……！）

危険つてわかっているのに！

俺という生き物は 自分の名前をあの頃と同じ温かさで呼ばれ、懐かしさと嬉しさで心臓が一際大きく刻むのを感じてしまった。

だから逃げ出せなかつた。

少女は

紫苑は荷物の薄紫のボストンバックを空港の床に置いたまま、俺だけを一直線に視界に捕らえ、駆け出して来て、そして

その一瞬の郷愁と愛しさと懐かしさが致命的であった。

「じふツ！？」

気が付いた時には紫苑に押し倒されていた。

呆然としていたせいで彼女の勢いを耐えることができずにいや身構えていたとしても屈強なラグビー選手数人がかりでも止められたかどうか。猛牛ですら押し倒す勢いのタックルだ。プロラグビーの選手にスカウト間違いなしの強烈さは、胃の中の食パンが喉の奥まで出てきたのが物語ついている。

ラグビー選手でもない俺が猛牛と化した紫苑を止められるわけでもなく、紫苑を抱いたまま空港の床に背中から押し倒される。

「いてて……うッ！？」

現金なもので、痛みは未体験の感触に忘れてしまつ。

隙間なく抱きつかれて、その時初めて俺は女の子の身体とは凄く華奢で柔らかいんだなと驚いた。

ひどく軽くて、乱暴に扱つたら壊れてしまうような脆さが手のひらを通じてぬくもりと共に伝わつてくる。それと同時に凄く心地の良い感覚と強い存在感が、呆然とする俺の身体にダイレクトに伝えてきた。

「……し、紫苑なんだよな？」

恐る恐ると言う感じで、胸の辺りに頬をぐりぐりと頬ずりし続けている女の子に尋ねる。

「うむ！ 帰つて来た紫苑ちゃんだ。……久しいな陸」

顔を上げてサングラスを外すと、鮮烈な双眸と出会い。

ああ、そこには紫苑がいた！

小学生の時に別れ、美しく成長した幼馴染が、……洗練され美しさを増した容貌。でも確かに子供の頃の面影を見つけて胸が熱くなる。生き生きと活力に満ちた黒瞳は、至近距離で見れば吸い込まれてしまつほどの輝きを放つてゐる。

花の綻びを思わず可憐な微笑みを紫苑は俺に向かへ、

「乙女ザムライ参上だ！」

そう言って俺に笑いかけた。

第三章 動き始めた乙女の夏

『天堂陸』

胸の中の紫苑の存在が信じられなかつた。

まるで真夏の大気が生み出した陽炎のように存在は鮮明なのに、
掴むことのできない不確かさ……そんな感覚を田の前の少女に感じ
ていた。

実を言ひつと紫苑に会つて、喜びよりも戸惑いの方を多く覚えてい
た。

普通は喜ぶだらう。なにせ幼馴染みがアメリカから帰国したのだ。
それも自分を　俺を覚えていてくれた。

そのことに対する嬉しさ。それは空港で紫苑を見た瞬間感じた胸
一杯に広がる歡喜。

それが裏付けている。

けど、歡喜が過ぎた後に来たのは戸惑いだ。

戸惑いを覚えた理由は紫苑の『今』にある。

朝見たCMが頭を掠める。

そう　紫苑の祖父。

つまり祖父の綾崎秀士は世界的に有名な巨大複合企業経営者の社
長だ。色々な事業に幅広く手をつけている相当な資産家　い

やそんな一資産家という小さい枠に彼をくくることはできない。

綾崎財閥の総帥である綾崎秀士。紫苑はその孫娘だ。

俺と紫苑は今こんなにも近いのに、突如見えない巨大な壁が立ちはだかった気がした。

『見上げるような世界』

確かに昔の紫苑の家は俺の家に比べてかなり大きな家だった。俺の家の数倍は軽くあつたと思う。屋敷というような豪邸に公園かと見紛うばかりの広い庭があつた。

けど、昔はそんなことはどうでもいいことだった。

富豪と庶民の世界の違いなんて全く気にならなかつた。

『今、目の前にある巨大な現実』

けれど、今はもう理解してしまつた。

事業拡大のせいでのじたアメリカへの引越し。それによる紫苑との別れ。流れていく五年という年月。

紫苑と離れていた五年間の歳月が俺に理解させてしまつていた。その歳月は分別のない少年を、世の中のことと諦念混じりの理解ができるような青年へと変えていた。

社会に生きていく上で縛られる『常識』と言ひやの鎖。年を重ねるにつれて、隠す事を余儀なくされる感情。廃れていく情熱に、蓄積していく虚無。

『知らないことを気が付くのは、必ずしも良いと言えない事実』

そして、紫苑と自分との違い。

それはテレビのCMや新聞などで、克明に慈悲なく圧倒的な脱力感を持つて俺に伝えてくる。

(『住む世界が違うんじゃないかな?』)

叶わぬ夢ほど嫌なものはない。

憧れるだけ憧れ続け、届かず、掴めない夢。求めて膨らんだこの憧憬は一体どうすればいいんだ?

田の前にいる少女は、本当はこんなところにいるはずのない存在だ。

非日常の顯在。それが戸惑いの理由だった。

そんな事を考えながら、俺は五年振りに会つ幼馴染みを見上げる。長い髪は活動的な印象のショートカットになっていた。

(髪、切ったんだな……)

その一言を胸の中で飲み込む。

そんなことはCMを見ていればわかっていたことだ。

紫苑がその長い髪を切った時期だつて本当は覚えている。でも俺はこの時、何を言えばいいかわからなかつた。

胸が高鳴る。感動に震えに震えるのは身体なのか心なのかわからぬ。この切ないような苦しいような、それでいて暖かいこの気持ちはない。

「陸、これは肯定の合図と受け取つてよいのか? つまり寝室のハート型の枕でイエスの選択といつことだな? ふつ、そうと決まればムラムラがもう我慢できんで」される。ほらあそこのトイレでいい。

行くぞ！ わあ行くぞすぐ行くぞ今行くぞ！ 色々な意味でいくぞ
！」

あ、絶望ですね。（乾いた笑み）

五年振りに再会した幼馴染みは、いい感じに振り切っていた。もう常識とかそういうゲージが。

たぶん存在しないんじゃないかな、そういう単語が。乙女として守らなければいけない絶対境界線の遙か向こうで魔王笑いしていた。

勘弁してくれよ、もう！

「い、一体何をする気なんだよ！」

「何つて、それは陸、ナニに決まっているだろ？？」

声を荒らげる俺に、にやりと笑う様は下手に容貌が可憐な分、その威力が凄まじい。

（親父ネタかよ！？）

戦慄する。マジで戦慄する。

その可憐な容貌で、その返しはして欲しくなかつた！ 思春期の少年の憧憬がハイエナに骨まで貪られていくかのようだ！ 痛い、痛いよ！ 数瞬前までのときめきを俺に返してくれッツ！

紫苑、お前がいましたことは、国民的アイドルの主要メンバーが鼻くそをほじつたに等しい行為だとわかつているのか！？

というか紫苑のとんでもな問いかけでようやく自分達がどういう体勢にあつたか、嫌なくらい気がつかれる！

白昼堂々空港の床の上に仰向けで、紫苑に押し倒されている。慌てて視線を走らせて見ると、通行人の多くがこちらに好奇の視線を投げかけている。

「うわっ！？ ちょ、ちょっと！ 取りあえず立とう！ 離してくれ！」

紫苑を離し、急いで起き上がるうと……

「否ッ！ 断じて否ッッ！」

「…？」

手品でも見せられた気がした。

起き上がるうと身じろいだ瞬間、足を絡みつけられ、柔道の寝技に近い状態に持ち込まれ、まるで動きが 馬鹿な、動けない！？

「このままの姿勢の方が、私は超都合がよいぞ？両手の親指を思わずビシリだ」

「お、俺が都合よくないッ！」

乱暴にならぬよう、俺は紫苑を体の上からどかせようと必死の抵抗をする。

するんだけど男と違つて華奢なその身体を、柔らかい感触を強く振り払うことができない。

「むふ〜〜う、その表情……そそるッ！」

ああ、これが悪役に囚われたヒロインの気分なんだな。やべえ、俺、大ピンチじゃないか！

アニメやマンガと違つて、ヒーローはいないし、男を助けてくれるヒーローなど絶対的に存在しない。つまり産まれて男という存在は誰からも救われない悲しい生物なのだ。

「や、やめろ？ な？ やめようよ、こりはまずいよ？ な、嘘ですよね？ 嘘つて言ひてよ」

「マジだツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ！」

「…………」

「何それ！？ 『嘘だツ！』の逆バージョン！ 新しい、新しいけど、今はその新しさは欲しくない！ といつかお前ほんとに帰国子女か！？」

思わぬ返しにたじろぎつつも、突つ込みで応戦する俺だったが、「気にするな。そんなことよりも……ふふふ、嫌よ嫌よも好きのうちで」「うるさい」と

「一言で切つて捨てられた上に、『ジ』の悪代官だよー…？」

ハマリすぎる紫苑の口調と表情に思わず突つ込む。

「だが、まあ安心しろ、陸」

すると紫苑は慈母のような優しい微笑を見せる。そんな顔で笑えばメディアが清純派美少女という単語を使うのも納得できるから怖い。

「優しくするから大丈夫だ、フククツクツクツ、フヒヒッグフフフフフ！」

「ごめん、最後の笑い声で台無しだから！ 黒い本音だだ漏れですから！」

「ぬつ」

慌てて口元を隠す紫苑。けど遅いから。致命的に遅いから。人身事故起こした後に無免許だったというくらいに致命的ですか？

「まあ、流石に『冗談だ』

「あ、ああ。そうだよな……」

あつさり紫苑は俺を拘束から解き放ち、その態度に勝手だと自覚しているんだけど……失望を覚えてします。

（何を自惚れているんだ、俺は？ さっきの紫苑の言葉は『冗談に決まってるじゃないか……』）

知らずうちに紫苑の存在に浮かれていた俺は内心で恥じる。

（俺つてやつは……つくづく単純なんだな）

「私もこんな人の多いところでラヴに持ち込む気は毛頭ない。露出狂ではないからな」

だが、紫苑の発した次の言葉で俺は硬直する。

「ええツ！？」

驚愕の呻きを上げ、落としていた視線を紫苑に戻す。

「じゃ、じゃあ……人気のないところだつたら……どうするんだ？」

恐る恐る探るよつな田つきで尋ねる俺に、紫苑は惹きこまれるよ
うな凄絶な艶笑を浮かべた。

「無論、知れたこと」

それはさながら契約を交わした人間の魂を手にした悪魔の如く。
麻雀で言つならロンを宣言する寸前の人間の超ドヤ顔に近いかも
しれない？

清純な顔つきがじつ転げば、このよつな恐ろしい笑みになるんだ
らうか！？

美女と野獣の題名が違つとこの瞬間わかつた。

美女と野獣じゃないんだ。何で気がつかなかつたんだ、俺は！

（美女は野獣だッ！）

知りたくなかった真理を悟つてしまい、哲学的電流に身を震わせ
る。

だが、俺の震えなど紫苑は待つてはくれない。
形のいい唇が、毒電波を高速シャウトする。

「18禁の激甘ラブ ピーチ萌え的美少女ゲームのよつなラブに持
ち込むに決まつておらうが！」

わかりやすく言えば、少年誌ではできないが、青年誌では容赦無用
にできることだ！」

「か、勘弁してくれ！？ 最近のトレンドはR15ですよ！？
つて言つた……冗談……だよな？ だよね？」
すがるよう俺は紫苑へと問い合わせる。

頼むよ。結構、ギリギリなんですよ。これ少年誌ならトゥ ブルの
如く色々見せすぎて少年誌追放デビューですよ！？

そんな俺に紫苑はきりりとした視線を向けて言い放つた。それは
もう容赦無用に。

「武士に一言はない！」で、「やる」

その真剣の如く切れ味に満ちた鋭い視線！ マジだ！ 彼女は本気と書いてマジだ！

どこぞの魔球を投げる寸前のピッチャーのよつてドス桃色の炎が双眸に燃えているよ。

(このままだと俺は恋の三振打者だ。球場ではブーリング、控えでベンチを温め続け、契約打ち切られる寸前の公園的サラリーマンじゃないか！ とにかく話題を変えないと！)

本能がよこした明確な危険信号。

背筋を絶叫上げて駆け抜けた悪寒に一もなく一もなく飛びついた。「そうだ！ 紫苑お腹減つてないか！？ ほら飛行機に何時間も乗つてたんだろ？ お腹減つてるんじゃないか？」

目を覆いたくなるような不自然な話題のふりかたに引き攣つた笑顔を出してしまう。

もうちょっと、まともなことは言えないんだうつか、俺は？
もう相手の術中にハマつて、何を切るかわからずに出してしまった牌が、

「そうだな。腹が減つては戦ラウができぬ、と言つしな。一今はたらふく食つて力を蓄えるか」

紫苑の上がり牌という……レートが巨額なら「ロンロンロンロオオオオオン！」と脳内分泌が大量に流れるが如くだ。いや、これハネ満跳んで四倍満で役満？ 裏ドラ乗っちゃつてます？

お金払えないでの採血ですか？

(ぼ、墓穴！？)

それは精神的なものだったけど、まるで身体中がバネのようにたわみねじ曲がって、深い奈落に落ちて行つたような気がした。

まさに自分で掘つた落とし穴に落ちた気分だ。切ないも度を超すと、その……犯罪ですよ？

曲がり角の自動販売機で、ジュースを買って飲んで、戻つたら原付に駐禁で罰金とか、それ酷いよー。惨いよ！ 切ないよッ！

この時代、世紀末救世主を望んでいるよ！

誰か取り締まつてください。この世の中の切なさを。罰金は仕方ないですけど、せめて良いを行いをしたならポイント還元してくれよー。七十歳から年金支給の引き上げとか……それマジ犯罪ですよ？ なんてどうでもいいことを考えてしまひへりじに、要は混乱していたわけで……俺、どうなるんだろう？

取りあえず……周囲の田が……もつ本當に痛いんで……お願い助けてください。

『天堂陸』

売られる子牛的感覚で気がつけば、空港にあるとあるレストランに入店させられていた。

あのまさらしものになるのは耐えられないところであつたから、どこか店に入るのは悪い選択肢ではないようと思えた。

だがそれは甘い認識だと思い知らされた。

レストランと言う限定された空間であるからこそ、紫苑の容貌は群を抜いて目立っていた。

ウェイトレスやウェイター。食事待ちの人や、中には食べかけの手を止めて、紫苑に見入っている人もいる。

視線を外せないぐらい美しい容貌。それはサングラスをかけていてもわかるのだろう。

ふとそこにいる利用客の思いが届いたのか、紫苑の顔からサングラスが外される。

誰かが息を飲む音が聞こえたような気がした。

巨大な美を目の前にした時に巻き起こる現象。静かな感動混じり

の吐息があちらこちらで上がる。

ただそこにいるだけで人を惹きつけてしまつカリスマが紫苑にはある。

今、レストランにいる人のほとんどが、紫苑に注目していた。目立つことが嫌いな俺としては、あまり居心地が良くない。事情が許してくれるなら、今すぐにでも背中に羽を生やしてここから飛び出したい気分だ。

やがて、一人のウェイターが注文をとりにやつて來た。

「い、いらっしゃいませ、ご注文はなんにいたしますか？」

見るからに緊張しているが、その視線は吸い込まれるように紫苑だけに注視されている。

「……俺はエビピラフを」

「へ？ あ、はい」

そこで初めてウェイターは俺の存在に気がついたようだ。

おおかた紫苑しか目に入つてなかつたんだろう。

（まあ、別にいいけどね……）

独白しつつも、おまけのように扱われては怒るほどではないけど、正直へこむ。

「え、えっと。その、お連れの方は？」

紫苑に見惚れてしまふのをなんとか断ち切るように、ウェイターは対応を続けようとする。

けれど、その声は哀れなくらいに上ずつていた。

しかし、紫苑はそんなウェイターを筆頭に周囲の注目にまるで頓着しない。

「私はステーキセット。焼き加減はウェルダンで。料金割り増しでもいいから500㌘にオーダーカット頼めないか？ あとつけあわせにフルーツサラダ。無論、ライスは大盛りだ！」

レストラン中に響くかと思われる紫苑のハラペコ宣言に俺を始めた周囲の利用客はテーブルに突っ伏す。

「し、紫苑！？」

悲鳴にも似た声を上げる。周囲のざわめきが嫌なぐらに押し寄せたのを感じる。勘弁してくれ！

今の紫苑の発言は、皆の抱く幻想といつも固定概念を右手で打ち碎く」と120%だ。

というか、ヒロインが堂々と肉つて。しかもとどめに、飯大盛りつて……

「ふ、陸。私の前世はたぶんティラノサウルスだ。そして陸の前世は草食系の動物だ」

「…………」

それは何だ……俺がお前に食べられる運命だと間接的に伝えたいのか？

しかし、言い返せない俺は目をそっと伏せて紫苑のギラギラした双眸から目を反らす。

見ちゃダメだ。見たら勝負始まる以前に決まってしまう確信がある。

ウェイターが「な、なんとかします」と答えてその場を下がったのを見送つてから、気になっていた話題を振ることにする。

決して、紫苑の視線の圧力に負けたわけではない。

「あ、そう言えば紫苑発音が凄いな」

会話の時に英単語が出てきたとき、紫苑の英語の発音が日本人が口にするような和製英語ではなく、さすが帰国子女といつのは伊達ではないと思うくらいに本場っぽいのだ。

「まあ、五年もいれば英語など自然と身につくものだ」

特に自慢するわけでもなく紫苑はさらりと凄いことを言つ。

実際、紫苑にとって英語を話すことはそれこそ日常のこととて自慢するようなことじやないんだろ？

「そんなもんかな。中学、高校で英語を五年勉強しているけど、簡単な単語や文法なら何とか聞き取れるくらいで、とてもじやないけどしゃべれないな」

事実、日本の学校の英語を受けていて英語がしゃべれるよつた生

徒などほとんどない。

四年近く英語を習つていながら、しゃべれないなんて……俺たちは本当に《英語》を習つてゐるのだろうかと初めて疑問に思った。

「ふむ……」

俺の言葉を吟味するように聞いていた紫苑は、ポンと手を叩く。「外国人の恋人が出来たと思つて勉強すればみる見る上達するぞ……まあそんなことは私が許さないけど、なツ」

うまいことを思いついたという楽しげな口調で話していた紫苑は、最後の方で一転 ギラリと瞳を光らせ、語尾の「なツ」つてどこを強いアクセントで言つた。

それは紛れもない警告……脅しだ。

素早く視線を明後日の方に反らし、お冷を口にする。結構かなり本気で料理がくるのを待ち望む俺だった……。

暫くして、頼んだ料理 あればなんだ？

その肉は分厚かつた。大きく、重く、ステーキといつこはあまりにも大きすぎた。

それはまさに肉塊だった。

鉄板の上で湯気を立て、暴力そのものによつに鎮座している様子はキングオブキング。

その肉を切るといつよつは削るよつに引きちぎると、一口で頬張る。

ムシャムシャならまだ可愛げがなくもない。

だが、年頃の乙女がガツガツといつ擬音で肉を食るのはどうだろう、と。

以前、テレビで見たマーヤンガ自然保護区の肉食獣が草食動物に襲いかかる情景がなぜか思い浮かぶ。

気にとれるくらいの剛毅な紫苑の食べっぷり。

これではどちらが男かわからない。少なくとも食べる擬音では、俺は女の子のようなものだ。

その可憐な口に似合わない豪快さとスピードでランチを食い漁る

様子は、少年が美少女に抱く幻想を木端微塵に打ち碎く率、実に120%だ。

幻想に抱かれて溺死する気分はこんな感じなのだろうか？

「ぬおッ！？」

唐突に紫苑は奇声を発して、食べる手を止める。

その表情は大切な何かによつやく気がついたような、後悔と自分が憤りに近い表情を刻んでいる。

「どうしたんだ？ 詰まつたのか？」

「一体どうしたんだらう？」

尋常ではない紫苑の態度に俺は首を傾げる。

「重要なラヴテクニックを忘れていたでござる」

「ラブ……テクニック？」

ダメな予感がした。それはもう凄まじいまでに。つづー、と。

一筋の冷や汗を頬に垂らした俺に、紫苑は続ける。

「あーん、と食べ物を愛しい者に食させね」とこよつて好意度を上げ、恋人の座をゲットでござる！」

紫苑はすでに残り三分の一になつたウェルダンのステーキの残り全てを、「ぬん！」と言フオーラで突き刺すと、肉の欠片と言うより、肉の塊を俺の目の前に向けて堂々と言つた。

「あーん」

その光景はひどくときめかなかつた。

おそらく、俺の心臓の活動状態を心電図で見れば、まったく平静通りだつただろう。

いや、もしかすると上昇するどころか、下降していくかもしれない。

だつて、肉汁滴るこの光景はとても……ときめかない。

まだ見ぬ未来に向つて脱出したいといつ渴望をひどく感じた夏の

毎であった……。

第五章 ニ女ザムライ ラヴ演技

『綾崎紫苑』

『あーんラヴ』いつあんです 作戦 も無事に終わり、意氣揚々と私は伝票を持つて、レジに移動する。

「し、紫苑、俺が払うよ！」

私の行動に陸は慌てて財布を右のポケットから出すが、右手の手のひらを広げることで陸の行為を制止する。

「男に恥をかかせるな」

ニヤリと笑つてみせる。

「紫苑は女の子だろ！？」

「む……男女差別か？」

素早く切り返す。

「そ、差別つてわけじゃないけど……そのやつぱり、何て言つが……」

「……」

言ひよどむ陸に、天使を彷彿とさせる笑みを意識的に浮かべる。『気にしなくていいぞ？』この紫苑ちゃんにランチを奢られたこと

を一生胸に刻みつけてくれれば、全然構わないぞ。むしろこちらの狙い通りだ。こうして陸に恩を売り、逃げ道を一つ一つ丁寧かつ偏執的に塞いで私の虜にする作戦の一部だからな。全然気にしないでくれ

「！？」

陸はなぜか顔面を蒼白にした。

突然、氷河期に閉じ込められた恐竜のよう、激しく体を震わせる。

まるで重大な禁忌を知らずうちに犯してしまった罪人のような悲痛な表情だ。どうしたというのだろうか？？

「絶対、払う！」

「駄目だ、認めぬ！」

駆け寄る陸に、刃の鋭さで陸の主張を切り捨てる。棒立ちになる陸。その隙を逃さずレジへと猛ダッシュする。素早く福沢諭吉殿を一枚、高速でカウンターに叩きつける。

「娘ツ、釣りはいらぬ！」

「あ、ありがとうござります！？」

私の剣幕にレジの娘は震えつつ、料金を受け取る。

「で、ですが、お釣りを……」

「ならばその本当にその元に届くかどうかもわからない募金箱にでもいれるがいい！」

「ま、待ってくれ、俺の分は……！」

呆然とした状態から陸は慌てて財布を取り出しつつレジに近づくが、獲物を狙うムササビの如く手首のスナップを使って、陸の口を後ろから塞ぐ。

「ふむうツツツツー！？」

突然の拘束に驚愕の声を上げる陸。

陸の唇の感触は手のひらを通して、私の胸をせつなぐラムラムと焦がす。

陸の吐息が私の手のひらをくすぐるのは答えようのない快感だ。

はあはあ、たまらんッ！

私は特にサドというわけではないのだが、こ、こここ、これ私の足の指をな、なな舐めさせたらどうなつてしまつのでござりやうか！（むはあああああツツツ！）

まずいまずい！ 愛しい者に強制する背徳感と征服欲のせめき合ひが、私の乙女中枢経路にスパークを生み出す。

（取り合えず、あとで手のひらに口づけよ。否、舐めまわそつ）

そう決意する。

それにしても、ああ、なんと素晴らしい唇なのだ。

いつかこの唇を私だけのものにしてやる。私のもので万歳だ。何と最高なんだ。神様の贈り物に違いないな、うん。

ラヴで緩みきつた笑いを口に象りながら、陸を羽交い絞めして、空港のレストランを後にした。

「けどさ、紫苑。これからどうするんだ？」

場所は変わって空港から駅へと向かう改札口周辺。あたりは相変わらずの人込みの密集地帯だ。

「……とりあえず家に行くつもりだが？」

平常心を装つて答えるが、陸の言つてゐる意味は分かつていた。

おそらく、今日どこで宿泊するか聞いているのだろう。

なにせ、以前私の住んでいた家は現在取り壊されて駐車場になつているらしい。

（さて……これからが一勝負というわけだな……）

計画は単純にして絶大。强大にして無比。最強にして完璧。

計画の内容はマルオ風に言えば、ズバリ陸の家に転がり込み、こ

の夏の間に陸の心を射止める事にある！

（既成事実さえつくれば、お爺様も納得をせる事ができるに違いない！）

つまり、そう言つ事だ。

そのためには、駐車場になつてゐることは知らなかつたといつこにして、陸の家に厄介になりラブチャンスを摑まなければ……！「何がつて……その……紫苑の家、引越ししてから駐車場になつてるんだぞ？……一体どうするんだ？」

「な、何いいいッ！？ 私は家なき子の少女になつてしまつたって事かッ！？」

証拠がでそろつて、にしつちもさつちもいかない犯人のような切羽詰まつた声で、私は狼狽する。紫苑ちゃん迫真の演技だ！

それは周りの人々が何事かとこちらを注目していることから明白だ。

「そういう事になるけど……」

「ああーッ、何てことだ！ 紫苑ちゃんアルマゲトンの大ピンチッ！ 赤信号で飛び出してしまつた氣分だ！ お子様にも分かりやすく言つならば、ウルトラマンの必殺技のスペシウム光線が怪獣にきかず『これでは地球の平和が……』ってな感じの地球規模級の大ピィイーーンチッ！」

ついでに頭を抱えて、その場で膝を付き、大地に上げられた金魚のように、のたうち回つてみる。第二次成長期の暴走といつものだ。七転八倒、かえるぴょこぴょこみぴょこぴょこ！

「分かつた！ ともかくこんなところで暴れるんじゃない！」

陸は周辺の視線が気になるのか、落ち着かなく視線をさ迷わせながら、私に注意を送つてくる。

「では……泊めてくれるか？」

ムクリと、起き上がりつて陸へと尋ねる。

「分かつた！ 本気で、分かつたから！ 泊めるよ、泊める！ 泊めればいいんだろ！？」

陸の肯定の返事に立ち上がって、私は両手の親指をビシッと立てる。

それを見た陸は半眼で疑わしそうに呴く。

「何か……俺……騙されてないか?」

「気のせいだ。たいいく体育の二つ目の《い》くらいどうでもいい事だ」

「それは確かにどうでもいいが……」

訽然とせずに首を捻る陸。

言質を取つた私は強引に陸の手を取つて、駅の改札口へと引っ張つて行く。

「何かな……気になるんだが……とても気になるんだ……」

「気にするな。少年よ恋心を抱けだ!」

「……大志だつて」

そう訂正つっこみを放たれながらも、私たちは陸の家へと向かつた。陸の手を後ろ手で引きながらテスノのライトばりの笑顔で私は笑う。計画通りだ。

時々、私は自分の才能が恐ろしくなるでござる。

そう、愛しきものを攻略するためのテクニック。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴ演技》!

愛しいものを手中にするためには、悲しいが……優しい嘘をつかなくてはならないのだつ。

今のところ《陸・陥落大作戦》は完璧無敵でござる。スペインの無敵艦隊だ。

いざれラヴといつ名の海を、我が艦隊が征服しつくす日も近いだらう。

なつははははは！ 畏輩のラヴに不可能はないッ！

第六章 ニセザムライ買い物をする

《天堂陸》

とりあえず紫苑の話を聞いてみると、夏休みの間くらいは俺の家で世話になりたいらしい。

それなら、色々日用品などがいるだろうとこいつことで、俺たちは地元駅のデパートへと向った。

それが間違いだったと言えなくもない。

「買つものが一つある」

紫苑の荷物をデパートの預かりロッカーに預け終わると、彼女が真剣な表情で俺を見る。

端正な容貌の紫苑が真剣な表情をすると、「冗談抜きに惹きこまれそうになる。

「重要なのだ。この戦ではなくてはならないもの。これを身に着けているかどうかで、勝敗は決まると言つても過言ではないものだ」

拳を握り締め言葉を紡ぐ様は、本気の一文字に刃がある。

「一体なんだ？」

緊張して尋ねると、紫苑は重々しい口調で言つた。

「勝負下着だ」

「一つ確信した。

「一つは聞いた俺が馬鹿でした！

もう一つは彼女は恋愛バトルマシーンだということだ。しかも危ない方向にこのマシーンは壊れている。大ピンチだ。お子様は真似しちゃいけない。有害指定だ。助けてくれよッ。俺は逃げた

グワシツツ！

だがそれは……猛禽の鋭い爪のように掴まれた紫苑の手を振り解かないと無理な話だ。

「陸の協力が必要なのだ。武士に刀がいるように、紫苑ちゃんには勝負下着が必要なのだ。ほら、あれだバカボンのパパにハラマキがなければ、それただのバカだろ？」「

否定したかった。ただのパパになるだけだと。そんなことはない、と。

けれど鬼すらも斬り捨てそうな紫苑の鬼気の宿った瞳に俺は……

「そ、そうだネ……」

ああ、俺を馬鹿にしてくれていい！　俺は主体性のない日本人だ。駄目な男さッ！

「その意氣や良し！」

ビシリと紫苑は仁王立ちに、右の人差し指を天へと押し示す！

「いや、女性下着売り場に！」

「お、おー……」

テンション高い紫苑を前に、力なく右拳を振り上げるしかなかつた。

ああ、とっても売られていく仔牛の気分……

紫苑は狩人の視線で、色とりどりの多くの下着を鋭く睨みつける。

これだけの下着の量があると、恋愛ヘルマシーンの紫苑と言えどもすぐに選ぶのは困難らしい。

一方、俺は他の女性客の視線が物凄く痛い。つーか、いたたまれない。

この女性下着売り場にある独特の雰囲気に、もの凄い重圧感を覚えていた。

そうさながら獰猛な獣がいる檻の中に閉じこめられた気分だよ。

そして、檻の鍵は紫苑が握っている。

とどめに猛獸の名前は綾崎紫苑だ。

「むう……陸はどれが好きだ？」

「うえ！？」

思わず呻き声を上げる。勘弁してくれッ。これある意味犯罪じゃないですか！？

まったくもって人が死ねるくらいの衝撃ですよ？

涼しいくらいクーラーがかかつてている店の中で、脂汗が額に噴き出すのを感じる。

紫苑は手近にあつたピンクの可愛らしきフリル付きパンティと、アダルト満点な黒いランジェリーに、清純なくせして過激な露出の白の紐パンを掴み、眼前に掲げる。

さながら水戸黄門の印籠の如し勢いで。

「う……あ……」

拳銃でも突きつけられたかのように硬直して動けない。

紫苑の持つ下着から視線を床に逸らすと、適当な方向に右の人差し指を向ける。

「あ、あれがいいんじゃないか？」

当面の危機を逃れるための露骨な話題そらし。それくらいしか俺の打つ手はなかつたんだッ。

すると、

「…………ほう！」

何か感嘆する紫苑の声に、慌てて自分で指差した方向を見て凍り

つぐ。

そこには、今年の夏の新作の下着が売り出されていた。
田に飛び込んでくるのは『破滅』の一文字。

『これで彼氏のハートをまるごとゲット。セクシーランジェリー最新作！ これで彼もイチ 口口よ 』

そのランジェリーの形体はずばりハート。

指の第一関節程度の幅のハート型ランジェリー。申し訳程度に胸を覆い、胸谷間、下乳、腹部を大胆に露わにしている。股間の切れ込みは急角度すぎ、おそらく背中はもちろん尻なんかはほとんど丸出しなのではないだろうか？

色はプラチナに水色がかかった光沢のある生地で、ガーダーベルトも同じような生地でできているみたいだ。

これを纏った紫苑を想像する。

（や、ヤバい……ッ！）

鬼に金棒、虎に翼、弁慶に薙刀、そして紫苑にセクシーランジェリーだ！

セクシーランジェリーという神器を身に纏った紫苑は、まさに一騎当千の古強者になるに違いない！

危険だッ！ 僕はもつとも渡してはいけない相手に、危険物を渡してしまった！

触れてはいけない運命のスイッチを押してしまった俺は、ただ破滅へと加速。狂加速！

壊れた機械のようにギギギと不協和音を立てながら首を紫苑に向ける。時間が停滞したような感覚が襲い、視界がブラックアウトしたかのように歪む。

グニ~~~~~！

そして、紫苑の表情を見た瞬間、絶望で田の前が黒く明滅する。

紫苑の体躯から空間を歪ますオーラが噴出している。

紫苑は本気になつた獣の瞳をしていた！ テンジャラスピングなエナジーが紫苑の体からプロミネンスのように立ち昇る。

「陸……その言葉の中に漢を見たぞ！」

止めようと伸ばした手は、ああっ！？ しかし掴めない！

ジロットの加速で紫苑は店員から下着をもぎ取ると、試着室へと突撃する。

丁寧に磨き上げられた白いフロアに膝をつく。圧倒的な挫折感が体に押し掛かるのを感じた。

重い……重すぎるよ……なけなしの田舎を、飲んだくれのダメな夫にもつていかれる嫁の気分だ。生きる希望と明日への活力がどこも見あたらないよ！

「陸……来てくれぬか？」

抗えない紫苑の声に、生氣のない微笑みを唇に刻む。

フラフラと紫苑のいる試着室に近づく俺は、屠殺場に引っ張られていく豚だ。

「し、紫苑……あのさ……」

しかし俺の言葉が終わらぬうちに、勢いよく開く試着室のカーテン。

堂々と、ハート型セクシーランジェリー姿で仁王立ちの、紫苑！ 色気など微塵も感じさせないポーズ。けれど、瞳に焼きつくのは、年のわりにムチムチといいますか、正直これはR15ビジュアルか18禁だろと思わず突つ込みたくなるような……

「は、はふん……」

情けないことに鼻血を溢れさせ、ゆつくりと意識が遠ざかるのを感じた……

薄れゆく意識の中、最後に思ったことは、下着の宣伝文句は見事に命中だなど「う」とだった。

第七章 くときめき 恋愛度》を獲得せよ！

綾崎紫苑》

』

（どんぶらこ、どんぶらこ……という感じかな？）

電車の心地良い揺れに身を委ねながらそんなことを思ひつ。人は列車のようだと思う。

列車（人）の車窓（視線）からの景色が、一定のスピードで過ぎ去つて行く。

それはまるで……人間の人生のように錯覚してしまつ。

敷かれたレール（生き方）の到達点に向かつて、列車（人）は走つて行く。

いや半ば強制的に走らされるているのだ。それは生きていく上で仕方がないことなのかもしれない。

そして、私のレール（生き方）は普通の人よりも厳しく敷かれていた。

だが、そんなことは許容できない。

私の人生は私の

私だけのものだ。

私は好きな所で停車したり、時には途中下車したり……フフフ……逆走するのもいいな。

そんなことをしながら、自由に

自分の思い描いた到達点

へと行きたいのだ。

(それが漢と言つものだ。……私は女だがな)
まあなんにせよ……

(これからが始まりといふことか！)

またもや私を抱きしめ口付けをしつつ、熱烈な言葉で私を口説く
陸の妄想をしながら、ラ、ヴ必勝の決意を新たに心に刻み込んだ。も
う微塵切りにするくらいに。

電車から降りると、駅のホームに漂っていた熱風の歓迎をその身
に受ける。身体に叩きつけられる暑さとなんと表現していいかわか
らないが、この独特の匂い。ああ日本に帰ってきたのだなと思えた。
日本も充分に都会なのだが、住んでいるのが日本人だけのせいか
どこか柔らかい雰囲気があるように思つ。

アメリカは多民族国家の国だ。雑多な雰囲気と雄雄しいまでの世
界の広がりが感じられる。

日本はどこか優しい佇まいを感じる。

(やはり日本は良いな)

帰つてきて、やはり自分は日本人なのだと改めて思つ。
そして何よりもここには陸がいる。

私にとつてはそれが何よりも重要で大切なのだ。

どれくらい大切かと言えば、私が教師ならばテストに絶対出すく
らいだ。要チエックと関西弁で叫びながら、無意味にボールペンの
ノックをプツシューしまくるくらい重要なのだ。

実は……私こと紫苑ちゃんは半ば家出をしてきたのだ。

理由は祖父であるお爺様に、かなり強引な形でとある男性と婚約
させられたからだ。

婚約者の名前はアレックス・バグネットといふ。

世界でも五本の指に数えられるくらいの資産家の息子だ。こやつ
と婚約し、結婚するとなると我が綾崎グループの事業は大きな躍進
を意味することとなる。

だが、はつきり言つて私はアレックスのことは全く興味がない。

アウトオブ眼中だ。

どうでもいい感じだ。

そう まるではずれのアイスの棒くらうでもいい。

そんなどうでもいい相手に私は自らの処女を捧げる気は毛頭ないツ！

私が好きな相手にこそ、私は自らを捧げたい。それは陸において他にいのないのだ。

だからこそ 右拳を握り締める。

（既成事実を手に入れる！）

そう……織田信長が今川義元の大軍を前にした時、乾坤一擲の奇襲攻撃をしたように紫苑ちゃんは陸との間に既成事実を手にするのだ！

出来れば、今、流行りの出来ちゃった婚なんて望ましい！

私は攻める女だ。今時、待っているだけの女など意味などなし！

乙女として存在価値なし！

押して押して押して押し倒す！ それこそ我が恋愛道！ 倒す、脱がす、頂くだ！

お爺様に産まってきた初孫を、水戸黄門の印籠のように見せてやればこの戦は貰つたも同然なのだ。

入念な準備をしてきたといえ、残された時間は少ない。

そう……何としても私は陸に告白されねばならない！

この夏に私は全力を尽くすのみだ！

私は横目で陸を見やる。

問題はどう陸をゲットするかだ。やはり、こじはこの紫苑ちゃんの色氣で骨抜きに陥落するのが手っ取り早いだろうか？ というか今すぐ押し倒したらいいんじゃないだろうか？

（む……何だ？）

『陸・陥落大作戦』を思案中だった私は、陸の差し出された右手を見て、困惑に眉を寄せた。

しかし次の瞬間、紫苑ちゃんの明晰な頭脳は解答を弾き出す。フ

フフ、たまに自身の頭脳の冴えに恐ろしくなる今田の顔でござる。

「ワン！」

自信満々の笑みを浮かべながら、陸の右手の掌の上に自分の掌を重ねるように乗せる。

「お手じゃないッ！」

「ち、違うのか！？」

確實だと思つていただけに私の動搖は大きい。なんといつ不覚だ。

「全然、違う！」

「むつ……では何だ？」

陸をジッと見つめて尋ねる。

陸はそんなにこっちを見ないでくれよと呟く。そんなこと言われたらもつと見つめたくなる。だって紫苑ちゃんは好きな相手の困った顔を見るのがちょっと好きなのだ。しかしなんて、ついやつなんだろうか。

「や、その……」

言葉に詰まり、私から視線を逸らしながら続けようとする陸の姿は本当に何と言つか…………「うう？」

恥らひ陸の表情は草原を懸命な仕草で駆ける子ウサギを彷彿とさせる。

私の胸に内蔵された乙女回路が、ぎゅんぎゅんと駆け巡る。それはもうぎゅんぎゅんと。ピンク色のワガが心臓をぎゅんぎゅんと甘く締め上げる。

これはもう押し倒してもいいのだろつか？　といづか許されるよな？

「り、陸がいけぬのだぞ？　そ、そんな表情で、はあはあッ、私を昂らせよつて！」

「な、何か勘違いしてないか！？　や、やめろよ紫苑！　何だよ、その危ないピンク色に染まりきっているおかしな笑みは！？　やめろ！　手をわきわきと蠢かして、下から火傷しそうな視線で俺を見ないでくれッ！」

陸はうろたえる。だが、それは私の熱を高めるだけの行為だ。

ああっ。襲いかかりたいなあ。

人目がない場所に引きずり込んでちょめちょめしたいでござるなあ。服を縦横無尽に引き裂き、体をまさぐりたいなあ。甘い悲鳴で鳴かせてみたいなあ。

私は溢れてきたよだれを手の甲で拭う。といつか、もう辛抱堪らぬ！

「そうじゃないって！ 違うんだって！」

「む？」

今まさに雄々しく大地を蹴り、襲いかからんとしていた私は、きつい陸の叫びに制止を余儀なくされる。チツ、私としたことが襲いかかるタイミングを逃してしまった。

「ようするにだ！ アメリカの長旅や、その……時差ボケとかで疲れているだろ？」

こつちまで恥ずかしくなるくらいの顔を赤らめて陸がそう尋ねてくる。

フフフ……相変わらずウブな男だ。そんなお主に私は胸キュンなんだぞ？

「だからバック持つてやるよ」

そう言つて陸が、私の肩からバックを取り自分の肩へと担いで、手を伸ばす。

それを見てボケることにする。人生メリハリが大切だからな。バッグに触れるや否や私は叫ぶ。

「む、強盗！」

このボケに陸は一瞬棒立ちになる。

「なんでやねん！？」

それは……まあつゝ「」むのも最もだと思つが。こればかりはやめられない。むふ。

「「」は普通、ありがとつて感じになるシーンだろ！？ なんで強盗なんだ！？」

本当は《ときめき 恋愛度》が三ポイントアップしてたりするが、それは陸には内緒だ。

しかし、「」のまま陸に「」ねられるのも面倒なので、話題を変えることにある。

「しかし、吸い込まれそうな青空だな……」

陸のつっこみを軽くスルーして、蒼穹鮮やかな空を見上げ、サングラスの僅かな隙間から飛び込んできた日差しの眩しさに目を細める。

「えー？ まさかのスルー？ ま、まあ…… そつかな……」

なおもつゝ「」もつとしていた陸は、突然の話題の変化に困惑しながらも答えを返す。

答えを返した陸は、私と同じように空を見上げる。

爽快で鮮烈なこの空氣。「」の夏だけの大気の海が頭上に広がっている。

空は青く、高く、澄んでいる。そして大きかつた。青いパノラマは何処までも飛んで行けそうな高揚感を私の胸に爽快と共に運んできてくれる。

「俺、夏は暑くて嫌いだけど……「」の青い空だけは好きだな

「ああ、確かにそうだな」

陸の言葉に私も共感を覚えたように頷いてやり、一言じごめをさす。

「地球の終わりを感じます青さだな」

「ああ、そうだ…って、何でだあああああああああッ！？」

陸は大きくつづりむと、急に虚しさを覚えたのか、自分の額を押

それでため息を吐く。

「全くやれやれだな……」

その台詞を私は何となく真似てみる。深い意味はない。

「うむ。やれやれだな。全く先が思いやられる」

私の台詞に陸は口元を引きつらせる。いい感じに暖まってきた

つ。

「だ、誰のせいだと……お、思っているのかなあ？」

所々言葉を破綻させながら、妙に優しい声で陸が尋ねてくる。

(ニヤリ)

心の中でほくそえむ。

「おのれえええええ、あやつめえええ！」

サングラスを取ると、右の拳を握り締めて、仇敵にしてやられたかの如く悔しそうな表情を見せる。

演技はバツチリだ！

「あやつって誰だよ！？ 紫苑のことだらおーっ！」

陸がすかさずつっこんでくる。私は不意にドキリとした。何か本当に胸がいっぱいになつて苦しくなる。

陸が私の名前を大きな声で呼んだ……ただそれだけのことだが、私はこんなにも嬉しくて、だが同時に恥ずかしいような捉えどころのない想いが溢れて頬を赤く染めた。

「つたぐ、何だか紫苑のペースに振り回されまくじだよ……」

不意に突風が吹いて目を細める。

そして、細めた目に映る光景。それは

強烈な夏の日差しを背中に、陸は微苦笑を漏らしていた。だが、それは不快な感情を表しているわけではない。懐かしげな……再会の、おかえりの笑顔だ。

ふわりと陸の手が私の頭におかれる。

「でも……凄く紫苑が帰ってきた気がするよ

そうふんわりと柔らかく微笑んで、私の頭を優しく撫でてくれたのだ。

全身の血がカアーッと頭に上がるのがわかつた。心臓がどくどくと脈打つ。

触れられた頭が……髪が甘く痺れて、胸が苦しい。その笑顔は反則すぎるじゃないか！ というか顔が近いッ、近すぎるッ…。（な、なんだなんだなんだ！ この馬鹿ものがッ！）

陸は私のバックを抱ぎ直して改札口へと歩き始める。その後姿は、私を惹きつけてやまない。

さつきまで撫でてもうった髪に手を触れ、陸に聞こえないよつて私は呟く。

「なにが私のペースに振り回されまくりだ……おぬしなど笑顔一つで私を振り回しているじゃないか……」

「紫苑？」

陸が振り返る。

小走りで陸の左側へと移動すると、陸の横顔を見ながら一緒に歩き始める。

きっと、じうじうそりげない時間が至福なのだと思いながら……ああ……熱い夏が始まる。

日本よ、私は帰ってきたおおおおおッ！

第八章 賴むから俺の話を聞いてください。……

天堂陸》

天堂家

』

「ふは～っ！」

男らしさ爆裂と言えるくらい粋な仕草で、紫苑は俺が出した麦茶を飲み干す。

「陸、もう一杯欲しいで」「やる〜

「何だよ、『やる』って？」

帰国後、何度か聞いたその語尾。

ちょうどいい機会なので聞いてみることにする。

「魂の発露だ」

頬に手を添えて意味なく紫苑は笑う。

その仕草に笑みが零れてしまつ。

待たせるのもなんなので、すぐに紫苑に麦茶をいれてやることにする。

麦茶をいれてやる、とコップを持ったところで紫苑に話しかけられた。

「陸、頼みがある」

真剣な表情でそう切りだしていく。

「ん?」

「執事っぽく淹れてくれないか? あ、なんならメイドさんっぽくでも……」

「執事さんっぽくね、了解!」

危うい要求をみなまで言わせず封じる。危なことこのりだ。といつが紫苑の右手がバッグに延びており、見間違いじゃないとしたら……なぜかメイド服っぽい切れ端が見えたのは気のせいにしておきたい。

「んー……」

とはいえ、どのよろに執事っぽくするかと悩んでいたら、紫苑が立ち上がる。

（不安だ……）

そしてそれは

「じょおおおうッ!」

両眼を光らせてどこぞの宇宙刑事のような雄叫びを上げ、椅子から飛び立つ紫苑のその姿は、荒鷺の如し。

どこから取り出したのか。その右手には執事服。

「いくぞ萌殺みよつけつ」

執事服が空を舞う。

「ぬううつやああああああああああツ!」

「うわつ!?

田にもとまらぬほど勢いで紫苑の両腕が動く。それはさながら千手觀音のよつて、背中からいくつもの腕があるよつに錯覚するほど凄まじさ。

「見るがいい!」これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラガーナセプション》!』

不安は的中する。

気がつけば、俺は一分の隙もなく執事服を身に纏っていた。

黒を基調とした執事服。

燕尾服の後ろは堅い生地で型崩れがなくピンと整つていて否応なしに背筋が正される。シルクの黒ネクタイ。清潔な白いシャツ。黒いラインの入ったズボンと黒艶が眩しい革靴にまつ白い手袋。

まさにバトラーと呼ぶに相応しい装いだ。

ボケもここまで徹底されたら、大阪生まれの大坂人としてはノルしかない。

「どうぞ、紫苑お嬢様」

バトラー姿で透明なグラスに麦茶を淹れる。はたから見たら遊んでいるしか見えないような失笑もののシーンなのではないだろうか？

「むふ、『じつあんです』

しかし、紫苑はどこまでもマイペースである。

お嬢様とはほど遠い素敵なワードをのたまう。といふか勝つた力士がご祝儀受け取るみたいな感じだ。

（ほん一と、外見と中身とのギャップが激しいやつだよな……）

けど、それが紫苑の魅力なんだね。

「陸、そう言えば……『家族の方はどうしたんだ？ 誰もいないようだが……』

考えにふけつていると、紫苑が話しかけてきた。

「ん？ ああ、母さんは買い物で、海は本屋に行つてゐ」

出かける前に見た伝言板の内容を思い出して答える。

「まあ、そのうち帰つてくると

そう言いかけた直後、

「ただいま～」

ほのぼのとした少し間延びした声が玄関のほうから聞こえてきた。

とても一児の母親とは思えない若々しい声だ。やがて外見も二十歳半ばくらいの持ち主がリビングに姿を表す。

若づくりというか、極端に童顔なのだ。思えば、俺の容姿は母さんの血を強くひいているように思う。

田の前の童顔女性が、俺の母さんで、名前を天堂 空音と書つ。

「ただいまの反対はこんばんはー」

さりに母さんに続いて「うちのわけのわからないのが、俺の双子の弟である天堂 海だ。

「おかえり」

帰ってきた母さんと海へと声をかけ、ついでとばかりに麦茶を淹れてやる。

「うむ。では、『陸・陥落大作戦』を実行するか……」

紫苑は小声で何か不吉なことを呟くとすぐつと立ち上がり、リビングの床に正座する。

「え～～と、紫苑さん何を……？」

当然の如く母さんは「あらあら」と頬に手をあてて困ったような顔で紫苑を注目しているし、海は

「陸その格好何？ 執事？ バトラー？」

「……」

海の質問を笑顔で取りあえずスルーする。

「陸は普段は真面目だけど、なんか急にボケるよなー。しかもそれギヤップ凄すぎていつもスベるからなー。同じ顔してるんだから俺の迷惑も考えてね？」

いやいや、それ海に言われたくない。

いつも奇行に走るのは海のほうだ。

なまじ顔がそつくりなのであんまり奇行に走らないで欲しい……

その願いは今まで生きてきて一度も届いたことがない。

だが、今は兄弟間の瑣末なことにこだわっている場合じゃない。

(……何をする気だ？)

小さな戦慄が背中に流れる。流れるどころか走り始めてる。それはもうウサイン・ボルトくらいのフライング気味ですよ！？

「お久しぶりです、ママ上殿」

「あら～。え～とどちら様～？」

母さんの間延びした声が誰何するや否や！

紫苑の瞳がカツと効果音の聞こえてきそうな勢いで見開き、正座の姿勢から床に頭を下げるといつ

ジャンピング土下座！

そしてとんでもない内容を叫ぶ！

「お義母さん、陸を下さい！」

「ぐはああああああああッ！？」

内容の凄まじさに思わず、執事服のまま床にずりこける。な、な

な何を言い出すんだ紫苑は！？

「ひゅー、爆弾発言つてゆうやつか。やるな陸」

海のやつがなにやらひどいこいやがるがこの際無視だ。

なによりも先に紫苑の暴走を止めないと！

「あらあら。まあまあ～。陸の恋人の方ですか？」じりじりそ陸を

よろしくお願ひします～

へへーっと母さんも紫苑に倣つよひ土下座して挨拶を返す。

やばい、ボケが一人に増えた！？

「ちよ、ちよっと待てッ！」

何の疑いも無く信じる母さんの素直すぎる性格に、本氣で焦りを覚えて口を開く。

「うつ！？」

いつの間にか後ろに回った紫苑に、背中越しに複雑な関節技で固められ、あまつさえ紫苑は右手の掌で俺の口を塞いだとしてくるシ！？

(「こつー！俺の発言権を奪う気だ！」)

その執拗さは日本の常任理事入りを拒む中国の如く。

大蛇の如く悪意を持つて動く手のひらを必死にかわしつつ打開策を練る。

「いえいえ、『あらじや』。『初孫』を楽しみにして下さい

「何をいつてるんだああああーッ！？ ふ、不潔だぞ！」

絶叫してしまう。

一部をあまりにも強調した倫理規定を外れる発言に俺は泣きそうになる。というか泣いていい？

「陸、やるな」。もつと陸はウブかと思つたよ。俺も見習わないと
な

爽やかなスポーツマンのような笑顔を浮かべて右手の親指を立て
て笑う海。

「ちょっと無駄に歯を白く光らせてないでフォローしてくれ！？」

「ば、馬鹿！ 母さんこれは違つよ！？」

「初孫楽しみね～」

「ちょっと母さんツ！？ なに夢見る瞳で斜め上四十五度を見上げ
てるのさ！？ もつと現実をちゃんと見ようよ、俺らの年齢はきっ
と年金貰えれないんだよ？ 貢ぐだけ貢いでホストに捨てられる田
舎から上京してきた娘さんの如しだよ！？」

「子供は四人。男が一人に女が一人。程よい大きさの白い家に住み、
白くて大きな犬を飼うことにしよう！ 犬の名前は武藏丸だ！ 彼
には小次郎というライバルがだなあ……」

「紫苑も妄想度一〇〇%の野望を、俺の耳元であたかも洗脳するが
如く呟かないツ！ しかも何その犬のライバル設定！？ 無駄に細
かいんですけど！？」

俺の叫びは虚しくリビングに響き渡る。ちょっと誰か話を聞いて
よ！？ 俺はここにいるよ！？

「俺も彼女見つけて、高校ライフを満喫しよ～

「お、俺の……ツ」

俺は今、張り裂けんばかりの風船だ。

「陸ちゃん、新婚生活を楽しみたいのはわかるけどいきなり別居し
ないで、暫くお母さんたちと一緒に暮らしましょうね～」

「俺の話を……」

ある感情をとき放ちたくてしかたがない。

「結婚旅行は熱海がいいな！ ちなみに浮気は許さないぞ？ もし
浮気したら紫苑ちゃんヤンデレ開眼だぞ？ それから、老後は私
が老人ボケになつても見捨てずつつこみを返してくれよ？」

俺はにつこりと青筋つきの顔面神経症のような笑みを三人にプレ

ガラスアート

「……………」という訳で紫苑の泊まる場所がないから家に連れて来たつて
わけ。わかつた、母さん並びに海?」
「そう言つことだったの~」
「なんだ、つまんねえーの」
「むう~不本意だが…………仕方あるまい」
不満そうに紫苑は呟くが、この際無視だ。この子つけあがらせる
とヤンデレになるらしいからな……用心しとかないと。ヤンデレに
好かれた男の末路は刺殺、斬殺、毒殺ところくなものじゃないからな。
「でも紫苑ちゃん可愛くなつたわね~」
母さんはそう言つと腕組みしてソファーに座つている紫苑を抱き
しめて頬擦りをする。

意味不明のコメントを口にして紫苑は母さんにされるがまだ。無表情の中にもどこか紫苑が恥じらつているを見つけて微笑する。こんな感じの紫苑は可愛いんだけどな。

「そんな」とよつ、母ちゃん、「紫苑ちゃんの帰郷じつかぬやで。」珍しくまともな意見を海がだす。

しかしそれは同時に俺にビンチを呼ぶ

「そりね～紫苑ちゃんはどれくらい日本に滞在するつもりなの？」
海の提案に、母さんは考えるそぶりを見せて、紫苑に尋ねる。

「」の夏が勝負なので、できればこの夏いつぱい置いて欲しいので

すが……」

瞬間、俺の背中に電流走る。

な、何だろう勝負つて？　湧き上がる不安に苛まれる。

「余裕よ~」

俺の疑問が置き去りに、母さんは親指を立てて紫苑に笑いかける。

「大感謝ツ！」

紫苑はガシツと母さんに抱きつく。

何やらかなり二人は打ち解けた様子だ。

叫びすぎたせいか喉の渴きを覚え、冷蔵庫に向かい麦茶をコップに注ぐ。

「でもね～客間がちょっと散らかってるのよね～」

視線を紫苑たちの方に向けながら、何の気なしにコップの麦茶を飲もうと傾ける。

次の瞬間！

少女チックに首を傾けながら、母さんが爆弾宣言を放つ！

「だから～今日は陸の部屋で一緒に寝てくれない？」

「是非ともツツツツ～！」

「ゲハアアツ～！？」

紫苑の返事は音速を越えていた。

「げほげほツ～！」

飲んでいた麦茶を喉に詰まらせ、気管の変なところにはいったいで咳き込む。

海がさすさす背中をさすってくれた。

一切の間を置かず、紫苑は両手の親指を立てて即答してしまい即決。

ま、本気なの！？　これ悪い夢じゃないの！？

しかも紫苑の瞳は獲物狙う鷹のように。

もしくは夜這いを決心し野望に燃える青年のよう、熱を　帶

びていた。

というか紫苑の目が語っていた。

『いただきますッ！』と。

(や、ヤバイ！？)

聞こえてきた幻聴に悲しく鼓膜が震え、背骨が悲鳴を上げる。予感を超えて、確信のレベルまで上がった危機に身を震わせるしかなかつた。執事服で。

第九章 アレックス・バグネット

『アレック

ス・バグネット』

バグネット邸宅

ボクの名前はアレックス・バグネット。

世界的に有名な複合大企業にてバグネット財閥の長男にして後継者であり、美貌と知性を兼ね備えた究極生命体だ。

（ああっ……ボクは美しい！）

絨毯の上でスピンを舞う。そう、美しい白鳥キグナスのようだ。

星々も割れんばかりの拍手でボクを称えてくれるだらう。それアンコールアンコール！

（ああ、ボクは完璧だ！）

ボクのハートはウキウキのしゃかりき。

このハートの熱さは意識しなくても高まり、狂ったようにボクはタップを踏み鳴らす。

それは某国の農民のケチャと言つ踊りを思わず激しさだ。オウ、イエー・ツ、ケチャ！ モンキィーダンスッ！

(ああ、ボクは素晴らしい！)

パーフェクトなボクには、愛しい婚約者がいる。

名前はシオン・アヤサキ。

その美しさは女神だ。天使だ。小悪魔的プリティーだ。

抑えきれない下半身の衝動に狂いそうだ！

下半身が好きだと自己主張、もう止められないッ！

「ハツハーン！」

胸元から取り出したクシで優雅な金髪のマイヘアをアグレッシブかつ纖細に整える。

神が奏でる奇跡は、やがてボクの髪に降りるだろう。

カリスマ美容師などボクの前では一セントの値打ちもない。

そうゴッド美容師のボクの目の前では、な！

(ああっ、ボクは何て素敵なんだ！)

純白のスーツを身に纏い、情熱の紅のネクタイを締めて、バラを口にすれば……ほら完璧。

ボクは美の集結体となる！

輝かしいオーラに、全てを兼ね備え、美男子で、紳士で、資産家で、高貴で、万能で、マーベラスかつエクセレントでエリートなこのボクにもなかなか手に入らない存在が、たった一つだけある。

それが、シオンだ。

「わかつてゐるさ子猫ちゃん。照れて、そしてボクの素晴らしいを覚えてるんだね？ 心配しなくていいよ。ベッドでは優

しく鬭争行為がボクのモットーだからね。愛の聖騎士と呼ばれたこのボクが、燃え上がるラヴでメロメロさ、ウヒ

愛しい婚約者に熱いラヴを加速させる。

マシンガンの如くラヴの弾丸をキミに全弾命中させてあげる所存れ。

そしてゆくゆくはキミをボクの愛の奴隸にしてあげる

「おつと、そういうえばシオンから手紙がきていたな」

ボクは机の上に置いた手紙を開けてみる。

きっと溢れんばかりのラヴが詰まっているに違いない。

まったくもうプリティーなのだから！ 切ない想いでボクが欲しきて、体が夜鳴きしているに違いない。全く、ビバ十八禁行為だ。

ウホ！

「えーと、何々……」

『婚約破棄内容

どこの資産家アレックス・バグネット。

单刀直入に言つが、婚約破棄だ。そもそもアレ公、私はあまりお前が好きでない。

婚約も私のお爺様とお前の父上が決めた問題だ。そんな婚約承諾することはできん。

もう一度言つ。婚約破棄だ。

私は日本に住む天堂陸と言つ幼馴染のことのが好きなのだ。故に、お主とは婚約はあるか結婚などしたくはないと言つことだ。まあ、そんなわけだからせらばだ！

お前のことなどまったく愛していない 綾崎

紫苑より

綾崎

PS・むし

ろ地獄に墮ちる』

「オウ、ジイイイイイイイイザアアアアアアアアアアアースツツツ
！？」

白室のベッドのような柔らかさを持つ高級絨毯の上に両膝を付いて叫び声を上げる。

い、一体何！？ 何コレ！？ 夢？ 幻覚！？ 嘘か真は夢うつつか！？

その驚きたるやノブナガ・オダがミツヒデ・アケチに謀反を起された時の如し。ランマルはどこですか！？

高潔にして気高く、美しい。おおよそ完璧を兼ね備えたボクには、この醜態あつてはならないことだ。

だが、今回ばかりは仕方が無い。例外的措置。不可抗力というも のだ。

「Why my angel！」

この文面から察するにボクの許から婚約者であるシオン・アヤサキが日本へと行方を絶つてしまつたということになる！

当然、彼女の親族の方はもちろん、婚約者であるボクにも今の今までシークレットでだ！

何とガッデムなのだ！ ガッデムフォーエバーだ！

こんなことが許されていいのか！？ いや許されない。

「エドワード！」

我がバグネット家に代々仕えてくれるこの道四十年のベテランの執事を呼び出す。

「はい、坊ちやま」

「このジャップのリクと言ひこのワールドで最も劣つたイエローモンキーのことを調べてくれ！ あと写真も欲しい！」

「すでに用意しております」

優秀なエドワードはすぐにリクとやらの写真を用意しており、ボクに手渡してくる。

書類には、ボクから愛しい恋人を奪つた憎々しい少年の写真がある。

「こいつがリク・テンドウ！」

「ふう～～む……」

庶民にしては美男かもしけないが、男らしさの見えない顔つきだ。パツと見て女の子と間違うような女々しいビーフェイス。所詮このボクの美貌と比べれば、王と奴隸。天と地。ダイヤモンドと石程の差がある。

「オウ、シィイーット！ イエロージャッップッ！」

書類を空中に投げ出すと、ボクは胸元の拳銃を抜き様、絨毯に落ちる前に書類の写真へと乱射する。

ズキューーン、ズキューーン、ズキューーン！

主のボクに代わつて鋼の怒号を上げ、突き刺さる弾丸が写真のリクを撃ち抜く！

穴だらけになつて足元に落ちてきた写真をさらに踏みつけ、踏みにじり、踏み潰してやる！ フハハハッハ！ こうだ！ こうしてこうやってこうしてくれるわッ！

「オウ、サノバビツーチツ、ファッキン、メン！」

一体、この男はななな、な何のつもりだ！？ たかが庶民の分際

で、このボクの婚約者に手を出すとは……！

神をも恐れぬ大胆不敵で厚顔無恥！ ハレンチ満開、サムライ、フジヤマ、スシ、ゲイシャ！

「おのれえええええ～ッ！ しょ、庶民の分際で、このリッチ・プリンス・アレックス様に盾突くとは！」

おそらくリクは言葉巧みにシオンをそそのかしたに違いない！いやもしかするとシオンはリクにエッチな弱みを握られていて無理矢理従わされているに違いない！

なんて狡猾で陰湿でうらやましいやつなんだ！ ある意味尊敬する！

しかし、さすがボク！ 灰色の脳細胞は今日も冴えまくつていて、最高にいハイってやつだ！

乱れた髪を胸元から取り出したクシで丁寧に整える。

紳士たるもの常に身だしなみには注意を払わなければならぬ。そもそもボクとシオンとの出会いは運命的なものだった。思えばボクたちの幸せはそこから始まったのだ……。

とあるパーティー会場で、ボクはシオンと出逢った。
我がアメリカの白人女性に無い纖細で可憐な容姿は、一目でボクを釘付けにしてイチコロにした。

そう……ながらゴキブリホイホイのゴキブリのよう……。
ダイヤモンドにも負けない輝きを放つ神秘的な黒瞳に見つめられた瞬間、ボクの背筋にビリビリと1・2ジゴワットの電流が走った。一目で確信したね、これは神がボクに遣わしてくださった女神だと。

美しさを塗り込めた鼻筋のラインに、少女の清楚さと女性のセクシーさを兼ね備えた形の良い唇……毎日毎晩あの唇が夢に出る。あ……っ。

ボクにあの唇を独り占めさせてくれないだろうか？

そして明るいオレンジのカラーの、それこそ無意識に手を伸ばしてしまったサラサラのショートカットの髪は同じ量の黄金の価値がある。いや、それ以上だ！

さらに、目を奪うような深紅のドレスに身を包んだシオンは、十六歳とは思えない均整のとれたモデル並のスタイルをしていた。ムラムラバディにハラショーロシアだ！

あの胸を驚撃みたい！ 収穫祭だ！ サンバのリズムでドンドンドン！

まさにボクの生涯の伴侶とするのに相応しい女性だ！ 夜のパートナーだ！

そう！ 彼女には美しいボクこそが相応しいッ！

決つして

「 あのどうじょうもない程の庶民で下賤の生まれの極貧家庭で、ろくな情操教育を受けておらず、無教養の非常識な最下級の者にはシオンは全く似合わない！」

そう！！ この高貴で気高いボクこそが、シオンを幸福絶頂に導けるのであり、間違つてもあの少年ではない。

絶対、ない。断じて、ない！ マジありえない！

そう！！！ この神が設計し、神すらをも越えてしまつた無敵完璧超人アレックスの前に立ち塞がつていいものは何人たりとも存在しない。

いや、してはいけないのだ！

「きた！ キタあつ、キタキタキタあああああああああツ！」

ボクのインスピレーションが囁く。

すばらしきイックがボクの口から奏でる寸前のこの昂奮が全身に駆け巡る！

「カツコイイ ああ超絶美形が 滴り落ちる。五・七・五」

ボクは全季節いつでも美しいから、それが即ち季語！

「さすがでござります、坊ちやま」

「ふふふ、よせエドワード。照れるじゃないか」

よおーーしみなぎつてきた！

レバシではいられない！ 彼女にとつて誰が相応しいか……リクに教えてやらねばならないだらつ！

「エドワード！」

近くに控えていたエドワードに鋭い視線を向ける。

「はい、坊ちやま」

すじと一歩エドワードは前に出て、懇懃な態度で一礼する。

「エドワード、ボクはシオンに会いにすぐれお日本に行く。出國の準備と自家用のジムシット機の用意を頼む」

「かしこまりました」

エドワードはもう一度懇懃に礼をして、静かに退室する。広い部屋にはボクがただ独り……

「待つていておくれ……愛しのスイート・エンジェル・シオン！ ボクの花嫁。すぐに超カッコイイボクが迎えに行くからね……」
夜に輝く月を見上げながら呟いた。

第十章 ノ女ザムライ ラヴ駆け引き！

天

堂家 陸の部屋

『天堂陸』

切迫感に襲われながらも、何気無さを装いながらクーラーのタイマーのセットをする俺こと天堂陸は危機に瀕していた。

どのような危機かというと、母さんの提案で紫苑が俺の部屋で一緒に寝ることになってしまったというものだ。

しかも紫苑はパジャマを持っていないというので、下着の上に俺のYシャツを着ているだけという色っぽい格好。

健全な高校生ならば、小躍りしそうな状況だ。

けれど、女性とのこういった状況に慣れていない俺にとっては、負担のかかる切迫感に悩まされるだけだ。

(…………いや、それは嘘かな)

少しして否定する。

俺だって男だ。やはりこういった状況に嬉しさを感じることは否

めない事実だ。

それも もう会えないと思っていた初恋の相手で、大がつ

くほどの金持ちのお嬢様。

そのお嬢様は、顔良し、スタイル良し、家柄良し。

性格は……………多少変わっているが良し。

そんなお嬢様とこんなにも近くにいるのだから、俺はかなり幸せ者なのかもしねり。

（なんだか一人っきりの雰囲気に酔ってしまいそうだ……）

そう思う。

紫苑の下着 空港で買った勝負下着 ハードネイム・ハートラヴ（紫苑命名）の上はYシャツだけという色っぽすぎる格好。この一人っきりだという状況。そして、このなんともいえない雰囲気。

興奮で身体がふわふわして落ち着かない。

ところが、その時、

「海いいを」 『うええたあああ、サムライがあああ』宿敵いいと出会つて、『ざる・ざる・ざるう～』

床に布団を敷きながら紫苑が歌い出したのだから、色々な意味で堪らない。

この一人っきりのドキドキした状況を、甘い雰囲気を、何と言つか…………瞬で壊滅的な状態にした。

デングシーロールを全段直撃した後の腰碎けのボクサーとでも言った方が判りやすいかもしねり。もう正直、立てる気がしない。いやこの場合、マタタビに引き寄せられて捕まり、保健所に強制収容させられたネコの気分の方が正しいと言えるだろう。正直、希望を抱くことができない。

とにかく、俺は思った。

顔に縦線を引きながら思った。

公衆トイレに入つて用を足した後、紙がない事に気が付いたような表情で思った。

(色気が無いっ！……)

あげく！

「ぐわっ！ バシュッ！ ドバドバ、グシャア！ ……フフフ、拙者の刀は血に飢えているでござんな～」

(殺伐しすぎて、ロマンスも無いっ！)

そうだよな……ッ。

紫苑があらゆる意味で普通と違うなんて判りきった事だったよな！？ なに期待していたんだろう、俺…………。

「…………紫苑、寝る準備できたか？」

ため息混じりに、少し虚ろな視線を紫苑に向ける。

すると紫苑は俺と違い、打って变つて明るい口調で返事をする。

「つむ！ 準備万端！ 一〇年は寝られそうだぞ」

「…………それは単純に寝すぎだろ」

軽くつつこむと、部屋の電気を消す。

途端に暗闇と静寂がひつそりと輪郭をもつて部屋に訪れた。外の夜の気配が、部屋の中にすっと忍び寄ってきたかのようだった。

しばしの沈黙が部屋に横たわる。

緩慢な睡眠の欲求が、クーラーが送り出す風のように密やかに押し寄せてくる……今日は色々あってなんだか疲れたな……

「陸……」

「…………ん？」

ある意味油断していた事もあった。

そんな台詞が、もう紫苑の口から出ることが無いと決めつけていたせいもあった。

だから次の台詞を聞いた時、俺は焦った。

「二人つきりだな」

「……ツツ！？」

いきなり心臓の体温が融点を超えて、沸点に送り込まれた気分だった。

「な、な、な、な何、いいい言ってるんだよー？」

「…………」

声は悲しいくらいに動搖していた。

と、暗闇の中……紫苑が布団から体を起こして、俺の方に顔を向ける。

暗闇と言つても、外からの月明かりがあるので、完全な闇と言つわけではない。

だから、紫苑の表情がうつすらと見えていた。

月明かりの下で、紫苑は真剣な表情で俺を見ていた。

それを認識した俺は……！

顔が火照り、喉の渴きを感じる。睡を飲み込むゴクリという音がひどく大きく聞こえたような気がした。聴覚が異常にぐらぐらに鋭くなっている。

「今夜は…………寝かさぬぞ…………」

ゆりりと立ち上がった紫苑が、俺の寝ているベッドへとゆっくりと近づいてくるッ！

彼氏に迫られる女の子の気持ちが、今、非常に良く判つたような気がした。

（何と言つか……おいしいけど、怖いな！？「うんッ！」）

などと思っている間に、紫苑は目の前にいた。

（あ……っ）

と言つ間もなく。

グワツシイイツ！

そんな効果音が聞こえてきやうな勢いで、紫苑に両肩を捕まれる。

あ、あのちょっと痛いんです、けど……

瞳に涙みを潜ませた紫苑は、漢字四文字で言つならズバリ、天下無双。

生死を悟りきつた瞳で宣告された気がした。

『ねしはもう……終わりじや。観念せい』

（本気スかああああああああああああああッ！？）

そんな、幻覚アンド幻聴を見聞きしている中、気が付けば紫苑は俺と鼻の先が触れ合うような距離にまで接近していた！　い、いけないこのままじゃ色々な何かがぶつかってしまうつッ！

「今宵は楽しもうわ…　ふ～ふふ

「ななな、何を楽しむんだよおーーつー？」

もはや凄みどころか、狂氣まで潜ませた紫苑の瞳に、俺は半泣きどじんか全泣きして叫ぶ。内心の思いは『頼むから堪忍や』といつ真合だ。これ一心、R15ですよ！？

と、そこで紫苑は俺の叫びにピッタリと動きを止めると、ちよこんと首を傾げる。

「本当だ……何を楽しむのだろう？」

そのコメントに俺の脳は一瞬動きを止め、その次に脳から送られた指令を実行する。

「なんでやねん！　分からんのかーっ…？」

お、おおお、お前それは反則や。じじじじじじ、じじじまで引っ張つておいて、さ、わざわざがのワイもそれは許されへんわー（何とも言えない感情のあまい関西弁）

紫苑に全力でつつこみを入れる。

「む……では陸には分かるのか？」

「うー？」

「口一口と満面の笑みの紫苑の質問に動きを止めてしまう。

や、野郎……そうきやがりましたか。

ぬかつた。これは紫苑の策略！

さながら紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴ駆け引き》に違いない！

わざと無邪気にふるまつ」とこよつ、相手の本音の感情を引き出そうとする巧みな人心掌握だ！

紫苑、なんて恐ろしい子。どうでもいいけど、紫苑の名前は呪怨に似てるな。

いやいやそれどこのじやない。

そりゃ俺だつて清淨無垢の赤ちゃんとじゃないんだから、分から
ないわけじゃないけれども、だからって！

(い、言えるわけがないだろーっ！)

心の中で絶叫する。

こうなつたら紫苑を丸め込むしかない！　じゃないと俺の立場が
ヤバイ！

捕食者にいつでも食べられる草食動物だと思つなよー？（涙）

「と、当然分かるに決まつてこるじゃないか」

「ほほう。では何なのだ？」

「それは、その…………なんだ……（もう手詰まり）」

早いッ！　早いよ、俺。三秒とすら持たなかつたよ。

田まぐるしく頭脳を回転させる。ちょうど、テスト五分前の最後
の足掻きの如く。

あまり適当なことを言つわけにはいかなかつた。もしあまりにも
軟弱な回答をしようものならば、ピンクに狂つた獸が襲いかかつて
くることは間違ひがない！

確信があるね！

だつて彼女、ピンクの吐息を「フウーフホウーハー」とダークスペイダ
ーのように吐いていらっしゃるんですもの！

少し考え方人がよりずれているが、紫苑は無能といつわけじやない。
むしろピンクに狂えば、これほど恐ろしい野獸はいない。

手負いのトラより獰猛だ。

ここは本当半分嘘半分でいくしかない。そう、最も巧みな嘘とい
うのは真実が半分入つた嘘なのだと何かの本で読んだ気がする。

「一緒に寝る……とか？」

「ふむ……なるほど。よからうー……では……いやシー！」

紫苑が。とんでもなくいい匂いが、柔らかい肢体が布団の中に滑
りこんでくる。

(何言つてんだ俺は——ッ！？)

心の中でもたしても絶叫する。

なにか俺はわざわざ自分から両手を上げてアホのよつこびひながら、崖っぷちに向かつて全力疾走している気がする。先は落ちるしかないとわかっているのに！

そんな俺の心情を置き去りに、紫苑といつ超絶的な女の子的存在が、俺の横に数センチ先に確かにいる。

（う、うわああああああああああッ！？）

背中を向ける。

壁にへばりつく。俺はトカゲイモリスピайдーマン！ 可能であるならば、壁の先へと逃げたい。へたれと呼んでくれていいやー。ああ呼ぶがいいさ！

神様に祈りたくなってきた。

俺だつて男だ。初恋の相手がこんな近くに寄つたら、何も感じないわけがない。

だけど、いつも最後にぶつかる壁がある。

それはやつぱり紫苑を取り巻く状況だ。差別しているわけじゃない。

どちらかと言つと強大な遠慮だ。

だつてそうだらう。たとえるなら、農民の俺は今……一国のお姫様と同じベッドで寝ているもんなんだ。

ぐ、くそ釣り合はない。身分違いにも程がある。

紫苑のことを想えば想つほど。考えれば考えるほどに紫苑と俺との距離を感じる。

痛いくらいに……

恋慕の想いはただ空回りして、紫苑に伝える前に常識や状況に潰される。

好きだつてことすら口にできない。

（やつぱり一緒に寝るなんてだめだよな……）
冷静になつてみてそう結論をだす。

「紫苑……やつぱりや……」

と、そこで気が付く。

あまりにも隣が静かすぎる」と。

おかしいぞこれは。紫苑ならば布団に入るや否や俺を組みしげて
もおかしくないのに……

たとえるなら蜘蛛の巣にひつかかつた虫のように食われてもおか
しくないのに。

「し、紫……苑……さん?」

恐る恐る後ろにいるであろう紫苑を振り返る。

「スー……スー……」

納得した。

いつのまにか……紫苑は眠っていた。

なんつー寝つきの良さだ……。

「まったく……人の気も知らないでさ……」

苦笑を漏らして、つい出来心で紫苑のほっぺたをつんづん右手の
人差し指で突く。

それが間違いだと言えなくもない。

混ぜるな。危険?

いや、この場合エサをあげないでくださいか。
なぜなら

つんづん、と柔らかい頬を突いた瞬間、俺の指は、

噛みつかれます、から。

そ、う、ぱくりと。

パクリと紫苑の唇に食いつかれた!?

やわらかい唇の上と下が俺の指を挟み、優しい甘噛み。暖かい口

(うひやあああああああああああああああああああああああツー?)

背中を海老反りにして悶絶する。

あげくの果てに紫苑の、し、ししし、舌がーー!

腕を細心の注意を払いながら引き抜く! ちゅぽんとまるでタコの吸盤のような音を立てて、なんとか指を引き抜くこと、はあはあ、ぜいぜい、せ、成功する。

「うへん、むにゅむにゅ……紫苑ちゃんベロチューは得意だぞう……」

(聞いてないからー? そしてその実力はよくわかりましたからツー!)

人が混乱の極みにある中、紫苑はと言えば幸せそうな寝顔を無防備にさらしている。

その寝顔に視線がはずせない自分がいた。

紫苑の吐息に、半開きの唇に、閉じられた瞳に、魅了されずにはられない。

隣で寝る紫苑の髪を、俺の出来るかぎりで優しく撫でる。

紫苑の髪は手に心地良く、凄く感動的なくらいサラサラしていた。女性の髪に手を触れ

たのはこれが初めてのせいだらうか。

顔が熱くなり、脈拍が速くなるのを止められなかつた。

この瞬間をひどく幸福に思う。

纖細な波のような幸福感に包まれ目を閉じる。

先程までの気持ちが嘘のよつに安らぎ、ここ夢が見れるような予感がした。

第十一章 朝のラヴ チャンス到来

綾崎紫苑』

『

「む……ひ……ひ……朝か？」

鳥殿のさえずりを耳に目覚めた私は、おそらく二国一の幸せ者だ。思わず右手の親指を立てたくなる。いや、むしろ立てる。

と！

瞳を開けると田の前には陸のアップがあつた！

「！？」

私は驚く。

ちなみに陸のアップに驚いているわけではない。いや、それはそれで驚いているのだが、それ以上に驚くべき事実があるのだ。

なんといつの間にか、私がつ、陸にツ、抱き締められていたからだ！

思わぬ幸福的展開に私の頬は弛みそうになる。いや、弛む。

今ほどクラッカーを鳴らしたいと思ったことはない。今日はハン

バーグを食べよう。

「据え膳食わぬは漢の恥で、」*ざるな*

」のありがたい展開に感謝すべく両手を合わせる。

「ちからも遠慮なく抱き締めさせて貰う」といふ。

ギュウと抱き締め、顔を陸の胸辺りにグリグリと押し付ける。

「グリーン、グリーン」

陸の身体は私よりも一回りほど大きくて、私の身体はすっぽりと

陸の腕の中に収まってしまう。

鼻孔に陸の匂いを感じる。

私はハイエナのように鼻を膨らませた。

（あああああああ、た、たまらん……ッ！）

私はマタタビを手にした猫殿と化した。

恍惚とした溜息を吐き出す。これだけでご飯三杯はいけそうだ。
人間誰しもその人自身の匂いを纏っているものだと思つ。
陸の匂いは何と表現したらいいのだろうか……？

ハンバーグの匂いでもないし、猫殿や犬殿の匂いでもない。

ただ一つ言えること。

それは私が一番安心できで、心地良い匂いといふことだ。
私専用の麻薬のようなものだ。ふふ……胸キュンだな。

（さあーて……）

陸の顔をまじまじと見つめる。整った鼻筋に、ひき締まった口元

は……

「いかん、よだれが……じゅるり」

口からこぼれ落ちるよだれを右の甲で拭き取る。

「ん……？　んん……」

慌てて身じろいだせいか、陸が田を覚ます気配を見せる。

「いかん！　まだ夢の中で、どんぶら！」していひ……

陸の頭に手刀をビシリと落とす。

「うー？ 痛ッ……ああ？ 朝か……？」

だがどうも逆効果だつたらしく、非常に遺憾なのだが……陸は田を覚ましてしまった。

「…………へ？」

陸は自分の腕にいる私を見て思考を止める。

数十秒間、私と陸は至近距離で見詰め合いつつになる。

「…………」

「…………！」

(ラヴ チャンス到来ッ！)

明晰な私の頭脳は答えを導き出す！

さすが私だ！ 愛しいものとの機会を確実にものにする、それこそが恋する乙女の必須条件！

これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ『乙女ラヴチャンス奪取』！

恋する乙女は、機会に敏感なのだ！

機会到来、即奪つように行動！ 先手を打つ。それこそが乙女の恋の成就に繋がるのでござる。

陸の唇を奪うべく、顔を前に……前に、前にッ、前にイッ！

「どわくあああああああああアアアアあつ！？」

陸は奇怪な叫び声を上げて慌てて飛びのき、私の唇の射程から逃れるツ。

おのれ、後一步のところである。

「な、ななななん……なんで！？」

陸は震える指先を彷徨わせ、私を指差す。

「いや、陸が抱き締めてきたのだぞ」

「あ……ああああつ！？」

私の主張に何か気が付いたのか、陸は大声を上げる。

「すまん！ 僕、寝てるとき無意識に側にあるもの抱き締めてしまつたよ。ほ、ホントに『ゴメン、悪かった！』

陸は両手を合わせて平謝りに謝つてくる。

(これは良いことを聞いた。……今度から利用をせしむらね)

心の親指をビシッと立てて、余心の笑みを唇の端に刻む。

(さて、ここにさりに陸に貸しを作つておくか。……)

まあ、恋する乙女はいつでもしたたか。駆け引きが巧みでないと、

な

「ふ～ん……抱き締めてしまつか……」

口調にさり気なく悪意と毒を込めて、陸を半眼でチラチラと見やる。ちなみに演技だ。

「え、え、え？」

私の様子に、陸は言ごよつのない不安を覚えたのか、激しく動搖の言葉をもたらす。

いい感じだ、むふ。

「…………」

黙して陸を半眼で見つめ続ける。

「……この時は、下手に罪を暴き立てたずせずに、ジッと待つのが得策というものだ。」

「お、俺何かしたのか……？」

私の沈黙の視線プラス自分自身の言ごよつのない不安に耐えかねず、陸が尋ねてくる。

(フフフ……もはや紫苑ちゃんワールドの虜だな)

内心でほくそ笑むと、仰々しくため息をついてみる。

「……覚えてないのか？」

陸に鋭い一瞥を投げかける。

「な、何……が？」

陸は緊張した面で、私を見る。

瞳は不安に揺れに揺れまくっているという具合だ。

やれやれというのをたっぷりと込めた溜め息をつき、一気に淡々と嘘の説明を陸にしてやる。

「お前は未來の妻を愛するところのようだ。私をきつく抱擁し、

さりにその後、陸は、自分の顔を躊躇なく私の87センチの胸に、グリグリと発情期の野獣のように押し付けて躊躇し、あげく私の匂いを嗅ぎ、よだれをたらす始末だ

「陸は嘘の説明に顔を真っ青にする。

眼は恐ろしいものを見たかのように見開き、麻薬患者の薬切れのよに歯を力チカチと打ち鳴らす。

（むハ……そこまで真に受けられると罪悪感が……）

そもそも陸は私を抱き締めていただけだ。

しかも、それから後のこととは私がやっていたことをとも陸がやつたことによつて捏造した……というのが実情だ。罪悪感を抱かないわけでもないが、まあ政治家も国民ないがしろにしたい放題でありし、構づまー！

「お、おおお、おおお俺がそんなことをシ…？」

陸は戦慄に身を震わせる。

ああ……つ。だがしかし……フフフ、この戦……むりつたな！
「すみません！ すみません！ „めんなさい！ つ、生まれてきて“めんなさい…」

「まあ……反省しているようだしこ……」

必死の形相で土下座を繰り返す陸へと鷹揚に領いてやり、そのくせ要求する。

「その代わり……私をどこかに連れて行つてもいいわー！」

巧みにデータの約束へとこぎつける。

ふう、たまに自分の頭脳の冴えに戦慄を感じるぞ！ もの。

「……………つ、海で……どう？」「

暫し黙考していた陸がおそるおそるとこつ感じで尋ねてくる。

（海か……）

天井に視線を彷徨わせ、シリコーレーションを開始する。

=ラヴ チーヤンス () b

「よし海だ！ 海で万歳！ 海はサムライ！」^{ひといしめい}連打った甲斐があるというのもよー 作戦成功でござる！」

瞳を輝かせ、右拳を天に届けとばかりに振り上げる。
そしてグッと右の親指を立てる。

「ちょ、ちょっと待て……一芝居と作戦成功ついでのば……どりいじ」とだ？

「う……」

背中に嫌な感じの汗を浮かべる。

調子に乗つて内心の考えを暴露してしまつたようだ。

「それになんか、俺の胸元がよだれのようなもので濡れてるし、なんか胸のあたりがすりつかれたように赤くなつてるんだが……何か俺……また騙されないか？」

陸は半眼で呟く。

「ぬ、ぬう！ じいには押しの一 手で行くしかあるまい。

「いや、気のせいだ。使用後のつまよじへじへじへじでもこことだ」

「それは確かにどうでもいいけどね……」

糲然とせずに首を捻る陸。

そんな陸の内心の疑念を払つよつこ、大声で叩きつける。

「ならば海に行くのだ！ 絶ええ～つ対いに海に行くのだ！ 必ず

海に行くのだ！ 何が何でも海に行くのだ！ チャンスなのだ！ ラヴなのだ！」

陸の胸倉を掴み、鬼気迫る表情で陸に詰め寄る。

「何が何だか良く分からんのだが……」

「ええい！ とにかく海に行くことに決定多数だ！ 記憶にございませんだ！ その案件は担当のものに一任しているので私には関係がございませんだ！」

駄目押しの一言を放った瞬間、ガチャリと、音をたてて海殿が部屋に入つて来た。

「俺のこと呼んだと思って、来たんだけど……」

そこでいつの間にか陸を押し倒していいる私を見て、陸の顔を見る
と、表情を変えずに海殿が尋ねてきた。

「もしかして……取り込み中？」

「うむ。 その通りだ」

とりあえず、海殿には肯定の返事をしておぐ。
と、陸は自分の今の体勢に気が付いたらしく、慌てて弁解しだす。
「ち、違うッ！？ 違うぞ海！ これは、これは罷だ！ 策略だ！
そもそもおかしいじゃないか！ そういうみだらな行為を朝にや
るわけがない！ 紫苑が俺をハメようとしているんだー！ 言うな
らば、これはテロだ！ というか海と連呼して第三者を呼んだのが
その証拠ッ！」

某死殺ノートの真犯人の形相で、陸は叫び、海殿は首を傾げる。

「俺、誤解した？」

「いや、全然誤解していないぞ」

今度は私が海殿の質問にきつぱりと冷静に否定しておぐ。

「紫苑！？ 何をい…… フムウ！？ フグフグ、ンムウ！？」

「海殿の見たもの…… それが全て真実だ。 某人気探偵ものアニメの
コーンも言つているだろう？ 『眞実はいつも一つだ！』とな」

暴れる陸を組み敷き、口を押えてしゃべらせない。ええいしゃべ
らすものか。

「ん、そうだな。つまり陸は紫苑ちやんと朝の《ワカラガ色氣つけ》つてことだな」

「んん！？ んんんーッ、んんんン！..」

「その通りだ、海殿。なかなかの《》観察。紫苑ちやんむふふのふだ。これで事件は解決！……花丸をあげよう！」

「んんぐッ！ ちがつ……ふんぐうううん！？」

やれやれ、陸が何と言っているのか、全く分からなにな……フツ。まつたくやれやれど《》である。

「んじゅ、もうすぐ朝飯だから。まあ……《》ゆくくづ～」

手をヒラヒラと振りながら、海殿は退室する。

海殿が退室して暫くしてから陸を自由にしてやる。

「《》、誤解だ……お、俺は……アガ……ラヴしない……それに色々つけて何だよ？」

何やら虚ろな表情で眩く陸は置いておいて、カーテンを開け、差し込む朝日に目を細める。

「ふ、いい朝だな……」

「な、なんでやねん……ー？」

陸は絶望を表情にはいつつかせ、ついに目を放つとがっくつと力尽きたように布団へと倒れこむ。

それは糸の切れたマリオネットを彷彿とさせた。

まあ何はどうあれ、海行き決定《》である

なつははははははははー！

『天堂陸』

デパートで紫苑の水着や何やらを買い込んで、渋滞に巻き込まれる事なく数時間。

そろそろ海に近づきつつあった。

風の匂いが変わったのは、いつからだろうか？

助手席の窓から入り込む爽快感を含んだ透明な風の匂いを感じ、そんなことをふと考えてみる。

俺たちが乗っているのは日産のエルグランドの七人乗りで、ファンタムブラックが堂々とした存在感と風格を感じさせるミニバンだ。なかなかに立派な車なんだが……車内は母さんが取つてきたぬいぐるみで埋まっている。

犬、猫、オゴジヨ。ゴマアザラシ、イルカ、ライオン、コアラ、親子カンガルー。となりの大トトロ、中トトロ、小トトロ。ウルトラマン、ドラえもん……などなど。

それこそすれ違う車が目を見張るくらいの数だ。

あ……またすれ違つた車に乗っていた人に指さして笑われ……た

.....。

羞恥心はもうどうの昔に品切れだ。

今じゃも、車の中で一人で待たされたりしてもへっちゃらです

III。

や……マジでへっちゃらですか……いひつ。 (恥)

瞳から零れ落ちてきたトラウマを誰にも見つかることないはず。
ぬいぐるみ達は母さん曰く

『ラブで世界を救うの』

らしい。

意味なんて分かんないし、その時のウツトリとした何処を見てい
るのか判断のつかない母さんの瞳も意味不明だ。不明不明！ 全然
分からぬ！

もうラザフォードの散乱公式や正準運動方程式くらい分からぬ！
きっと俺には想像も及ばない深遠な意味があるのだろ。 そう思
う。 そう思わせてくれ！

(でも……ぬいぐるみ買つお金でコニセフやらに募金したほうがい
いと思うんだがな)

それはそう思うだけで、母さんには指摘しないでおく。

指摘して絶叫されながら、泣き出されても怖いからな……。

母さんは普段見られない真面目な表情でピッと背筋を伸ばし、車
の運転をしている。

どことなく微笑を刻んでしまつ光景だが、

「も～、前の車邪魔ね～体当たりして崖に突き落しちゃおつかしく
くねえ、どう思う陸ちゃん？」

五分に一回の頻度で黒い台詞を吐くから堪らない。

「ダメだと思います！ お願いですからそんな残虐行動しないで、
安全運転して下さい。後生ですから。流れ星に祈ってます」

シートベルトを、長年離れて暮らしていた恋人のよつにしつかり

と抱き締めて懇願する。

「ふふふ～もう陸ちやんたらヤダなあ……」冗談よ～
「なりいんデスけど……」

安堵のため息を
「でも～…これがワガンじやなく～、トワシクなら、……殺つてた
かも～」

凍りつかせる…

「…………嘘だよね（滝汗）」

「つふふふふふふふ

「…………」

忘れましょ。忘れましょ。

嫌な事はゼーんふ、青い空が吸い込んでくれるわー…
あつと。

それよつも……チリコと尾行する探偵のよつてこづかなくフロン
トミラーを見上げる。

最後尾席は紫苑と海が座つてこて、何やひせんせんと聲音をトドケ
て話をしている。

(……)

何だるひ～ 気になるな……。

べ、別に紫苑が海と仲良くしてゐから気になるとか、そう言つて
じゃないぞ！

これは……その……何だ……やつー 純然たる好奇心が青年の主
張をだな……

(……誰に言いわけしてゐんだよ、俺は？)
わきあがつてきたシンデレ感情を脇に置いておく。
けれど、気になるのは事実なので、耳をすませてみる」とある。
「だから、この露出度の高い白のビキニで陸の理性をクリアヒヤ
せてだな」

「つむ、つむ」

(ちよ、ちよっと待ってくれ。いきなり何の話をしてこるんだ?)

耳を澄ませた瞬間、飛び込んで来たいきなりの内容にギャップをしてしまい、思わず後ろを振り向こうになる。

「デパートで買ったこのサンオイルを、恥じらいながら……恥じらいながらだぞ？ 塗つてと頼むんだ！ あんまり露骨に媚びすぎてもダメだよ、紫苑ちゃん。露骨に媚びられるとだいたいのヤツは冷めちゃうから。特に陸は眞面目だからな、それが顕著なんだよ」

「つむ、つむ！ しかと心得た」

（心得るなよ！？ 頼むからシ…）

「うまくサンオイルを塗らせたら、さつ氣なく陸の股間に注目だ！」
「ここので、×ていいたら勝負はもうつたね！ 陸は紫苑ちゃんにやつこんだね！」

「な、なるほど……（ゴクコ）」

あ、あまりの内容に泣きそうになる。

「しかし、ここで陸の股間に×ていない。もしくはあまり反応を示さなかつたら……」

「示さなかつたら！？ ど、どつするのだ、海殿！？」

焦りを含んだ紫苑の声。

頼む。何に頼むかどうか分からぬけど、とにかく頼む。ホント頼む！

「ふ・ふ・ふ。この平成のラヴ救世主海に任せなッ！」

（誰だよ！？）

振り向きそのままになるのを堪え、心中で海の胸倉を掴んで呑喝する。

「作戦やつの始も 《海でドッキリ急接近》！」

「つ……《海でドッキリ急接近》！？」

も、もはや言葉もでねえ。心の中で地面に膝をつく。

「やつ。これはね……一緒に泳いでつて陸を誘つてだね」

「つむ、つむ！ で？」

「セイでだね、波の動きに転じて、陸の身体があくまで波のせこと言つことにして……」

「してー?」

「紫苑ちゃんのナイスな胸をだなー…………密着わせるのだー。何か……俺目の前暗くなつてゐるんですけど……何で? お迎え? お迎えですか?」

いや、分かつて。分かつてるとも。ただ逃避したくなる時つてあるよね? たとえば今とか。そういう今とか。

「密着…………!」

紫苑の上擦つた声が遠くで聞こえます。

「サンオイルの段階で陸の理性は破綻寸前! その状態に密着攻撃!

「お、おおお……高等テクニック……ッ!」

(か、勘弁してくれ)

力なく頭をたれる。

何で今朝、俺は海なんていう選択したんだろうか?

少なくとも背後で話すような展開になるとわかつていれば、山こ

したもの……

いやいや、それならば水族館や、色々あつたところのヒル、ビルしてよりによつてこんな危険地帯!..

「そうだ! その後、わざと……」

何かを思つて紫苑の声だが、さりに声を潜められて、聞こえない。

(な、何なんだ?)

「バ、バツチリだよ、紫苑ちゃん!」

感極まつたといつて、さうに疑問と好奇心を強く感じじる。

「そんで、この日の夜に、陸の部屋に訪ねたら~」

「む、訪ねたら?」

(とりあえず鍵をかけておいた)。それも、強力な南京錠だ。指紋と

網膜認証機能もつけよう)

そう決意する俺

陸のバーチャルゲートだよ！」

一 陸のバードをケツモードにしてやる！」

「そりゃケツチ二口だ」

(俺はラグモノじゃない)

俺は出現確率が低いんだ！

今夜は必死の抵抗を決意する。

「男とは抵抗する」ととみつけたり！

怪しき一人の笑い話。

それがホラーの亡靈の哄笑のように鼓膜にへばりついてくる。思わず耳を塞ぐ。

「」

体と心が震える

恐怖は因れりか体が悲鳴を上げてゐるがゆえに

一
九
六
三

それは決して、車内のケーラーのせいではない。
海が……近づいてきた。

欲望、策略、そして恐怖を孕み、青い海原が俺を迎えてくれる。

後者だろう。

天堂陸》

《

俺と海は海水浴場の着替え場を利用するのはめんどくさいので、下に水着を穿いてきた。

したがって、紫苑と母さんの女性陣は着替えに、俺たち男性陣は場所取りに砂浜へと急いだ。

俺はウォーターサーラーと食物などが入ったバッグを持ち、海はパラソルや浮き輪、そして海お気に入りの『コバンザメ君GP01』と命名された浮き袋の一種を担いでいる。

すでに砂浜は、先に海水浴に来た人々のパラソルで埋まっている。なんとかちょうど良い場所を確保すると、他の人に取られないようにさっさとパラソルを砂場に打ち込む作業を開始する。

クーラーのきいた車内とは違い、砂浜は焼けるようなという表現がふさわしい暑さだ。流れ落ちる汗がTシャツに吸い取られてゆく。

「ふー、暑いな……」

青く輝く海へと視線を移す。

刹那、海の匂いを含んだ風が頬をかすめて吹き抜けていく。

「フフフ……」

田を細めて視線を海に向けていた俺は、海の不気味な笑い声に動きを止める。

「……何だよ？　その闇の属性にこれでもかーってくらいに入り込んだ笑いは？」

「フ、紫苑ちゃんの水着は凄いぞ～。なにせこの俺が選んだんだからな！」

踏ん反り返る海。

両腕を組み、瞳は自信満々の光を放っている。

「それなんだがな……白いビキニってのは、ビーチウエアのことだ？」

「ん？　なんだ陸、聞こえたのか？」

そりや、あれだけでかい声を出せばな。

咎めるような俺の視線などどこかふく風といつ具合に、海は高笑いをして肩をバシバシ叩いてくる。……関西のオバさんか、おのれは？

「大丈夫、大丈夫！　惱殺惱殺！　股間が暴れん坊將軍さー。今日

こそ陸は男子から漢だな！」

何でこんなに不安になる台詞をはくんだ、コイツは？

そもそもなんつー下品なことを平氣で言えるんだろうが？

本当に俺の血族か？

なまじ一卵性双生児で顔はもちろん海と似ている。雰囲気や声までそっくりなので、まるで海が言っていることが、自分が喋っているような気になる。

「やれやれだな……」

これからおそらく絶対確実に待ち受けれるであろう展開に頭を抱えた……。

「全く、やれやれだな」

先程のナンパの嵐にため息を吐く。

「まあ、仕方ないさ。紫苑ちゃん可愛いし、スタイルもいいから、男たちはここぞとばかりにナンパしていくわ」

海殿はそう言つが、陸以外の男たちに言い寄られても全然意味がない。

というかうざいだけだ。

「まあ、ナンパの件はさて置き……頑張れよ、紫苑ちゃん！」

「うむ。全力で陸を落とーすッ！」

右拳を握り締め、雄大な青空を仰ぎ見る！

「この青空に私は宣言する。陸は私のモノだッ！」

「勝手に人を私物化するんじゃない」

ナンパ男達に手を振つて、空音殿を引きずつて、陸は半眼で呟く。

「む、陸」

ちなみに私に群がつていたナンパ男たちを追い払ったのは陸だ。

「おつかれ〜」

陸のほうを振り向くと、ほぼ同時に海殿が、陸にねぎらいをかけに行く。

「しかし、母さんもやるな？。何人からナンパされたの？」

「テヘ
六人よ」

「おおゝ、六人切りか……」

海殿は感嘆のため息を吐き出す。

陸は何かに耐えるかのようなく、そんな表情をしていた。

しかし顔はそこへいたが
どうも対照的な一人でいた

「もちろん、ケータイの番号もゲットよー」

「おお～、抜かりなしー」

海殿と空音殿は、そろそろ

次の瞬間！

「あんた人妻やろ―――ツ！？」

陸のパパ殿に代わって、陸は空音殿につっこみを入れる。

「あ……ああ、うん。うんうん。そうだったわね~」

そ
そ
そ
な
何
そ
忘

とか! (?)

今よ^ハやく^ハか人妻たどり^ハことに^ハ氣か付^ハした素振^リを見せる空音殿に、陸は半泣きつつこみを入れる。

一大丈夫、大丈夫。私、啓太さんの事ラヴだから」

「父さんの名は、大地だ―――ツ！！ そもそも啓太つ

んがナンパされた時に貰つたケータイの持ち主の名前やんけ——ツ

二

「阿ミハヤ、櫻、咲耶、ハヤシ

いや、諦めてパラソルの方に空音

殿達と一緒に戻つて来る。

つまり、私のこゝ所へやつてくるところだ。

「つまくやりなよと、海殿が陸に分からぬようにサインを送つて
くる。

(よし！ 女は度胸で『じやるー。）

私は腹を決めると、過去グラビア雑誌とやらで見たモデルのポーズを脳裏に思い浮かべる。水着姿の女性モデルのポーズ 通称女豹のポーズを真似て、陸に聞いてみる。

「どうだ陸？ ……この水着……似合つか？」

《天堂陸》

正直、ピンチだつた。いや大ピンチ。

巨大隕石が地球に落ちると分かつた時に浮かべる天文学者の如しだ。

だいたいにしても、俺の想像よりも遙かに露出度が 漆ま
じい。反則だ。イエローカードどころの話ではない。真っ赤だ。血

まみれだ。ブラツティカーデだ。

紫苑の着ている白のビキニはほとんど胸と股間の重要な部分しか隠していない。

動くだけで、これヤバすぎないか？

何と言つか、ウルトラマンで言つなら胸のカラータイマーが激しくピコンピコン鳴つている状態だ。

「どうなのだ？ ムラムラくるか？」

紫苑の問い合わせるような視線に、俺は追い詰められたかのように口を開く。

「ああ、その…………ちょ、ちょっと露出度高いけど……」

「終わつたああああ…………ツツ！」

いいんじやないかと言おうとするよつも早く、紫苑の絶望的な嘆きに遮られる。

まるで紫苑は敗戦した事實を、天皇陛下から聞かされた日本国民のようにガッククリと砂浜に膝をつく。

あまりの紫苑の憔悴ぶりにかなり動搖してしまつ。

「いや、違つて！ 似合つてるよ！ ホント、マジだつて！」

慌ててそう紫苑に言つものの、

「…………でも陸はこの水着、露出度高くて気に入らないんだろ？？」

紫苑は自虐的な笑みを浮かべる。

「フ…………こんな薄布を纏う淫乱女など、糞尿まみれの公衆便所に落ちたトイレットペーパー並みに、どうでもいいこと言つことか。フフ

……涙が零れてきやがる」

「そ、それは確かにどうでもいいが」

(なんでやねえええええん！？)

俺は俺で心で絶叫している。ホント、俺の胸が張り裂けそうだ……

「陸……」

「陸ちやん……」

海と母さんが、罪悪感を煽る口調と声調で俺の名を呼ぶ。

「な、なんですか……！」

そもそも、俺はそんな紫苑を傷つけるようなことをしたのか！？

(だが、とりあえずフォローだ！)

即実行ーツ！

「違うんだ、紫苑！」

「……何がだ？」

虚ろな視線を向ける紫苑に必死で説得する。

「さつきは、そのちょっと恥ずかつただけなんだ。その露出度高いからや……」

そこで、俺は言葉を切ると……

「だから……その水着、似合つてゐる。……可愛いと思つよ」

おそらく赤くなっている頬を気がつかないふりをする。頭の上にまで湧き上がつてくる羞恥をなんとか抑え込むことに成功した。

「……本当か？」

「ああ……」

視線を落としながらも、しつかりと答える。

「では……キスしたいくらい可愛いか？」

「ハアツ！？」

強烈で突然な紫苑の問いに俺の声は裏返る。
紫苑は俺のリアクションに半眼を持つて応じない、ため息を吐き出す。

「やつぱり口からでもかせといつことか……。あーあ、私は今とも三角座りをしながら、ドナドナを歌いたい気分でいるわい」

(俺もだよーー！)

「陸……」

「陸ちやん……」

海と母さんが、罪悪感を煽る口調と声調で、再度俺の名を呼ぶ。
ちくしょー、てやんでい、バーローッ！（泣）

その時紫苑の方から何か、カチリと音がして、俺は紫苑を見る。

「ドナドナ、ドーナ、ドナ～」

人でも呪えそうな紫苑の歌声に俺は、あえなく撃沈。

「キスしたいくらい、可愛いよツ！」

チラリと紫苑は探るよツな視線を俺に向ける。

「J、これでやつと俺は自由だ！ 大空を飛び回る鳥なんだ！」

「では 押し倒したいくらい……可愛いといつことだな？」

思考が止められる。心臓すらも……

「陸……」

「陸ちゃん……」

海と母さんが、羞恥心を破壊する口調と聲音で、俺を脅迫する。今ここで、引けばさらに状態は悪化することまちがいなし。かといって、進んでも目の前には破滅しかない。

悲しいが、それが現実さ……

「押し倒したいよーーーツ！」

「誰をだ？」

「うぐつ……！」

冷静な紫苑の問いかけに歯噛みする。

もう売り言葉に買い言葉だ。とことんやつたら――――！

両目を閉じながら、自身の最大音量で叫ぶ。

「紫苑のこと、押し倒したいくらいに可愛いよツ――――！」

力チリ。

さつきも聞こえた何かスイッチ音に目を開けると そこに
はiPhoneで俺のシャウトを録音している紫苑の姿があった。

その光景を見て、俺は慄然と顔面に走らせる。

悪魔と契約しちゃつた時つてこんな気分？

「よし！ 既成事実一つゲットでJざる」

iPhoneを頬に寄せ、大切そうに抱える紫苑を見てかすれ声で呟く。

「何か……俺、またまた騙されてないか?」「いや、気のせいだ。どうでもいいことを考えている時くじこどりでもいいぞ」

「それは確かにどうでもこいが……」

「それとせずに首を捻る。

(うう……仕方ないか……)

こいで変につつこんでも、無駄にダルくなるだけだからな……

そう自分を納得させる。

それでもないと生きていけない。こんな嘘と裏切りと偽りで塗り固められた世界で生きていくなにはや……

「そんなことよりも……」

紫苑は手元のバックをゴソゴソとあさる。

つか、『そんなこと』で片付けられてしまひうとで、俺はあなたに慌てていたのか!?

疲労感が両肩にのしかかってきた。

「さあ陸、サンオイルを塗りたくつてくれ!」

デパートで買ったらしいサンオイルを突き出して、紫苑は脅迫に近い懇願してくる。

だが海が言っていた色気とやらば、どうも紫苑は忘れているらしいな。

「紫苑ちゃん、色気は!?」

怒り半分悲しさ半分の海の声に、紫苑はビクリと雷にうたれた時の如く、体を硬直させる。表情は『抜かつたーッ!?』と呟んでる時にそつくりだ。

(つか、年頃の娘が目を見開きながら、大口を開けたまま硬直するなよ……)

けど、このまま放つておくわけにもいかないので、紫苑の名を呼んでみる。

「紫苑?」

「あ、う……ぬう?」

うめき声を上げて、なんとかしようと必死に考えてる紫苑を見ていると、つい笑みをこぼしてしまつ。

強引で直情的。決めたら迷わないその行動力。そんな彼女だから、いつも時に放つておけない。

紫苑の持つているサンオイルを手に取る。

「俺でよかつたら、塗つてやるよ」

驚いた顔をする紫苑に、照れくさいけどもつた。

海上のクルーザー

ツクス・バグネット》

《アレ

「イ～～ツ……イイイイエロオオオオモンキイイイイイイイイ
イ――――ツツツ！？」

サマーなブルースカイに、ボクの怒美声が吸い込まれてゆく。

完全欠落生物リクは、あらうことかシオンにあんなハレンチでセクシーの上に、羞恥心煽りまくりのとんでもない薄布のよつなナイスを着せよつてえええ～！？

「おのれ〜、あの庶民が〜！！！」

次に下等生物のリクは、ボクのフィアンセ・シオンの身体にこともあらうか、サンオイルを塗つてゐる！？ 塗りしだいてい！

おそらく嫌がるシオンの身体を無理矢理に、無能な庶民どもに見せつけるかのように、蹂躪してゐるに違ひない！ クソッ、三流の

AV男優が！

なんといつ下劣で羨ましい男だ！ なんといつ卑劣で最高な男だ！ なんといつ破廉恥でナイスな男だ！

あまりの驚きに南斗水鳥拳だッ！

そもそも、そもそもだ！

「このボクでさえ、シオンの体に触れたことないのに——ッ！」

何というヤツだ！

ボクですらキスは愚かハグもまだ。シオンの手すら握つたことないどころか、半径5m以内に入らせてもらつたことがないというのにッ！

それなのに、あのイエローモンキー・ボッキー・ポンキッキーときたら！

ゆ、許さん。許せるわけがない！

バラバラに刻んで豚のエサだ！

(いやいや！ そんなんじゃ手ぬるいッ！)

凄絶な感情を美しいこの美貌に浮き上がらせる。

「お尻ペニンペニンだッ！ ペニンペニンしてやるッ！」

これはボクのお父様が、お父様の大切にしていた万年筆を壊してしまった時に、ボクにした最も重いお仕置きの一つだ。

あの時の痛かつたこと……！ 今でも思い出せば、涙が出てくる。ああッ、お尻が……ッ、お尻が痛いよ、パパ！

おつと、懐かしい幻痛にお尻を震わせている場合じやない。今は何よりも早くシオンの元に駆けつけねば！

「エドワード、西の砂浜に全速前进だ！」

「かしきまつました、坊ちやま」

《天堂陸》

サンオイルを塗り終わった俺は、早まったことをしたなど、今更ながら疲労に濡れたため息を零す。

(なにせ紫苑のやつ……人の股間を凝視するんだもんな)

今、紫苑はかなり不満と不安の表情で股間を見続ける……凝視

していると言つても差し支えはない。勘弁してくれ……。

「おのれ……やはりこには『海でドッキリ急接近』しかないか…

…ツ

ただならぬ熱情に支えられた紫苑の独白には剣呑すぎる弦きを、決つして聞き逃さない。

「陸、海に入るぞ！ 押し付けてやるぞ！」

内心の感情ただ漏れに紫苑は叫ぶと、今にも海に引き摺りこむ勢いで俺の身体を束縛する！？

(あああーーー？ ヤバい、浮氣現場を見つけられた夫の如くヤバい！？)

「さあ……ゆーじゅー、

「ちょ、ちょっと待て！ じゅ、準備運動をしてからだ！」

瞳に狂おしいものを潜ませる紫苑に本気で怯え、何とか時間稼ぎをしようとする。

「たとえ無駄とわかつても、俺は生きる努力を放棄しないッツ！
「む、確かに準備運動は大切な。仕方ないさつさと終わらせるか……」

紫苑は激情をなんとか自制すると、手早く準備運動を始めた。

紫苑が準備運動をし始めて、俺はすぐに後悔した。

なぜかといふと

紫苑はかなり真面目に準備運動をしている。

それこそ汗をうつすらとかくくらいだ。

その……真面目にやることはいいことなんだが、いかんせん紫苑の露出度の多い水着と、そのスタイルの良さが原因だ！

野郎ども、想像してくれ。

半端じやない美少女が露出度の高い水着で準備運動する様子は、紫苑自身が望もうと望むまいかわらず、艶めかしい媚態を演じるようなものだ。グラビアアイドルのイメージ画像が目の前で展開中なのだ。

しかも、砂浜にいる男たちのほとんどが、紫苑の身体を感嘆の声を上げながら食い入るように見入っている！？

揺れる胸の動きの顔が上下してますよ、皆様方ツ！

それもオジサンやら大学生、俺と一緒に高校生やら……が、我慢できるかツ！

「馬鹿！ 紫苑、真面目にやりすぎだ！」

「む……フン！ ふつ……フン！ ん？ 何がだ？」

「無防備に胸筋の運動をしている紫苑に我慢できず、「乳イ揺れどんじやああああああー、アホーーッ！？」

真っ赤になりながらつっこみを入れる！

そこで紫苑は周りの男たちの劣情溢れた視姦に気がつき、ふと何事か考える素振りを見せる。

「一か恥ずかしくないんかいッ！？」

むしろ俺のほうが恥ずかしいわッ！ 羞恥で身悶えするわッ！ と、紫苑は俺の顔を下から覗き込むように見ると……

「……悩殺されたか？」

そう 聴いてきた。

俺の視界には、ため息が漏れるほど整った紫苑のアップの顔と…… む、胸の谷間が……

「……ツツー？ うわああああああああああああツー！」

即行で紫苑に背を向けて、海へと疾走する！

股間がどうなってるなんて、知りたくもない！

知らない！ 知らないよッ！ 俺はいつまでも純粋無垢な子供でいたいんだ！

ピーターパンシンドロームに駆られた俺は海に向って、やや前屈みに全力疾走する！

「むう！？ 待つのだッ！ 陸どこへ行く！」

追つて来る紫苑の気配を背中で感じつつ、俺は海に飛び込む！

「逃すか！」

すぐさま獲物を追うヒョウが如く、海に飛び込んでくる紫苑の気配と波音。

「フフフ！ 陸、逃げられると思うなよー！ この両生類式縁生物泳法で紫苑ちゃんの虜にしてくれるわー！」

「のわあああああああああああッ！？」

すぐそこまで迫り来る紫苑に悲鳴を上げる。

「、この状態で紫苑にワケのわからん作戦で抱きつかれたらー！？ 俺は！？」

顔を引き攣らせる俺！

確信の笑みを浮かべる紫苑！

(捕まる!?)

と、その瞬間、紫苑がゆくぐりと海に沈んでゆく……

三
感
八

戸惑いに振りかえる俺とは違い、紫苑は悲鳴だ。

「ぐああああああああーーーッ！？ ゲバゲボゴバガボ、あ、足が
つつたで！」れるるうう～～シ～ お、おぼれるうう～～！？」

マジかトレー

な、なんてやねん！？お前をちゃんと準備運動しなかったんだが、どうして？」

い、嫌すぎる。こんな時でも反応する自身のつっこみの本能……これが関西人の血に流れる業というものか？

けれどそんなつっこみをしてる場合ではないと気が付いた俺は、すぐさま紫苑を泳ぎ寄り、紫苑を抱えて沙浜まで上がる。

「ぐ……ホッ……」

なりの海水を飲んでしまった。

「アーニー、ゲロが口元からぬる~」

氣分悪そうな表情の紫苑を、お姫様抱っこをして、海と母さんのいるパラソルへ戻る。

「陸う」

息も絶え絶えは言ひかけてきた紫苑は注意を向ける。

が、苦しいのかな？ と不安になる。

「これで……陸の貸し一つだな……」

は？

「そ、それは俺のセリフだ！」

想像していることとは全く違つことを言われ、今更だが、頭が痛くなつてくる。

「ふふふ、な、ないすうつつ、こみだあ……うぐふつ！？」

しんどい思いまでしてボケるとこか！？

なんていうか恩を仇で返された時は、こんな気分なのだろうか？

というかまさに、今それか！

（まあ、ようやく一難去つたかな……）

そう安堵のため息を吐き出した瞬間！

「キヤアアアアアアアアアアアー、な、何！？」

「うをををををおお！？」

「突つ込んでくるぞ！？」

人々の悲鳴が轟き、驚いて後ろを振り向く。

そして顎が外れそうなほど口を開ける。

クルーザーが突つ込んできていた！

海を真つ一つに割るが如く凄まじいスピード。跳ね飛ぶ水飛沫はまるで弾丸。呆けてる場合ぢゃないぞ！ 真っ直ぐに俺たちのほうに向かってきやがるでありますんか！？

「な、何だああッ！？」

俺の疑問に答えるかのように、クルーザーの甲板の上にいる金髪の青年が拡張器越しに答えてくる。

「私のゴージャス・ハイパー・スイート・ハニー・シオンからその汚らわしい手を離したまえ！ その無品性の下々の一般ピープル以下のイエロー・モンキー・蛆虫太郎・豚のエサがッ！ すぐさま離さないと貴様ら下種で下衆な下郎どものファミリーは、そういうもそろつて、ファツキンだ！ ジャーップめ！ 判りやすく言うなら、

お尻ベンベンだ——ツ！」

ハンサムな容貌を、妻を取られた嫉妬深い夫のよつに歪めに歪めまくつて、金髪の青年は怨嗟の咆哮をあげる。

……半径一〇〇メートル以内の者なら誰でも聞こえそうな大音量。あまつさえクルーザーは砂浜に突つこんできて、優に一〇メートルくらい砂浜に暴虐の跡を残す！

「し、知り合いか紫苑？」

できれば人違いで会つて欲しいと痛切に思つたが、

「……いや。あいつは私の……その…………」
『婚約者だ』

素晴らしき、お約束。あ、やつぱり知り合いなのデスね。

俺は眩暈を感じ…………停止する。

憮然としながらも、紫苑の台詞にある一つの単語に心臓を驚掴みにされたような感覚に襲われる。

スー……と。

真夏なのに暑さを感じず、心が酷く無感動になる。

いや…………心は焼け付くくらい熱いのに、頭は冷水でも浴びたかのように冷静だ。

嫌なくらい…………冷静だ……

紫苑は言った……

『…………いや。あいつは私の…………』
『《婚約者》だ』

と。

そしてなにかが……俺の中で悲鳴を上げた……

綾崎紫苑》

『

(何と言つことだ……！)

今の気分を例えるなら、折れたつまようじ片手にフランスの外人部隊と戦うようなものだ。とんでもない話だ。邪氣暴虐大不況だ。失われた十年、就職氷河期だ！ 自宅待機に内定取り消しは酷すぎるでござるう！？

そもそもアメリカにいるこやつが何故この日本に来たのだ？

「アツハハハハハ！ グレート・サンダー・ミラクル・ハー・シオン元気だつたかい？ もうキミのダイヤに匹敵する涙で枕をぬらす必要はないよ。このアレエツークスが来たからには、ボクの高貴で……デエン・ジャラスな、舌でナメナメナメしてあげるからね（いかん。吐き気がしてきそうだ……）

一言で言つなら、あの金髪白スース男、アレックス・バグネットは
変態だ！

言動はキモい、キショイ、デンジャラスの腐敗しきつて悪臭を放

つ三本柱に支えられ、聴いていれば様々な身体障害を惹き起しきすほどだ。

そもそもセリフの下になぜあれほど意味のない単語をつけるのだ？まあ、あのアレ公^{アレックス}にも良いところはある。

(……)

いや、ないな。（断言）

しいていうなら……うーん、そうだな金持ちだな。それから

……まあ、そんなもんかな。

（と言うか……その程度だ）

それよりもプラスがあつてもマイナス面の方が地球規模的に大きいので、異性の一人として、アレ公にはあまりと言つが全然魅力を感じない。

十点満点でマイナス十点だ。

そもそも私はアレ公に「アーンな」とや「ローンな」とをされるくらいなら、武士として潔く死を選ぶ。

「フ……久しぶりに見るキミの顔は、思わずコサックダンスを踊つてしまふくらいキューティフルだよ！　コサックコサック、コサアアーアーイク！　そして、その美貌は美の女神をひれ伏せさせ、天空の城を羽ばたく天使の如く優美で纖細で小悪魔的で、その上！　ダイナミックでセクシーなその水着はボクの気高く尊い欲望にガソリンを流し込む如くさ！　大丈夫、ドント、ウォーリーを探せ！　エンジンは燃え燃えバーニングファイアーサー！　全く困った子猫ちやんだ　このアレエツークスをこへんなにも、燃え上がらせるなんて……！」

放つておけば一日中やつてそつなクサイを通り越して、アブナイ台詞を一度切ると、

「だ・か・ら……そのクソッタレのビチ糞野郎プラスアルファふんバエ野郎から離れて、このアレエツークスの胸に勇気と愛を込めて飛び込んでおいで」

「嫌だ。単純に陸のほうが良い」

私は陸の胸にグリグリと顔を押し付ける。

すると、アレ公の顔が般若の如く歪む。

「お、おい……いいのか？　か、彼……青筋顔面に走つてゐるぞ！？」

「陸……そんのはな、どうでもいいんだぞ。どれくらいかと言えば今の日本の総理大臣くらいどうでもいいんだ」

心配そうな表情の陸に、諭すように真実を教えてやる。

「それは肯定しちゃいけないとこるだけ……確かにビリでもいいけどさ……」

「何だとそこの愚民！？　そういう政治的無関心がジャップの悪いところだらう！」

陸の納得の声にアレ公は、怒声を砂浜に響かせる。

が、思い直したようにアレ公は尊大な笑みを浮かべる。

「まあよからう！　無知なキミに、ボクとキミとの差について説くと語つてやるわ！」

アレ公は胸元から宝石のはめ込まれたクシを取り出すと、その金髪にクシをキザつたらしくあてる。成金かつナルシストめ。

「そこの品格ゼロ。腐つたどてカボチヤ少年リクを雑種の汚らしい犬口口と言つならば、ボクは血統書つきの高貴で、ミラクルなゴオオオオールデエエエン・レトリバーさ！」

アレ公は大空に両腕を広げて、イカれた演説を続ける。

しかし、そんなゴールデン・レトリバー、我なら秒決で保健所行き決定だ。

「そここの教養クソでダメの五乗の少年リクをばばっちい雑草とするなら、ボクは光が溢れんばかりのゴージャスでアグレッシブな紅いバラや！」

アレ公は胸元から紅いバラを取り出すと、それを口元に咥え、私にウインクを送つてくるアレ公の顔ときたら……何というアホ面だ。創世記始まつて以来の気狂いなのかもしれん。

だいたい、バラと言うよりもヘドロまみれの毒の花だらうに……

「そここの腰抜けの敵前逃亡は当たり前、の 太くんにも劣るだらし

ない汁100%少年リクを、敵の地雷原でウロウロしている非武装の三等兵とするなら、ボクは帝国陸軍士官学校をトップで合格し、トップで卒業した超エリート士官ナンバーワン軍人さ！ いうならサヤ人の王子だ

そう言つとアレ公はクルーザーの甲板で、クルクルと身体をスピンさせる。

全くアレ公のような軍人がいて、その軍人の上官が私なら、世の中の平和と秩序、そして、私の個人的恋愛野望のために即、銃殺だな。あと私がフリー・ザなら惑星ベジータをベジータごと消す。

だいたい、このアレ公のせいだ、『海でドッキリ急接近』が台無しではないか！

そうわざと溺れて 実際に溺れたが 人工呼吸を迫ると言つ乙女の必恋技が、野望のときめきが、何よりもラヴがおじやんではないか！？

（ぬううう、だんだんムカついてきたで、じざるな～）

アレ公を呪う田つきで睨む。

「ハツハツ～ン そんな熱視線を送るなんて……たまらなくなつたのかい、シオ～ン？」

氣ツ色悪い嬌声を放ち、とんでもない、それこそ超電磁的・誤解をするアレ公。

「やかましい！ 貴様は紫苑ちゃんの『心の内心志』マイナス千だツ！」

「サ、サウザント！？ Oトツ、Wヒュ！？」

名画『ムンクの叫び』そつくりの表情のアレ公に、私はさりにコンボを叩き込む！ 乙女とは躊躇しないものなのだ。

「ええい、オマケだ！ マイナス万だツ！ 持つてけ、泥棒ー！」

「アウチツ！？ NOね、マイナスNO thank youね！」

アレ公は散弾銃を至近距離でくらつたかのような衝撃を心に受け、激しく首を横に振る。

（今こそ、勝機！）

「だいたいお主は駄目だ！ 嫌がる女子に無理矢理迫る時点で、漢として最低最悪最嫌！」

ハウツー！？

胸をかきむしるアレ公に構わず続ける。その姿は心臓に杭を打ち込まれたドランキュラのようだ。

田代絶交宣言！ 超裕が元イノ外人！ 100%超絶駄目男！

○○○○○○○○一?」

アレ公は間手で頭を抱えて、黙黙の如く、隣の机へ顔を上せる。

「どうだ！ 少しは懲りたで、ござるか？」

精神病患者のように虚無を宿したどこか鬼気迫る表情でブツブツ

「那裡的機會多呢？」

ゴクリと慄きに喉を鳴らし陸はそう言うが、されど

ハッハハハッハハハハハ！

ちく、つんざく笑い声は、アレ公のものだ。

スに照れているんだね？

(何をどう解釈すればいいんだい? もののか——シ—?)

「これにはさすがの私も不意打ちでボクシングをくらったアウト

「大丈夫さ、心配はない！」

一大丈夫さ、心配はない！ ボクの心のギャンバスに、好きなだけ愛と言う名のキミの絵の具で絵を描くがいいさ！ ボクの心の扉は

何時でも開いているよ! そ、説教を見せておける

ゆつくりとズボンのチャックを下げる！？

意図がわからぬ！ 皆目見当がつかぬ！ 誰か二文字で説明せよ！

ジジジジジジ……………！

(むわあー？　へ、変態で、アレル～！　本物の、正真正銘の、生糰の、ナマの変態だー！？)

「そこの扉開けてどないするねん！」

怯える私にかしづく騎士のよう、陸はつゝこみソードで、アレ公を切る！

しかしアレ公は余裕の笑みを見せ、

「フ……早合点するな愚民B〇Y…………これを見ろー！」

アレ公はズボンのチャックの中から一枚のカードを取り出す。指先でそれを掴むと、ピンと弾くように投げてきた。

「な、何だ？」

手の中へと落ちてきたカードへと視線を落とす陸。

おのれ、後でちゃんと陸に手を洗わせないと……

そして、私は陸の手元にあるカードに視線を走らせる。

「む……これは……」

それは招待状。

アレ公の所有する日本の別荘で開く宴の招待状だ。

なぜに変態が主役の宴に出席しないといけないのか、理解に苦しむ。

当然断るうと口を開くが……

「キミのじ家族の方も当然大出席ヤー！」

口から言葉を紡ぐとした瞬間、それは止まる。

「じ家族……だと？」

「フ、その通さ。キミのじ両親も当然、大出席ヤー！」

バラを胸元から幾本も取り出し、アレ公はそれを四方八方に散らす。

「…………お爺様はいらっしゃるのか？」

探るような私の問いかけに、アレ公はペラペラと喋り始める。

「ん？　もちろんや。シオンのことが気になるとおっしゃっていた

からね。きっと、ボクたちの関係がどこまでいっているか、気になつておられるんだと思うよ。フフーン…」
それは違う。

そもそもアレ公と私の関係は無関係だ。
決して、私と陸のような『未来は必ず』恋人関係ではない。
(私のことが気になるとおっしゃつていただと……)
すでに私のことがバレている。

しかし、それならばなぜすぐ連れ戻さない?

お爺様ならそれが可能なはずだ。

どうする? お婆様もいらっしゃるとなると……いや、これはチヤンスかもしねりない。

キツと鋭い視線で陸の顔を見上げる。

ちなみに、今もまだ私は陸にお姫様抱っこをしてもらひつている。
……至福でござる。

とど。顔を緩めている場合ではない。きりつとした表情を作る。

「きりつ

「な、何だ紫苑?」

私の視線に戸惑う陸。

フ、なんと胸が締めつけられるような仕種だ、ジュルリ。

変態アレ公の宴には、私の家族が出席する。その場にはおそらく私の親族も出席するに違いない。とすれば必然、お爺様も……。

お爺様からアレ公の婚約を言い渡された時の言葉が思い出される。

『紫苑、バグネット家の嫡男であるアレックス・バグネットと婚約を結べ』

『な、そんな突然すぎます! 私には……!』

『これは綾崎グループの総帥としての言葉だ。異論は認めん』

『くつ……』

こんな決定。突然押しつけられた運命

納得できぬ!

ピンチはチャンス！

そう、これは願つてもないチャンスだ。

アレ公の披く宴の場で、陸と私が恋人という関係を見せれば、きっとお爺様も考え直してくれるに違いない。

「よし！ その宴に出席しよう！」

「ヒヤツホ——！」

アレ公はアホのよう、クルーザーの甲板の上で、足を激しく踏み鳴らし、踊り狂う。

「ハアツハハハハハハ！ やまあみやがれ、ジャップ！ これぞラバーティーに出席するのさ！ 庶民であるキミには想像もできないほど、豪華で、高貴で、スペシャルなパーティーにね！ 出席したいかい？ ダメダメ、絶対ダメ！ 出席なんてさせてあげないよ！ せいぜいキミは近所のケーキショップで、卑しい庶民の財布の中身と相談でもしながらケーキでも買い、年の数だけロウソクを立て、独り寂しく、侘しく、悲しく、切なく、やりきれなくロウソクの火を吹き消してゐるがいこ、ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

加虐的で歪んだ黒い笑みを顔に刻みながらアレ公は咲笑する。

そんな歪んだ幸福絶頂にあるアレ公に気が進まないが話しかける。「ただし、条件がある」

「ん、何だいシオン？ 何でも言つていいから」

「陸をその宴へ出席させてくれ」

ビシリッ！

破滅的な異音をたてて、アレ公の顔が破綻するが知つたことではない。

田は極限まで見開き、鼻から出る息は酷く荒い。口はギリギリと歯ぎしりをしていて、髪は逆立っている。両肩は怒りのためかブルブルと寒さに震えるかのように、戦慄いていた。

その様子を見てはてなと首を傾げる。

「ん？？……駄目か？」

「ダメ！ 嫌よ嫌よは、嫌つて意味だ！ must notッ！！ そんな愚民はボクのパーティーに相応しくないを、ぶつちぎりで一番さ！ しいて言つなら、金の中に一つだけ汚らしい銅が入つているようなもんさ！」

唾を飛ばす勢いで、アレ公は私の条件を却下する。むう……なんたることだ！ どんな手を使つても、陸を宴に出席させねば！

何かアレ公を説得できるものがないかどうか、周りを見回し、それを見つける！

「空音殿ツ、そのウサギ殿のぬいぐるみをかしてくれぬかツ！？」海殿と一緒に砂の城を作つている空音殿の手の中にあるウサギ殿のぬいぐるみを指差して、尋ねる。

「え、ウサピヨンを？ いいわよ」

空音殿は笑顔で快く了承してくれると、幼児くらいの頭の大きさがあるウサピヨン殿の首をガシッとワイルドな仕種で掴むと、ブーメランよろしく放り投げてくる。

ウサピヨン殿はきりもみしながら大空を舞い、私はオオワシが獲物を獲得する仕草で、ウサピヨン殿の首をジャキューーンと掴む。

「お、おい紫苑。別に俺は……」

「ふ。この紫苑ちゃんとウサピヨン殿に任せてくれ」

何か言いつのる陸の言葉を遮り、アレ公の方を向く。

「ノン、ノン。そんなラビット如きに、ボクを説得できると……」構わずウサピヨン殿の首を掴み、地面に引きずるようにライオンの如く雄々しく砂場を闊歩。アレ公に近づく。

ある程度近づくと足を止め、ウサピヨン殿を胸の辺りで《乙女チック》に抱き締め、《乙女チック》に首を右に四十五度傾けると、《乙女チック》に上目使いで、《乙女チック》に尋ねる。

「ねえ、アレックスう…………ダメえ？」

これぞ『乙女チックチェーンコンボ』！

紫苑ちゃんの乙女度を最大限に高め、その大輪の花が咲くが如く乙女っぷりを、乙女言語にのせ、膨れ上がった乙女パワーを敵に放ち、敵を撃沈する紫苑ちゃん七つの大技の一つだ！

戦慄の表情を見せ、口から流した架空の血を右の甲で拭う。

「アホかッ！ あんな原始人でも分かる……いや脳の容量が少ない下等生物にも気がつかれそうな明確な策略の意図をもつた色仕掛けが通じると思つてゐるのかよ！？」

だろうか？」

「そう言ひ問題じゃないんだ、だいたいそんな演技で彼を騙せると……」「

ブバ――ツ！

陸がアレ公の方を振り向く。

鼻血を噴出していた。

田から感激の涙。

鼻からは興奮の血。

喜悦に満んだ表情。

今のアレ公は正常な感性を持つ者ならば、体「」と一歩後に引きかねないものだつた。

「な……下等生物以下なのか！？」

今度は陸が戦慄の表情を見せる。

私は陸の問いかけにしたり顔で、頷いてやる。

あやつはアメーバ以下……いや、ありとあらゆる生命体以下だ。

「もう～、仕方ないな～。よし、そこの愚民B.O.Yも出席させてあげよう！」

流血を続けるアレ公の鼻へ、隣に控えていた老執事が嫌な顔一つせず、ティッシュを詰め込むというプロの仕事ぶりを見せ付けてくれる。

「いや、でも俺は……」

再度、言いつのる陸だが、

「ノンノン、NO！ キミの意見は口から出る前に超絶サンダーボルティックファイア却下なのさー、ま、パーティーで庶民とボクとの格の差でも知るがいいさ！」

思わず石でも投げたくなる暴言で、アレ公は陸の言葉を遮る。
「パーティーは一日後！ ドレスとかはこちうらで用意するから待つ
ていたまえ！ では一日後、よりグレイトで華麗で優美になつてい
るアレエックスと会おう！」

ほざくとアレ公は、うひやひやといつ例の[氣色]の悪い哄笑を放ち
ながら船内へと戻つて行き、やがてクルーザーは私の視界から遠ざ
かつて行く。

見えなくなるクルーザーを見て、沈んだら良いなと思つていたのは、乙女の秘密でござる。

『天堂陸』

『…………いや。あいつは私の…………その…………』『婚約者』だ』

その言葉が耳にまだ残っている。

紫苑はアレックス君のことを毛嫌いしているみたいだったけど

それでも二人は婚約を交わす仲だ。

俺はこのままいいのだろうか？

頭の中がぐるぐるする。

俺はどうすればいいんだろう？

答えは簡単だ。

紫苑と離れるべきだ……頭では冷静に答えに行きつく。

なのにそう考えると心が痛い。

頭と心は正反対のことを言つていて、俺を悩ませる。

どちらの答えが正しいんだろう。

どっちが本当の俺の答えなんだろう。
人は頭で考えるのか？ それとも心で感じるのか？ そして決断
を下すのは頭なのか心なのか？

わからない。

ただ頭の言つことを聞くと…………胸が痛んだ。

暗い自室。海から帰つてきて、夕食を食べて、風呂に入った。

疲れていたせいか、いつもより早い就寝。

今夜、紫苑は用意された客間で寝ている。

だから、今、暗い自室でただ独りいる。

紫苑が帰国してから、ずっと俺の周囲は騒がしかった。

穏やかな日常はあつという間に遠のき、激変した日常が騒がしく
俺を包む。

「まつたく……」

溜息を吐く。

俺は穏やかな日常をなによりも愛している。

こういう劇的な展開は正直なところ苦手だ。

なのに

「なんで俺は笑っているんだろう……」

気がつけば、口の端には微笑みを刻んでいる。

苦手だったはずの騒がしい日々……それを楽しく思つてしまつ。

ふと寂しいなと思つた。

隣に紫苑がいないだけで……なんだか隙間風が吹くように寒い。

クーラーの効きすぎなのかな……クーラーの設定温度を《おやす
み全自動》に合わせる。

呼べば……紫苑はきっとすぐに来てくれる。

でも頭が呼んじゃいけないと、強く囁いていた。

それにそもそも部屋のドアにはカギをかけている。

呼んでも力ギを開かなければ、紫苑は入ることなどできない。

そつ……力ギを開かなきや……

「寝よつ……」

湧き上がる寂寥感を抑え、布団の中に潜りこんで、手元の枕を抱き寄せて目を閉じた。

漂うよつな感覚がわざなみのよつに繰り返され、その優しい感覚に身を委ねる。

半覚醒状態。

クーラーによる適度な部屋の気温に、布団の心地良さ。さらに言えば部屋のドアにしつかりとかけたことによる安堵感。

(最高だな……)

心に感じる思いを肯定しながら、手元にある枕を抱き締める。俺には妙な癖があつて、寝ている時何かを抱き締めていないと落ち着いて眠れない。

だからベッドには頭に敷くのとはもう一つ別の抱き締め専用の枕がある。

手探りで枕を自分の方に引き寄せ……その瞬間感じる違和感。

(?)

感じた違和感が、右手を衝き動かす。

さらに枕を引き寄せ、両手で枕の表面を……なぞつて

く。

(なん……だ?)

頭がだんだんはつきりとしていく。

それについて、手に残る柔らかな感触に不透明な疑念が浮かぶ。明らかに枕とは違う手触りだ。

軽く驚くほど柔らかい膨らみが一つほどある。それらは手のひらの動きによつて形を変える。柔らかいが弾力あり、ほのかに心地良い温かさを掌に伝えてくるそれは……

ピタリと動かしていた手を止める。

酷く嫌な予感がし、破壊的な悪寒が全身を駆け巡る。

（そんな……ツ！？）力、カギをかけていたのに！？ いつの間に

一生瞑つていたい目を開けると、やせつとうつか、なんとうつか

卷之三

「పూర్వ విషయాలను తిథితోటు చేసి విషయాలను విశేషమైంది - २.」

紫苑がいた！

「うわああああああああああああー!?」

悲鳴を上げてベッドから転げ落ちる。

「なつ」

処女を目の前にした吸血鬼の表情で紫苑は俺に笑いかけてくる。
Yシャツの下は下着だけという……昨日同様のあられもない格好！
それなのにはYシャツのボタンは全て外されていて、まともに
直に、ストレートに白い下着が俺の視界に入る！

「ほんとうに謡像だ！」

顔を真っ赤にした俺は、慌てて紫苑の下着を隠すためにYシャツに手を伸ばすと、その瞬間！

だ、
駄目だ陸う、
いきなりそんな所

やけに色つぽい紫苑のため息にも似た咳きに、床へとすこける。

「な、何言つている！？」
つーか、そもそも何でここにこるんだよ

— ツ ! ?

質問と詰つより、既にパターン化してしまつた日常に絶叫する。

「ん？　いや、なに。夜中に便所に行つたら、寝ぼけてたんでもちがえてこの部屋にきてしまったようだ。いや、失敗、失敗。テヘでいざれる」

紫苑は邪氣を微塵も見せない笑顔で一ツ口つする……いや、しゃがるッ。

（か、確信犯だ！　こいつは計画的犯罪者だ！　微笑む悪魔！　嘲る天使だ！）

唐突に思い浮かぶ疑問。

「し、紫苑……この部屋にカギをかけていたと思うんだが……？」俺の問いかけに、紫苑はむつりとした表情で両眼を閉じて胸の前で腕組み。

それや、やめてください胸の谷間が……！？

俺は首の角度を九十度右へと反らし、正面にいる紫苑から視線を外す。

「フツ。乙女ザムライの恋路を邪魔するやつは切つて、やすつて、GO TO Hello……でいざれる」

「なつ！？」

とんでもない紫苑の告白に慌てて正面に向き直る。

紫苑は酷薄そうな表情で胸の谷間からこれでもかーつてくらいやすられたカギの部品を取り出し、俺の膝の上に投げてくる。

ガラーン……（「めん、僕……守れなかつたよ）

カギの部品は膝の上に跳ね返り、自室の床の上に音を立てぐつたりと床に横たわる。

鋭い戦慄が、電流のように背中を山嵐のように駆け抜けた。

「ほ……本当に間違えたのかよ！？　これだけ冷酷にカギをやすつておいて……！　お前は寝ぼけてたつて言つのかよ！？」立ち上がり絶叫する。

カギの……いや俺を守ってくれた戦友の代わりと言わんばかりに、

喉も枯れよと絶叫する。

「うむ

「マジですかああああツー・?」

しつと頷く紫苑に絶望の呟きを上げる。

ななな、なな、な、なんせーせーせー・? し、信じられへん
わつ！

（混乱の余り関西弁

な、なんでそんな堂々と嘘つけるの。え、マジなの？ 僕が間違つてるの！？

「何にせよ……今宵の陸は積極的だな」

「え！？ べ、どうこいつだとだ？」

見えない恐怖の手が、心臓をザワコロコロと撫でる。
嫌な汗が滝のように額と背中を流れ、その感触が焦燥を急き立て
る。

「こや……昨日はせこばい私の胸に顔を押し付けるへりだつたが
まさか私の胸を
もみしだくとはな！」

『もみしだくとはな！ もみもみももももももももももももも
もみもみもみしだく！ もみしだくとはなツー』

「マジですかアアアアアアアアツー・?」

紫苑の放つ弾劾の声は、戦艦ヤマトの充填率120%の波動砲の
よしに、俺の心臓を特殊効果満載の惑星規模的破壊力で貫いた。
「いや～紫苑ちゃんビックリでドッキドッキだ～！」

「ぎゃああああああああツー・?」

三味線にされる、断末魔の猫の悲鳴を上げる俺。
手に残るほのかな感触に、思わず自分の掌を見る。

思ひあたることが……あつた。ありすぎた！

け、けど、言い訳する気じゃないけれどさあああああー！

追い詰められた犯人の形相で叫ぶ。

「罷だッ！ これは罷だああッ！ オ、おかしいじやないか！
俺は部屋に力ギをかけて一人で寝ていたのにッ！ それなのに目が
覚めると力ギをやすつて殺し、俺の習性を利用してベッドに忍びこ
むだなんて！ この状的証拠が罷だという証拠ッ！ 証拠オッ！」

必死で命乞い。絶叫を放つ。今まさに新世界の神ピンチ！

「だが、胸をもみしだいたのは事実だ」

冷然と思い通りという笑顔を浮かべる紫苑。

「ぐつ！？」

言葉に詰まる俺。

ま、負けるな！ まだ逆転のチャンスはあるはずだ！
打ち負けそうになる心を雄雄しく奮い立たせる。

「だいたいでござるがな……」

睨み付ける俺に、紫苑は大袈裟にため息をついて俺の下半身の一
部を……指差す？

「そんな股間状態で言い訳しても、問答無用だ」

「へ……？」

視線を股間に落とす……

「きやああああああああああああああ！？」

自分の股間を見て、乙女の叫びを漏らす。

「ち、違う！ これは朝立ち、男の生理現象なんだ！ 不可抗力！

情状酌量の余地を求めるぞ俺は！」

「よくわからぬが……今はまだ夜だ」

「！？」

必死の弁解を碎くと、「ニヤリ」と獰猛な笑顔を見せる…？

「そのある意味雄々しい首を 貰うつー」 織田信長が桶狭間
で今川義元を討ち取る寸前に浮かべた笑み。

ああ、今川義元さん！

俺は今、貴方の気持ちがよくわかる！！ 戒名、天沢寺殿四品前
札部侍郎秀峰哲公大居士天澤寺秀峯哲公どの！ 悔しいス！ マジ
悔しいス！ 勝てる寸前まで来てたのに！ あと一歩ですわ天下統
一だのに！

「ち、ちが!? 大いなる勘違い!
絶対無敵大間違いですよ!?」

「聞く耳持たぬわ！」

— なみすで !? 「

一
と
飛
ん
だ
ッ
！
？

一際大きい奇声を放ち、紫苑がベッドのスプリングを利用して舞い上がる。天井に届きそなくらいの高さだ。飛び跳ねる様はムササビ！ 襲いかかるは虎の如し！ 生きながら獲物を喰らうは吃了ジヤツカル！

紫苑が俺に襲い掛かってくる！

!

紫苑は世紀末霸者のような哄笑を放ちながら、手早く俺を組み伏

せる 早い 三 情報で きこる るに おれ

プレーもかくやと言わんばかり！

(ひいい！？) た、食べられやつよおッ！

その手馴れている一連の動きに、俺の涙腺は洪水状態だ！！

アハハッ！？ ため 駄目だあおお！ まだ俺には け 総溝力
がッ！ 自分はおろか、 相手を養つ経済力がなハ！ そんな男が女

性と安易にこ、こんなああああああああああああああッ！？
忍、堪忍やー！？ パジャマを返してくれーーッ！」

必死で抵抗するが、組み敷いてきた紫苑の膂力は凄まじく、まるで鬼。鬼は貴様の服をよこせと衣類をドンドン剥ぎ取っていく！「ふーっ、ふーっ、むふーっ、むつふふふッ！ ええい、觀念せい！」男らしくな！

猪のように荒い紫苑の鼻息が、頬を叩く。ビ、獰猛すぎる！ ほ、本氣で怖いんですけどオー！ この子、ほんとに乙女ですか！？

「た、助けて！ 助けて母さあああああああああーんツッ！」人間恐怖に駆られると、成人男性の三人に一人は母親の名前を呼ぶと言つ。

この時の俺もその例通りだつた。

「空音ちゃん行つきまーす！」

と、俺の声を聞き届けたかのよう、母さんが部屋に入ってきた。

「か、母さん！」

感激の声を上げる俺。

地獄に仏、天の助け、寝所でもつれあうタイミングで母親参入……あれ？

そこで……またしても気がつくある事実。

着乱れている衣服。抵抗したため、お互に荒らげている俺と紫苑の呼吸。

あげくマウントポジション……ツー！

「まあ……………初孫作りね？」

なぜか頬を赤く染めて母さん。

「ぐはっ！？」

なにこのまずいシチュエーション！

オナニーの最中に母親に入られたよりも一段上の羞恥が存在しただなんて！！

「ええ！ 小癪にも抵抗しておりますが、あと一歩です！」

ビシリと親指を立てて母さんに答える紫苑。

凄まじい単語が飛びあつ日常に、俺は意識を手放しそうになつた。
そう……頼むからこの変な日常が夢であつてくれという切実な願いを込めながら……

「なんでやねええええええん！？」

絶叫めいた突っ込みが、今日も響く。

ああ、穏やかな日常よ。どこですか。俺はここにいますよ？

天堂 陸』

『

アレックス君の予告通りに一日後の夕方、家の前に迎えの車がきた。

黒塗りの外車の名前はわからない。高級外車といえばベンツくらいしか知らない俺は乗るのはもちろん見るのも初めてだ。住宅密集地である狭い道にはとても入れそうにない大きさ……というよりは長い。居住スペースのせいだろう。

その外車から洗練された動作で老執事が出てきた。

(し、執事だ!)

映画でしか見たことないよ、こんな人!

一分の隙もない。オールバックに撫で上げられた銀髪同様、口元の立派な髭といい優雅で気品ある佇まいを前に後退りしそうになる。アレックス君の身の回りの世話をしている執事の方で、彼はエドワード・W・ウォルガーと名乗った。達者な日本語にマジびびる。外人っぽいはずれたイントネーションではなく、流暢なくらい流暢

な日本語だ。

そして、エドワードさんに誘われるまま紫苑と一緒に車に乗り込み、一時間。

紫苑と再会した空港に乗り一時間。

そろそろ日も沈みかけた頃に、ようやくアレックス君の招待された屋敷へと着いた。

まず、門から屋敷までが長い。

車で門をくぐっても、ひたすら延々と林やら庭園やら、あげく池とは言い難い大きさの湖やら続く一方で、建物が見えてこない。たっぷりと十分ほど車で走つて、ようやく屋根が見えてきたと思えば、エドワードさんが、庭園管理の庭師の家だと教えてくれた。

愕然とする。

やがて、こんな状態がずっと続くのかと思った頃、洋式の建物に着いた。

車から降りて、目の前の建物を見上げる。

そのスケールが恐ろしい。凄い。凄すぎる。格の違いをこれ以上ないくらいに感じる。

眼前にそびえる威容に、頭が痺れるくらいの衝撃を感じていた。

「す、凄く……大きなところですね……」

一体、この屋敷の中に俺の家が何個入るだろうか？

十や二十くらいは平気で飲み込んでしまうだらう。

だが、

「いえ。こちらは別館で」「やつます」

「え？」

「パーティー会場に使用する本館は、あちらでござります」

エドワードさんの右手が指示する方向に視線を向けると、目の前にある屋敷よりも、数倍は大きく建造物が目に飛び込んできた。

煌びやかな照明が夜の闇に輝く豪奢な屋敷が、大地に根を下ろしたようにそびえている。

「…………」

もはや声も出なかつた。

俺の驚きに気を遣つてくれたのか、エドワードさんは暖かな微笑を見させてくれた。

「私も初めてこのお屋敷を拝見させて頂いた時、驚いたものでした」「そ、そうですよね……？」

顔面神経症のような、とても笑みとはいえない複雑な表情を浮かべる。

と、俺とは違ひ全くこいつもの幼馴染が俺の肩に手を置く。

「フ、案ずるな陸！ 屋敷の一つや二つ、変態の一人や二人に比べれば、どうでもいいぞ。そう……傷が治つた時にとれた『かさぶた』くらいいどりでもいい！」

「それは確かにどうでもいいけど……」

けど、これは紫苑は紫苑なりに俺にフォーローを入れてくれたのだろう。

それが分かれば紫苑の気遣いを無駄にするわけにはいかない。

「ん……ま、そうだな」

「うむ。それにどうせ陸は将来この紫苑ちゃんの嫁になるんだから、こんな屋敷なんぞすぐに慣れるで！」さわづよ

「よ、嫁えツ！？」

不吉な単語と内容に裏返つた声を張り上げる！

「フ、ついでに陸の銅像なんかもプレゼントするだ。どうだ、嬉しいだろ？」「…」

「た、頼むつ、勘弁してくれ！」

あながち冗談とも言えない本気の眼をした紫苑に顔を引き攣らせ
る。

紫苑は「やる」と言つたら、本当にやる根性と財力。そして野望を持つてゐる。

だから、紫苑のセリフは妙に現実味を帯びていて怖い。
だつて、考えてみてくれッ！

異常殺人鬼のジョンソンが『お前を殺す！』と言つてもそれ冗談

にならないだらうー？

しかし、

「紫苑様、陸様。お洋服を用意していきますので、」
「エドワードさんが絶妙なタイミングでそう言い、別館を案内してくれます。

「陸様は、つきあたりを右の部屋にお着替えを用意していますので、それを御召しあさーい。紫苑様は」
「では暫しの別れだな、陸」

「あ、ああ」

「フフ……ドレスアップした紫苑ちゃんを後でこれでもかあー、つてくらい見せてやるわ。それこそ鼻血ものの破壊力のある紫苑ちゃんをな！『色々な意味で』ティッシュの用意をしておくことだ！」

「あ、ああ……」

なぜか一部の単語を妙に強調した口調で宣言する紫苑。

なんとなく見たいような見たくないような……そんな相反する気持ちを抱く。

紫苑は意気揚々とエドワードさんに部屋へと案内され、俺は言われた通りにつきあたつて右の部屋へと入る。

見渡してみると、その部屋は俺の部屋の軽く五、六倍はある広さだ。

部屋の中には応接セットらしき家具が置いている。

置かれている小物も一目で高価なものだと分かった。

なによりも布団の上を歩いていくよつた柔らかさを伝えてくる赤い絨毯に慄然とする。

壁に飾られている絵画。

その部屋の豪華さに数分呆然と佇む。

(やばい……俺はここにいてもいいのでしょ？)

内心で問う声すら敬語になってしまつ。

と、部屋の真ん中にあるテーブルの上に、幾つか大きさの違う白い箱が置かれているのを見つける。

「あれが、エドワードさんの言つていた着替えかな？」

テーブルに近づき、箱を開ける。

予想通り、それはエドワードさんの言つていた着替えで、ライトブルーの三つボタンスーツに、黒のシャツと赤いネクタイ、靴下から革靴まですべて用意してあつた。

おずおずと着替えを始める。

服に触れてみて、その上質さに嫌でも気が付かされる。着替えを一通り身につけると、ネクタイが曲がっていないか、部屋にある長方形の形をした大鏡を見てチェックする。

なんというか……こういう服に着慣れないないといつ動搖の表情が、鏡に映る。

「……馬子にも衣装つてやつかな？」

苦笑する。

そして、部屋から出よつかと思つた瞬間、

「陸の生着替えの大チャーチンス！」

バアアアアーンと両開きの扉を限界まで開いて、紫苑が飛び込んでくる！？

頼むから、ノックくらいしてくれよ……無駄とは思つたが、そう思わずにはいられない。

「あ、あのな、もし着替え中だつたらビックするんだよ？」

ため息混じりに紫苑に言つてみるが、

「望むところだ！」

「の、望まれてもな……」

尋ねた言葉を返す刀でそう切り返されて言葉に詰まる。そう来たか……つーかこの場合どうしたらいいやら。

ゆるく諦念を浮かべながら、紫苑の方を振り向いた俺は瞳を見開いて硬直する。

少し茶色の入ったショートカットの髪は大人っぽい感じに纏められ、可憐の一言に尽きる。薄紫のビロード地のロングドレスは、大きく肩から胸元まで大胆にカットされていて、顔に赤味が走った。あまりの可憐さに心臓があまりの可憐さに心臓が胸が高鳴り、思わず胸を手で押された。

「どうだ？ 私もなかなかの乙女っぷりで『じぞれい』？」

「あ……あ、ああっ。その……似合っているよ。凄く良い」と思つ興奮で上擦る声をなんとか抑えて、右頬を左の人差し指で無意味になぞりながらなんとかそうしほり出す。

そう 僕に微笑をして問いかける少女は、まさしく完璧無欠の財閥の令嬢だった。

一般人とはおよびもつかない雰囲気を纏い、佇む紫苑はただ美しい。

常日頃でも思わず見惚れる容貌が本気で着飾れば、それは恐ろしいほどの吸引力を伴う美貌の化身となる。

「だが、陸もなかなか似合つているぞ。思わず涎がたれるくらいにな」

「……そ、そうか？」

『涎』の部分にぎくりとしながらも、自信なく聞き返す。

「うむ。私が保障するぞ。だがまあ……」

そこで紫苑は考える素振りを見せると、妄想ドリーム爆裂な感じの笑みを浮かべる。それお嬢様が浮かべちゃいけない笑みですよ？

「一撃必殺な裸エプロンの陸や、お色気満点バーニースーツな陸、元氣花丸体操着姿の陸も捨て難いがな……ツツ！」

「い、いやお願ひですから、本気でそんな俺は捨てておいてくれッ！ 地球規模的に頼むから！ 血涙流しながら本当に頼むから！ なんなら土下座するからッ！」

「……そうか？」

「そもそも！」

少し不満げな表情を見せる紫苑に、首を縦に何回も振つて否定表示する。

「むう……ならば仕方あるまい。結婚初夜まで待つか
「け、結婚初夜！？」

声の上擦る俺に、紫苑はしたり顔で頷く。

しかし、紫苑の表情が途端にでれつとしたものになり、瞳は妄想の
パラノイアに染まる。

「フフフ……いいではないかいいではないか！ 恥ずかしがるでない。さあ、そんな布きれ……脱いでしまえ……グツフフフ……ザクとは違うのだよ！ ザクとは！」

しかもまた紫苑の呟きが恐怖を加速させる！ それからあなたガ
ンダム混ざりますよ！

今の一隙に鋭くバックステップで紫苑から距離をとる。密室に監禁された乙女のように身体を震わす。そう密室に囚われた乙女のように！

だが、俺は決定的なミスを犯していた。

俺は後ろに飛びずさるべきではなかつた。

全力でドアを開けて逃げ出すべきだったのだ！

そして大声で人を呼ぶべきだったのだ！！

ガチャリ！

狂気的な音を立てて、ドアの鍵が内側から閉められる。

いつの間にか紫苑は俺に背を向け、唯一の出入り口である部屋の扉をがっちりとロックをする！？ why!? なぜに、どうして、何故ですか！？

(な、なぜ鍵をかけるんだ！？)

それは密室に予期なく閉じ込められた者特有の疑問だ。

稻妻を受けたように全身を硬直し、もはや慣れ親しんだ戦慄が秒速で……そう秒で俺の心臓を太鼓を叩くように、やたらめつたら激

しく警鐘しているのを感じていた。おいおいー6ビートじゃないか、ノリノリだな！

部屋の空気が停滞し、肉体的にも、心理的にも、精神的にも圧迫感を感じていた。

そして今。

いけないピンクに狂った野獸こと紫苑が、三日月の形のような笑みを口に象つて、破滅的な勘違いを紡ぐ。

「二人つきりだな、ムフ　ムフフフッ！」

関西人に生まれた俺の瞳が、ギラリと光る。

「無理矢理、作為的な状況を作つといて、それがああああああああーーーーツー？」

魂の凄愴の悲痛さを塗り込めた悲鳴を喉の奥から絞り出す！

だが、ああ……っ。

だが俺は見てしまった……ツ！　見てしまったよ！

紫苑の本気の瞳を……！

ロングドレスのスカートの裾を不気味に蠢動させ、小走りだが妙に早い、早すぎる動きで！

ツカツカツカツカツカツカツカツカツ、力力力力力力力力力力力力力力力力カツ！

獲物を追い詰めるヘビのように残忍に肉薄してくるう……ツ！？

「い、ぞ……いざ　いざああああああああああああああーーーーツツ！」

紫苑は脅えた小動物を狩る猛獸のように、両手を高く上げる。

それは熊の威嚇を彷彿とさせ、紫苑のドレス姿とギャップがあり

၁၇၈

やしだれのとこでもない、ギャップが凄惨な雰囲気を醸し出していった。

その時、少年の俺は初めて理解した。
美女と野獣、ではないッ。

美女は、野獸なのだ、と！！

卷之三

たせ ませ 蛸屋の隅

壁を背負ひ、

「インファイターに追い詰められたアウトボクサーの気分だ！
「に、逃げ場なし！ 打つ手なし！ 救いの手もなしいッ！？ し
かも状況は最悪飛んで極悪ときた！ あげく、相手はいけないピン
クモードアクセル全開で恋する妄想機関車の紫苑だ！？ 貞子も伽
耶子も跳ね飛ばす！ 脱線、踏み切り、衝突、爆撃、蹂躪モードだ
ッ！」

監禁、無理矢理、押し倒される、陰謀、強敵、危険、不可、終焉！

ダークな色合この単語が頭の中をフリッシュのように駆け巡り、脳と心臓を強停止させようとまごるしく襲う！

奄の眼前こよ

慈愛に満ちた笑みを浮かべ……

「初めは優しくするから、OKでござる」

原爆投下の笑みだった。その紫苑のワインクに俺は死兆星を見た！

信じられない紫苑の台詞に怪鳥のよつた悲鳴を上げる。ながら
狩られる寸前のインクック！

瞬間、紫苑が俺との間合いをゼロにするべく容赦無用に詰め寄つてくる！

意味不明の技の名前を叫びながら……！

「ん、何だ？」
ロックがかかっているじゃないか……

そして、その時、俺の中で存続の歴史が動いた。

が扉越しに聞こえた！

お、俺は人間を辞めさせられるぞおおおおおおおおおおおおおおッ！

ス バグネット』

『アレック

シオンのドレス姿は後の楽しみにとつておくとして、先に愚鈍で浅薄なイエローモンキーの滑稽なスーツ姿を見て、ボクとの格の違いを思い知らせてやろう。

そう考えたボクはリクの着替え用に宛がつてやった部屋へと優雅に……それでいて華麗で高貴にムーンウォークで移動する。

今のボクは歩くだけで、黄金の燐分を撒き散らす『蝶存在』だ。女性を失心させる程の鮮麗さと優美さを持ち合わせて、持ち合わせまくりの状態だ！

それは当然というか、必然だ。

そうこの、ナイスでチョベリグで、纖細かつ大胆で華麗なワソン

ダフォーな白のタキシードを着たボクは、この地球上で最も美しい生命体だ！

「フフ……格の違いを思い知らせてやる！」

ボクは優美を塗り込んだ手つきで扉のノブを回す……回す……ん？とロックがかかっているらしく、開かない。

「ん、何だ？ ロックがかかっているじゃないか……」

このボクの入室を拒むとは！

これがジャパンでウワサの心の障壁。ATフィールドといつヤツか！

信じられない駄目態度だ。ペケ、ワン、ハンドレッドだ。所詮は庶民だが、礼儀と言ひ言葉をその少ない脳のしわに、叩き込みやがれ！ っという感じだ。

だが、扉から聞こえてくる声にボクは驚愕する。

あくまで美しく、そう バラを口にくわえながら……！

両手を腰に当て、九十 の角度で手をピンと伸ばし、脚はガニ股にガツチヨーンと驚く。

『もう、アレ公のヤツか……！』

『た、助け！ 助けてええええええッ！』

防音効果の高い扉なので、何を言つてゐるのか良く分からぬ。だが、今わかっていることは

ロックしている扉 ドレスアップしたこの世界で最も美しくて氣高く、それでいて…… 略 激抱きしめてあげたいプリチーなボクの子猫ちゃんのシオン 糞汚い万年発情駄犬…… 略 お前は死ぬのがふさわしいんだよ、愚民ボーア・リク
密室に一人だけでいる。

天才は僅かこれだけの材料で、全てを把握することができます

る。

ナサのスーパー・コンピューターにも負けない明晰なボクの頭脳が、マキシマムな回転を生み出し、恐ろしくもハレンチな解答を高速演算する！

「シ、シオンが……ツ！ ボクのシオンがあの最下級ボーイ・リクにレイプされている！？」

（なんとucciことだ！）

恐らくドレスアップして、鼻血ブーなほどお色気たっぷりでセクシー満点のシオンの姿を見て、あの糞ジヤップ・リクは辛抱堪らず、いきり立つ下半身の衝動に身を委ねて、嫌がるシオンを無理矢理部屋に引きずり込み、その柔らかな果実を彷彿とさせる妖艶な肢体を欲望の誘いに応じるように、思つがさま貪るように味わおうと……！

「イイイイイエロオオオオオモンキンイイイイイイイーッツッ！」

溢れんばかりのボクのオーラに白いヌーブルの上下が内から弾け飛び！

それはさながら一子相伝の暗殺格闘術を極めた世紀末覇者の如しだがボクのオーラは留まるところを知らない。ケンシロウなどとは違い、ボクの場合、その鬪氣の凄まじさはズボンまで破くほどだ。ヌーブルのボタンが弾け飛び、中のシャツを雄雄しく引き裂き、逆立つ金髪にエメラルドグリーンに染まった瞳は憤怒に輝く！

あつという間にボクは白いブリーフ一丁となる。

クールな怒りによつて目覚めたゴージャス育ちの高貴人の激情が燃え上がる！

「ギルティイイイイイ！」

ロツクされた扉を血走った双眸でギラリと睨み、凄絶な笑顔でボクはリクに有罪判決を言い渡す。

ブリーフから愛銃の大口径のグロッケ19カスタム

《ゴール

『デン・ライオン』を取り出す。

特殊改造されたバレットの炸薬は、ボクのその時のオーラに感応し破壊力を増す！

「イエロー・モンキー！ 貴様に相応しいバレットは決まった！」「まずは一発目。

同じくブリーフから一発目のバレットを左手の親指と人差し指で摘むように取り出す。

取り出したバレットをピーンと首を立てて宙に放る。

「秘められし 静かなる欲望の叫び デザイア・ヴァーミリオン！」
ボクのオリジナル愛銃ゴールデン・ライオンに装填できるバレットは三発。

宙に浮いた一発目をアグレッシブに左手で掴み取り、一発目を装填。

続けて二発目を取り出して、ピンと宙に弾く。

「限りなき エロスへの探究 アルキメデス・バイオレット！」
落ちてきたバレットを掴み、一発目を装填。

最後の三発目を取り出し、ピンと宙に弾く。

「そして 高貴なる魂の叫び ゴージャス・ゴールド！」

流麗な弧を描くラストバレットを掴み、装填。

込められたバレットはさしづめ燃料。

このボクの愛銃ゴールデン・ライオンのカートリッジの中で高速回転。三発の炸薬が雄

雄しく配合され混ぜ合わされる。

そうしながら科学と魔術が交差する時、物語は始まるのだ！
ドクンドクンドクンと脈打つ愛銃ゴールデン・ライオン！

「吠えろ 『ゴールデン・ライオン』！」

特殊内燃機関によつて一発に形成されたバレットが扉に突き刺さり、爆破！

粉碎、玉碎、大喝采！

跡形もなく扉を破壊する！

ボクは華麗なステップと前回りで爆煙の中を突っ切り、ハリウッドの俳優のように、『ゴールデン・ライオン』をピタリと構える。あくまで気高く、そう バラを口にくわえながら華麗に優雅に 気高く纖細に ブリーフ一丁で。

「フリー・ズ！」

しかし瞳に映った光景は、半裸状態で半泣きのリクと、舌打ちして忌々しげにボクを睨むシオンだった……。

（一体全体どうしたことだ？）

謎めく迷宮入りした事態を前に、ブリーフ一丁のボクはエレガントにクションとくしゃみを一つした。

『天堂 陸』

とりあえずなんとか紫苑の涎によつて汚れた服を整えた俺は、パーティー会場へと案内された。

スライムに襲われる美女の気分がよくわかつた気がした。本館で催されるパーティーは、一階のホールで行われていた。ホール全体がタキシードやイブニングドレスで着飾った人で埋まっている。

壮麗でどこか近寄りがたい光景。

「凄いな……」
ホールを見回す。

和・洋・中の様々な種類の料理がコの字型に並べられ、華美な服に身を包んだ人々が談笑している。

耳に入つてくる声は、日本語よりも外国語が多い。実際、招待客

のほとんどは外国人のようだ。

メイド服のお姉さんからアルコール類を断り、オレンジジュースを貰つた。

自慢じゃないが俺はアルコール類がからつきし駄目だ。アルコール度数が低い飲み物でも顔が真っ赤になつてしまつ。アルコール度数の高い酒ならば匂いだけで酔つてしまふかもしない。

ちなみに紫苑は……ウイスキーのストレートだつた。ウイスキーのようなアルコール度数の高い飲み物にはそれなりの飲み方があるみたいで、

水割り ロック ストレートとあり、ストレートは水や氷で薄めることなく、そのまま飲むためアルコールを飲み慣れていない者は少し酷なのだが……

グビリと一気に紫苑は100mlくらいのウイスキーを飲み干す。頸を逸らし、喉元がはつとするほど白い。無防備に逸らされた紫苑の胸元から慌てて視線を逸らす。

なんとなく俺も悔しくて……その……オレンジジュースを一気飲みしてみる。

「ふう……うまいな」

「……そうだな」

紫苑の満足そうな声に比べて、俺の声は複雑だ。

と言つのは、別にオレンジジュースが不味かつたわけじゃない。むしろオレンジジュースがこんな美味しかったのかと驚くほど味は良かつた。

白状してしまえば、それは男の面子と言つが、なんと言つが……

紫苑はウイスキーのストレート。

対する俺はオレンジジュース。

性差別する気は毛頭ないが、何か逆じやないか?

そもそもこいつは上流階級のパーティーに紫苑は別段違和感なく馴染んでる。

洗練された雰囲気を纏つて……。

紫苑の際立った容貌は、周りの雰囲気にゅくつと漫透していくのではなく、取り込み圧倒する。

逸脱した他の女性には持ち得ない何かを天然に紫苑は手にしていた。

視線を走らせて見れば、男女問わず紫苑は皆の視線を集めている。俺の元幼馴染みで、手に届かない恋慕の相手と言つ欲田もあるが、それを差し引いてもこのパーティーにいる誰よりも綺麗だと断言できる自信があった。

「もう、アルコールも良いのだが、腹がペコリヌスでござるなあ……武士は食わねど高楊枝と言うが、ペコリヌスにはやっぱり勝てないござるな」

ただ、口を開かなかつたらと言つ条件付きだが……。

でも、これも紫苑の魅力のひとつなんだろう。

そして、紫苑のそういうところが困った所でもあるけど、きっとそういう所に自分でもどうしようもなく惹かれていて、目が離せないんだろう。

たとえ紫苑と住む世界が違うとわかつていても……

自分で息づいている騙しきれない感情に苦い笑みをこぼす。

「陸……」

そんな俺の気配を察したのか、紫苑が俺の方を振り返る。

「！？」

思わず息を飲む。

信じられないほどの美貌が、信じられないほどの近い距離で、すぐ横にある。

息遣いすら聞こえてきそうな……そんな切ない距離間。

紫苑のいつもと違う表情で、声で……いつもと違う何かが俺の平

静を狂わす。

「陸もペコリヌスじゃないか？」

だけどいつも通りの紫苑のセリフに安堵のため息をもらす。

「何だよ、ペコリヌスって？」

「ふふ……よくつつこんでくれた！ もうと第三者の皆さんも困り氣味のところに現れた救いの問い合わせ！」

いつも通りの長つたらしくて意味不明の前口上を、とても長い間、聞いていなかつたように思い、俺は紫苑に尋ねる。

「で、何なんだ？」

「少し腹が減つている時は『ペコリ』。かなり減つている時は『ペ

「リヌス』。餓死寸前の時は『ペコリヌス帝』。紫苑ちゃんワードだ！」

「俺は……」

そこで意外にも自分が空腹だったことに気が付いた。

おそらく、緊張のために今まで食欲を感じなかつたんだろう。

「俺も、ペコリヌスかな……」

「おお！ ペコリヌスでござれるか！」

紫苑は一緒だなど、顔を綻ばせる。

「ムシャ・ンガだな、ムシャ・ンガ…」

確か『ムシャ・ンガ』の意味は、食いまくる……だつたかな？

紫苑と一緒に中華の料理の並んでいるテーブルへ移動する。

お互に会話を交わしながら食事をしていると、紫苑の知り合いらしき人たちがやつて来て紫苑と話し始める。

知り合いらしきと思ったのは、男女問わず全員紫苑より年上の人たちが多くつたからだ。

なんとなく紫苑たちから見えない障壁の存在を感じて、紫苑たちから距離を取る。

適当な飲み物を手にすると、近くの壁に寄りかかった。

紫苑たちは家の話や、彼らの中でも有名な誰かの体の調子や近況など、俺のような庶民には会話に入つていけない内容だ。

さつきまでは見惚れるだけだった豪奢な周囲の空間が、今は人々の談笑の輪から外されて、疎外感が強く身体に突き刺さった。

紫苑という鎮痛剤のおかげで痛みを忘れていた疎外感という傷が俺を苦しめる。

「さつさと帰りたいな……」

パーティーの明るい談笑の空気に、眩きはかき消されてしまう。でも、俺の心に思いのほか独白は大きく響いた。

と、ホールの明かりが消え、フッと闇が押し寄せる。

すると俺の位置からちょうど真正面にあるバルコニーに、明るいスポットライトが当たられた。

スポットライトに照らされているのは、紫苑の婚約者のアレックス君だ。

『皆さん、ようこそバグネット家のパーティーにおいて下さいました。今夜はゆっくりと楽しんでいいで下さい』

マイクで拡張されたアレックス君の声がホールに響く。

『今夜はボクの婚約者であるアヤサキファミリーのレディを紹介させていただきます……シオン・アヤサキさんです！』

スポットライトが闇の中を彷徨い、やがて一人の少女を探し当てる照らされる。

薄闇から浮かび上がる紫苑は、現実味からかけ離れた幻想的な感覺を受けるほど綺麗だった。

綺麗で……決して手に入らない俺の宝物……苦い想いが突き刺さる。

手元の飲み物を一気に飲み干す。

どうもカクテルだつたらしく、失敗したなと心の中で舌打ちする。近くにあつたテーブルにグラスを置くと、紫苑が周りを見回しているのに気が付く。

周りを彷徨っていた紫苑の視線が……俺を真っ直ぐ

捉え

る。捉えて離さない。

(そらせない………)

そう思つた。

紫苑の真摯な眼差しは、俺を完全に拘束する。だから、紫苑がゆっくり俺の方に近づいて来るのを見て、身動き一つできなかつた。

紫苑は俺の隣へと移動する。

それと同時にスポットライトの明かりも紫苑を追いかけて移動する。

つまり、俺も紫苑と一緒にスポットライトの明かりを浴びることになる。

つい先程、アレックス君が自分の婚約者だと紫苑を紹介したのに、いくら幼馴染み しかも頭に元がつく だとは言え、

今、俺と一緒にいるのは不味いのではないだろうか。

それもただ俺の隣に立つというより、その……恋人同士のよひこ

寄り添うように 手を繋いで立つてている。

『か、彼はボクの婚約者の小さい頃の幼馴染みのリク・テンドウ君です……シット（小声）』

思つたとおり、微妙に引き攣つた声音でアレックス君が俺のこと を紹介してくれる。

「おい、まずはいんじやないか？」

寄り添う紫苑に、添えられた手を田配せして耳打ちするが、紫苑

ははつきりと俺に言った。

「あんな顔をしていた陸をほっておけるはずないだろ？」

「……あ、あんな顔？」

動搖する。

「一体、俺はどんな顔をしていたんだろう？」

「……」

多分、いやきっと俺は情けない顔をしていたんだろう。

自覚はある。

俺は宝物をなくした子供のような顔をしていたから。

でもここは事を荒らげないために、紫苑の言つたことを否定する

べきだつたんだろう。

それはパーティーに招待された人たちの好奇心に溢れた瞳から察するに、当然の判断だつた。

「…………

だけど。

紫苑の隣にいたかつた俺は、否定の言葉を紡げずにいた。やがて、ホールに明かりが戻り、華やかな談笑が再開される。俺たちの手はずつと繋がれたままだつた……

『綾崎 紫苑』

陸のいるところに、ああいう形で傍に行つたのは不味かつたと思つていい。

だがそれ以上に、いつの間にか私の横から離れて、悲しい顔をしながらもどこか諦めの表情を浮かべていた陸を見てしまえば、躊躇する必要はなかつた。

あんな顔をする陸を放つておくなど、乙女の風上にも置けぬ。

陸を離さないように、自分の手でしっかりと繋ぎとめる。

どんなことであれ、この手を離すつもりは全くない。

陸のような魅力的な人間は、誰かに取られなによくにしっかりと捕まえておかないといけない！

陸を奪おうとする女子は手当たり次第に吠えて、噛み突いて追い払うことこそ、我が最優先の義務！

いわばこれは 聖戦なのだッ！

「あの……し、紫苑……」

陸は私のモノだ！

爪の先から足の指、髪の毛一本にいたるまで私のモノだ！

今のテンションならばジャイアンですら『デコピン』一撃で殺せるツ！

ズえーつたい、誰のも渡さない！

奪われるならば、ヤンテレモード全開だ！

しかも紫苑ちゃんはただのヤンではないぞ。何せハサミやナイフなどチンケなものではなく、日本刀を持ってヤン全開フルスロットだ！

お前を殺して、私、切腹だ！ 乙女の病んだ生き様をしかとその目に焼き付ける！

そうこの病んだ想いで 月にすり飛んで見せよう！

（月に飛ぶ ヤン全開の 乙女心……字余り）

まあ、ともかくだ。

なんとしてもこの夏の間に既成事実を作つて、むふふでラヴラヴ甘美な一時をゲットしなければな！

「し、紫苑つ……手、痛いんだが！」

「む……すまん」

どうも内的世界で野望を燃え上がらせていた私は、陸の手を必要以上に握り締めていたらしい。

「だがしかし……」いつやつてしつかりと握つていれば、陸は離れていかないだろ？」「

「まあ……確かに……」

陸は微笑する。

穏やかで暖かいムードが私たちを包む。

「こ、これはいい雰囲気なのではないか？ むしろ勝機？

い、今ならちゅ……ちゅ、ちゅちゅ、チューくらいしてもいいのではないか！？ いやいいはずだ！ いいに決まっている、いいに違いないッ！

頭の中で何人もの口ロスケが恥らいながらぐるぐる回る。むしろそういう雰囲気なのでは！？

ラヴ チャンスの到来に、鼻息を荒くする。

餓えた狼の目つきで隣の陸をギラギラ ギンギン、むんむんと見

る。

正確には形の良いその口歯を……きた―――ッ！（ ）

＝ 3 ムツフ～！

これは口付けるしかない！

ゴクリ、と喉を鳴らす。

ラヴ・シミュレーション開始ツツ！

陸の左手を掴んでいる右手を引き寄せ、陸の身体の重心を崩す。そしてすかさず左手で陸の胸倉を掴み、後ろへとさらに重心をかけて、完全に陸の体勢を崩す。

すぐさま腰の後ろのベルトを右手でむんずと掴み、左足を雄雄しく踏み出し、振りかぶった右足で陸の右足を刈る！

これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ『乙女流ラヴ 大外刈り』！愛しい者の唇を得るために、時に投げ技でなければならぬのだ！双眸に流星の輝きを宿し、我が小宇宙の闘気は最早留まるところを知らぬ。

（いざああああああああああ　ツ！）

私は乙女。

ここはパーティー会場。

だが、心は柔道家！

脳裏に描く、完璧無敵のラヴ・シミュレーションを、今までに開始されようとした瞬間！

「ハツハツアーン やあ、シオン！」

私の偉大かつ壮大かつ雄大な計画をぶち壊す男が絶妙のタイミングでやって来た。

アレ公だ……ツ！（怒）

「……失せろ、変態。ペツ！」

語氣荒く唾を吐き捨てて、一蹴。

微笑みながら挨拶してくるアレ公に、一ぱりも顔だけは微笑みながら罵倒を返す。

「し、紫苑！？」

アレ公に影も踏ませない対応に引き攣つた声を漏らす陸。何でだ？？ 紫苑ちゃん、さっぱりわからないぞ？

むしろここは陸、喜ぶところだね？

他の男にはシンシンとつづく島もないのに、陸にだけはいつでも心の扉を開け放ちまくりなのだぞ？

私なら、もう堪らない。絶頂すら覚える。

土佐弁でいうならば「たまらんばい！」とこりやつだ。

だが、遠回しな物言いでは腐っている変態脳にはわからないのか、アレ公はきざつたらしく髪をかき上げる。

その自慢の金髪、わっしわっしとむしりてやろつか？

「シャイだね、シオンは」

「おぬしは、勘違いの馬鹿だな」

一ノ一ノと私とアレ公は《一方通行》で《絶対零度》な会話を交わす。

そこでアレ公は、陸に剣呑な光を含んだ視線を向ける。

まったく、何でムカつくヤツなんだ！

乙女ザムライの刀の鋒びにしてやろつか。

「やあ、ダサダサ超イケてないリク君。セクシーなハイレグ水着で、天から花畠に降り立つたボクのシオンの隣にいるなんておじましいんだよ、このイヒロージャップが！」

「あ、その……」

顔を伏せる陸に代わって、私はアレ公を睨みつけてやる。

「仕方ない、僭越ながらこの紫苑ちゃんが、陸の言ひ分を言ひてる」

「え！？ な、何を言つてるんだ？」

戸惑いながら私の方を見てくる陸に、大丈夫だと一つ力強く頷いてやる。

おまけに色氣を満点に含んだ流し田でのワインクも一つ送つておく。

「ハーフセイリゲない地味なセックスアピールの積み重ねがフラグ成立の第一歩なのだ。選択肢でを選んでとても良い印象を与えたぞをゲットなのだ！」

いつか伝説の木の下で、君となのだ。

「心配するな、陸。シンクロ率一一〇%。以心伝心しまくりだ。暴走して国家が一つ傾くくらいだ」

「そ、それ駄目なんじゃあ？」

「大丈夫だ！ 何も問題はない！ 正義ならぬ乙女は勝つのだ！」

不安そうな表情を見せるものの、力づくで陸を納得させる。

そう 乙女は腕力なのだ。

「いいか、アレ公？」

「ふむん？」

陸の言い分をキザつたらしく嘔んで含めるよつこアレ公に語つてやる。

「つまり陸はだなあ……あ「ゴホン」。

『うつせーんだよ、このチキン野郎！ 僕と紫苑は体も性格の相性もバツチリのラヴラヴの鴛鴦夫婦なんだよ！ テメエみたいな白豚^{クラッカ}の出る幕じゃないんだよ、このボケが！』

……つて言つてるんだ。わかつたでござるか？』

「ぐはあああああああああああッ！？」

「イイイイイイエオオオオオローキンキィイイイー！？」

絶叫と怒号^ガが、この場をヒートアップするよつこ巻き上がる。

「よつくも、このリツチプリンス『カレーの王子様』にも勝るとも劣らない、この高貴で気高く華麗で美しくテンジヤラスなこのボクにそんなポイズンを吐くとはッ！ いくり……言いたいことが言えない世の中だとはい、許さないぞ、この下級貧民が！」

憤怒の表情で口から泡を飛ばしながら、アレ公は陸を嚇怒の眼差しで刺し貫く。

ただならぬ私たちの会話に、いつしか周りの人々が好奇の視線を湛えて私たちを見つめていた。

その好奇の視線に陸は混乱してしまったようだ。

「ば、ばばばば、バカーッ！ むしろ、アホオーッ！ 紫苑のアホ！ 信じた俺もアホだけど、何がシンク口率一一〇%だよ！？ 以心伝心してないじゃないか！？ こ、こ、この淫乱ッ！ ニゾン失敗だよ！ 第三新東京市壊滅だよ！」

「む……てい」

突つ込みを放つ陸の手を、巧みにアレ公の方に弾いて受け流す。というか、気のせいいか？ なんか陸の本音が聞こえたかのような気がしたが？？

ぱしつ。

陸の突つ込んだ手は見事にアレ公の額にビシッと命中した。

「あ……！？」

空氣も凍るような声を零して陸は絶句。

突つ込んだポーズのまま彫像のように動きを止める陸。

「フ、フフ……やつてくれるじゃないか

まるで尻尾を氣円斬かにかで切り落とされた二回変身できる異

星人の笑みを浮かべるアレ公。

アレ公は胸元からバラを取り出してもう一度口に咥えると、自分の手から白いシルクの手袋を外し、陸の胸元に向かって投げつけた。

「決闘だ！ この愚鈍ボーアイめ！」

「そ、そんな！？ お、俺は……！」

慌ててアレ公に謝りうとする陸の後ろに素早く回り込むと、陸の代わりに答えてやる。

「『おおよー、望むところだこの変態外人め！ 国に帰りやがれ！』

紫苑はこの陸様の小猫ちやんなんだよ！ この猫を触つて可愛ぐつて、色々な十八禁的な意味でニヤンニヤンしていいのは、この俺

様だけよ！ 身の程を知りやがれ、この豚ッ！ 豚豚ッ 白豚野郎め
ツ！ ケツにファックするぞ！ ファックインガイ！』

ホール全体に響き渡る私の自慢の作り声。

陸を知る者が聞いたら、あまりに陸そつくりの声に驚愕を感じえ
ないだろう。

今日は大奮発だ！

これぞ、敵を撃沈する紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ザムラ
イ七色声変化》だ！

「こ、この下賤で、下等で、愚劣で、糞ッたりやーの分際で！ こ
のボクによくもそんな口を……！」

「ち、違う！ 今のは俺じゃない！」

アレ公の怒りの形相に、陸は慌てて首を横に振つて無実を必死に
アピールするが、今更無駄でござる

電車内で痴漢と呼ばれ、指された瞬間、男は絶対絶望なのだ。
家庭崩壊、職場復帰ならずだ。

「勝負だ、リク テンドウ！ パーティーらしく、ダンスでな！」
アレ公の声がパーティーカラオケ会場に響いた。

それは デュエルの幕開けの合図だった。

紫苑《

《綾崎

アレ公がパチンと指を鳴らす。

瞬間、ホールの中心が「ゴガガガガ」という文字を背負つて、少しずつせり上がりてくる。

瞬く間に舞踏場のよのうなものができあがると、円舞曲の演奏が始まった。

「ウヒヤヒヤヒヤ！ 庶民のキミにダンスが踊れるかな？ 踊れるかな？ ヘラヘラヘラリン！」

まあ、このボクのような選ばれし特権階級にはダンスなんて御茶の子さいさい、へそが茶を沸かすさ！ ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

化鳥のような咲笑に眉をしかめる。。

アレ公は歪んだ暗い笑みを顔中いっぱいに刻みながら、四方八方にバラを撒き散らしている。

「り、陸……ツ」

不安げに陸の名前を呼ぶ。

私やアレ公のすつとこどつこいのように……俗に言つ金持ち連中なら、嗜みにダンスを踊れるかもしない。

だが、陸はこういう宴に出ること自体初めてなのに、まして踊りを踊るなどとは、何をか言わんやだ。

軽率な自分の行動に恥じた。

そう……陸を窮地に追い込んだのは ただならぬ私なのだ。
ど、どうしよう……！

「紫苑、そんな顔するなよ」

思いのほか言葉に力が漲つている陸の声音に、驚いて顔を上げる。迷惑をかけて、淫乱、痴女、アバズレとなじられてもおかしくない状況なのに……

それなのに、顔を上げた先にはいつもの穏やかな陸の微笑があつた。

「大丈夫。この曲なら……」

「さあ、未来のボクの花嫁！ 荒廃した大地のひつのボクだけの才アシス！ 天から遣わされたボクだけの天使！ ミラクル・スーパー・ゴージャス・ガール・シイイオオオオンツ！ 今日もキミは綺麗だ可憐だ、讃め回したいッ！ さあこのボクと踊つてくれ！ どうよー？」

陸の言葉を遮つて意味不明なことをほざくアレ公に、鋭い一瞥をくれてやる。

「断る」

そう簡潔に答える。

「ゲハアアアアアー！？」

盛大にずつこける音が聞こえてきたが、無視無視。

それよりも陸の方を振り向く。

目の前の少年は丁寧にお辞儀をする。

それは別人のようで、暫し瞠目する。

そのお辞儀に見惚れないと、少年は私の右手を取り、その甲に

軽く触れるくらいの口づけを落とす。

「……………ツツツ！……？？」

瞬間、湯沸し気のように私の両頬が赤く染まる。

お、おおおおおおぬしそれはいささか反則で『じやうりんか…？

心の中で《とき めき》の弾丸が私の心臓をズギューン…と射撃する。

そう 私の心の《とき めき》の導火線に火がついた瞬間だつた。さながら私の心のBGMでふしき遊戯のED《ときめきの導火線》が流れ出す。

私は絶叫した。

(撃たれたツツツツツツツツ…)

何にだと？ 決まつてありますー。

(恋の凶弾にだツツ…)

私はまさに今、目の前の少年に一度惚れた。

「よろしければ、今宵……刹那の間で構いません。俺のとなつてくれませんか？」

そつと田の前に少年の

陸の手が差し出される。

「よ、喜んで……」

頬を染め、恥ずかしさと嬉しさで顔を伏せながら、緊張を隠しつつ、差し出された陸の左手に、自分の右手を重ねる。

陸は私の右に立つと、突然の変貌に戸惑う私をよそに、手慣れた仕草で舞踏場にエスコートしてくれる。

後ろからアレ公の呪詛めいた叫び声が聞こえてくるが、アウトオブ眼中だ。

いつものように穏やかな微笑を湛えてくれる陸もいいのだが、少し強引で強気で、それでいてミステリアスな陸も、なかなかどうして……！ 凄く魅力的だ！

ヤバい！ 惣れる！

いや、惚れているのだけれど、なおこうそうに！ 留まることを知

らす！ 天高く舞い上がる昇竜の如く！

だ、ダメだ！

す、好きになる！ 好きになつてしまつ！

周囲に人がいなければ、陸に身体を支えられていなければ、赤い顔を両手で隠して、首をいやんいやんとして、座りこんでいたかもしれない。

完全に腰碎けの状態だ。

最終ラウンドのボクサーだ。

テンカウント寸前。

洗練された陸の動きに《心配》の一文字は消えていた。

そして、私たちは舞台場の上に立つた。

今、乙女の時が始まる！

『綾崎 紫苑』

舞踏場の真ん中に立つと、陸と私は音楽に合わせて踊り出す。今
まさにナイトパーティーが始まった。
穏やかだが、心が湧き立つワルツの曲は、今の私の心情を表して
いるように弾んで聞こえた。

シャンデリアが放つ煌びやかな光の泡の中、私たちは重なり、少
し離れ、また重なる。

手を取り合い、重ねた手のひらにぬくもりが伝わる。

その温かさは掌を通して腕へと登り、心臓に伝わるようだった。

それは少女の頃。

つたないただの妄想でしかなかつた
お姫様になりたかつ
たという想い。

愛しい陸の腕かいなに抱かれ、ロマンスの階段を登つていいく。

私が小さな頃に憧れた夢。

それが今、現実としてここにある。ここに形という輪郭を伴つて、

今までにある。

たとえ、これが今のパーティーの刹那の間だつたとしても……待ち望み、焦がれていた時を体験したことによる興奮が全身を包む。（ああ……っ！）

目の前で陸が私を見て、穏やかに微笑んでいる。

その笑顔は子供の頃と変らない。幼い頃に魅せられたその笑顔がそこにあつた。

繋がれた掌は暖かくて、重なつた視線は確かに、触れ合つ心は震えている。

夢が 叶つた。

リズムに合わせてターンし、私の腕を引いて、私をリードするよう陸は滑らかに踊る。

談笑のざわめきが遠い。霞みがかかった頭の中でワルツの音を頬りに、搔き分けていく。

もうほとんど陸のリードにまかせっきりだった。

白い煌びやかな光が降り注ぐ中、きらきらした光に包まれながら、私たちは踊る。

踊り続ける。

「凄いな……陸。踊れるなんて知らなかつたで」「わいわい」

感嘆した私の咳きに、陸は微笑する。

「実はわ……種を明かすと、学校のオリエンテーションの催しで習つたんだ」

「そうなのか……」

そこでツキンと湧き上がつていく胸の痛みを感じた。

「なあ、陸……」

「ん？」

俯きながらの小さな私の咳きは、周りの音に消し去られること無く陸の耳に届く。

「学校の催しの……その時

」

よせ、無料な。とまれ私の脣。

そうは念じながらも、私の口は止まらない。

今更、問うてもしかたないことだといふのに……わかっているのに……顔を上げた。

きつと情けない顔を私はしているだろう。

「その時、陸の隣にいた女子は誰だ？」

「あ……クラスメイトだけど……」

「そう、か。ふつ……何故かな。私はその女子が……少し羨ましい」顔を横に逸らし、緩く笑みを浮かべる。浮かべようとした。

それはひどく脆い笑みの仮面で、そうでもしないと私は……まともに陸の顔を見れない。

「できれば……できれば私がその時

陸の隣にいたかったな

後悔が胸を衝く。

不意に夜会の煌びやかさがこの身から遠ざかつたように感じた。きつとシンデレラもの時の鐘を聞いた瞬間、こんな気持ちだったに違いない。

「なんでやねん」

だが私の王子様は関西人だった。

陸は右の人差し指で、私の額を軽くデコピングする。少し痛かった。叩かれた額に手を添えて、驚いて陸を見上げると、陸は逸らせないくらい真っ直ぐに私を見て言った。

「紫苑は今、俺の隣にいるだろう」

今初めて気が付いたかのように瞳を見開く。

そう今、私の隣にいるのは紛れもなく陸だ。

この瞬間は陸のクラスメイトの女子ではなく、私が陸を独占しているのだ。

「…………」

「…………もう紫苑以外を隣に立たせたりしない」

「…………ツツー！」

その真摯な告白に私は喉が干からびたように乾く。視線をどこに定めて良いかわからなくなる。顔が……凄く赤くなつていてるのがわかつた。

まるで全身を駆け巡る血が一箇所に集まってしまったのではない
かと思ひほど。

「この男はたつたそれだけの言葉で私を支配する。

「や、約束だぞ！」

なんとかそれだけを陸に叫ぶ。

「ああ、約束だ」

その約束を誓ってくれた陸の確かな声にどれほど私の心が震えた
か……どれだけ嬉しいか、それは恋した乙女でなくては、わかるま
い

クス・バグネット』

《アレッ

(こんなバカなツツ！)

両眼に映るのは愚民リク・テンドウ。そしてその隣にいるシオン！二人のダンス姿を見て、歯軋りをする。

あんなとろけるような笑顔を浮かべ、涙ぐみながら頬を赤く上気させるシオン。

そんな世紀のプリティガールの隣にいるべき相手は、ボクのはずなのにいッ！

なんという失策だらうか！

そう……ながらアールグレイの香りが嫌いなレディにアールグレイのお茶会に誘つてしまつたかのような地雷原ですっこけん」とき失策。

髪形を変えても切つてもないのに「髪切つた?」とか聞いてしまつたようなダメさ加減。 クールだ。

クールになれ、ゴージャス・エクセレント・ハンサムなアレックス
ス・バグネット。

今のボクは執事のエドワードと手を取り合ひ、悔しさにハンカチを噛み千切らんばかりにリクを睨み付けながら踊つてゐるのが現状。何この現状！ どうしてこうなつた！？

お互いを見つめ合う奴隸スレイブと美姫プリンセスの二人。

その唇は、いまにもくつつきそうだ！？ あ、ああああ——ツ！ 危ない危ないよ！ 触れそう！ ちょっと気をつけて！

そのトキメキ映像が、さながら地球に衝突する巨大隕石アルマゲドン！

(ち、ちくしょおおおおおおおおおおおお——ツツツ！) 覚醒したバトル民族のように雄叫びを上げる。

あの衝突を止めなければならない！

でなければ惑星が綺麗な花火になつてしまつ！

高貴な血ブランジドが誇りとともに燃え上がる。

「エドワード！」

「はい、坊ちやま」

手を取り合い、華麗なターンを決めるボクとエドワード。

「これより目標を『木馬』と呼称！ 我々の暗号名は『ガウ』！
ノブレス・オブリージュ
作戦名」

「かしこまりました」

ボクとエドワードは回転しながら、シオンたちへとそろりそろりと忍び寄る。そうしながらキヤットのように。

それは荒波にさらわれた犠牲者に襲いかかるジョーブの如しだ。見つめ合つリクとシオンの唇は、さつきよりも近くなつてゐる気がするツ！

奥歯をギリギリと噛み締める。

念じるだけで人が殺せるならばツ！

リクはこの瞬間に心停止しているだろ。それほど凄まじい眼光をリクの横顔に注ぐ。

(やひせはせん！ やられはせんぞおおおおッ！ 貴様！」とさきにやらせません！ ヒのボクの栄光、このボクのプライド！ 全てに賭けて貴様の思い通りになどさせぬものか！)

だが、ああ――――ッ！？

い、今にも、ヤバい！ あの麗しのセクシャルな唇が、あの愚民に思ひがさま食られよつと……ッ！？

背筋に走る戦慄。

もう迷う暇も体裁を気にする余裕はない！ ハドワードの名を呼ぶ。

「はー、坊ちやま」

「ひうなつたら『ガウ』を『木馬』にぶつけやるッ！」

「しかし、そうなれば我々もただではすみません。坊ちやまの社交界の貴公子と謳われた坊ちやまの経歷に傷がつくこと」…

…

「経歷を気にしている場合ではないッ！ かのバトル民族の王子も言っていた。たとえ名誉を失ったとしても、誇りだけは思い通りにはならんぞッ！ とかみたいな」

「ゴージャスな金髪を振り乱し、ハドワードのグレイの瞳を説得する。

「……かしこまりました」

「よしきた！ あらほこさつさーッシ！」

素早くスピinn。爪先のエネルギーを前方向に変換。

我が王道を遮る観衆どもを弾き飛ばし、ボクとハドワードは疾る…すさまじい勢いで外道愚民リクへと接近！

思い通り！

ヒの速度でぶちあたれば、あのキスを邪魔できる。

策略家が「勝利」を確信した瞬間によつて瞳を爛々と輝かし、悪魔的角度でボクの口端が吊り上がる。

リク！ キミはチョスや将棋でいうチェックメイトにはまつたんだよ！

思い通り！！

いや、それどころか。
リクを弾き飛ばし、ヤツがいた場所にボクが居座り、ボクがシオンと踊る！

キミに敗北という名のガムをたっぷり噉ませてあげるよー。
延長10回裏、一死満塁でサヨナラホームランを受けたピッチャーハーの気分を味あわせてやるよー！

イチロウに打たれた韓国のピッチャーの気持ちだ！

思い通りッ！！！

エドワードがボクの右腕をがつしりと掴む。
そしてジャイアンツティングの要領でボクをグルグルと強回転！
瞳を勝ちの確信に輝かせ、床を踏み締め、肩と尖らせた左肘をリクの横腹に当てるべく、回転の勢いをコントロール！
「はつ、なつ、セツツー！」
ボクの合図にてエドワードの腕が離れる。
そ・し・て。

ボクを空を引き裂き、解き放たれた矢となり、わかりやすく言つ
ならば旧ザクのタックルのポーズでリクめがけて走る！
「きい ハエエエエエエエエエエエエエエッ！」

リクッ、ボクの勝ちだ！

怪鳥の如く雄叫びと共に突進、邁進、爆進！

今、ボクは壬生の浪である狼新撰組

三番隊組長の斎藤一

の牙突を超えた。

刹那、リクがボクを見た。

ボクの凶行に気がつく、リク。

だが、遅いッ！

トンマ、ノロイとしかいいようがないよ！
(ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！)

わずかに上体を逸らすリク。

シオンから手を離し、僅かに腰を落とした構え。

ハツハハアーン　甘い、甘いよ、まるでガムシロップのよう

元は
ヒーリング

甘い！

「それで避けたつもりか、—BATTUTOooooSAaaaaEいい
いッ！」

今ボクは闘牛、猛牛、狂牛！

むしろクレイジーダンプ。

そんなことで、ボクの狂氣の突進が受け止められるものか！

夫に浮氣され、包丁逆手に突っ込む妻の気分。

最高の気分だ……最高に「ハイ」ってやつだ。

待ち望んだボクの最高の瞬間が、すぐそこまでできている。

「くたばれッッ！」

刹那、リクの両腕が魔法のように動いた。

次の瞬間、ボクは天井を見ていた。

そして、背中が床に激突、激しい呼吸困難に襲われる。

「グハゲホ！？　ば…………バカな！？　な、なぜ、なんだこれは
！？」

仰向けに倒れこんだボクの瞳が……リクを

ボクを見下ろしているリクをッ！

奥歯を噛み締める。

ごくりと寝返りをうつるように転がり、うつ伏せの姿勢へと体勢を入れ替える。

「う、ごめんアレックス君。とっさに投げちゃった。実は俺、合氣

道の段持つているんだ……」

(ふ、ふふふふ、ふざけるな——ツツツ！——！——！)

内心で絶叫する。

こんなことが許されていいのか！

こんなことが許されていいのかッ！？

なにそのとつてつけたような主人公補正！　ざけんなよ！　何それチート！？

こ、こんな展開認められるか！

けれどボクの精神力とは裏腹に、肉体に受けた衝撃に、意識が……

……視界が、明滅暗い……

『天堂 陸』

ナイトパーティーは、煌びやかな思い出とハプニングに包まれて幕を閉じようとしていた。

紫苑は用事があると俺に告げ、会場を後にする。

紫苑の白い背中を見送り、しばらく所在なさげに立ちつくしていたが、撤収作業の邪魔になると思い、会場から出て外で待つことにした。

上気した頬に、夏の夜風が気持ち良かつた。

今夜のダンスは学校のオリエンテーションで踊った時よりも、うまく踊ることが出来たと思つ。

去年はペアの相手に凄く迷惑をかけたと言つのに……

「紫苑がペアだつたからかな……」

咳いてみて赤面する。

キザすぎるし、ガラじやない。

俺には似合わないセリフだ。思えば、今夜は似合わないセリフと

行動のオンパレードだったようだ。

今更のように羞恥が頬に登つて來た。

パーティーの雰囲気、アルコールの摂取。

そしてなによりも寂しげな笑顔の紫苑がきっかけで、俺の心は抑制が壊れてしまったように思つ。

俗に言つ弾けてしまつたつてヤツだ。

不思議と後悔はない。

いや、それどころか 上気した頬が、いつもよりも大きく脈動する心臓が、俺のしたことが間違いじゃないと肯定してくれているような気がした。

と……

「…………紫苑？」

夜空を見上げていた俺は、人の気配を感じて振り向く。

そこにはアレックス君がいた。

当然だ。いくらなんでも紫苑が戻つてくるのは早すぎる。

この展開は予想してしかるべきだった。

「庶民とは言えど、ダンスくらいは踊れるようだね」
はつきりとした敵意を瞳に浮かべて、アレックス君は俺に語りかけってきた。

アレックス君が怒つているのは良くわかっているつもりだ。

彼自身が一緒に踊るのを紫苑に断られたのに、自分の婚約者と他の男がダンスを踊つたら、氣分が悪いのも当然だろう。

さらに言えば、今回のパーティーに参加していた大勢の前で派手に投げ飛ばしたとすれば、怨まれて当然というのだ。

他の男 つまり俺は凄い邪魔者だろ？

「…………

俺は何も言えずに黙り込む。

口火を切つたのはアレックス君が先だつた。

「キミにはシオンを幸せになど出来ないさ。ムダさ、ダメさ、ムリさー、だいたいキミになんてシオンは相応しくないよ！ 考えても

「……」
「うんよ、浮浪者に宝石なんて、似合わないだろ？ 不相応つて
ものさ。そもそも家柄……育つた環境が違いますから。奴隸のキ
ミに王女のシオンは釣り合わないのさ……」

アレックス君の糾弾が心に突き刺さる。

自分が良くなっている事実を指摘され、唇を噛み締める。

胸中で渦巻いている思いは、悔しいと言う感情だろう。こんなに
悔しいと言つ感情を強く感じたのは初めてだった！

「フフン、悔しいかい？ 悔しいかい？ せいぜい悔しがるがいい
さ」

アレックス君は傲然と顎を反らし、その端正な容貌に嘲りを刻み、
言つた。

「キミは無力なボーカーさ」

この時に俺を突き動かした要因は何なのか？

アルコールのために大きくなつていた気持ちか？

または、悪口に対する純粋な怒りか？

それとも、俺の欲しいと思っている立場にいるアレックス君に対
する嫉妬か……

「どんなにお金があつたって、裕福で不自由のない暮らしをしてい
ても！ 縛れないものがあるだろッ！」

気が付けば、俺はアレックス君に言い返していた。

まるで臆する身体を、戦慄く唇を律して、気持ちが飛び出したよ
うだった。

「何……？ そんなものボクにはないね」

傲慢な、自信に彩られた表情を見せるアレックス君。

その傲慢さを削るために、俺は鋭く指摘する。

「人の心は絶対に縛ることなどできない！ 現にアレックス君は紫
苑を縛ることができないじゃないか！」

「ツ！？ う、うるさいぞ！ 庶民の、それも低能の分際で……ツ
！」

アレックス君は刺し貫かんばかりに俺を睨み付けてくるが、ふと

何かに気が付いたように口の端を吊り上げる。

「そうか……！ キミはボクとシオンとの仲に嫉妬しているんだな？ ムダだぞ、ボクたちは親が決めたファインセなんだ！ キミの割り込む余地はゼロさ！ 無さ！ ナッシングさ！」

（そんなことはわかつてゐる！ わかつてゐるぞ！ 誰よりもそんなことはわかつてゐる！ けど……ツー）

熱に浮かれたようにアレックス君が続ける。

「ハハハハハ！ 嫉妬かい？ 全く子供だね。潔く身を引いたらどうなんだい？ だいたい嫉妬なんてチャイルドがすることさ。キミは随分と幼いね、幼稚だね、ガキだね。ベイビーだね」

拳を硬く握り締める。

心を中心に身体中が熱を帯び、いよいよ得意絶頂に激しくなる目の前の男の語調が煩わしかった。

「嫉妬もできないようじや その恋愛は終わりだろツー！」

鋭い踏み込みの音が石畳を叩く。
気がつけば強く硬めた右拳を、アレックス君の左頬へと叩きつけていた。

アレックス君の方が上背もあつたし、体格は当然、俺よりもいい。だから、アレックス君が上体を反らしながら堪らず芝生に尻餅をついた時、俺はあまりのあつけなさに驚いてしまった。

ぽかんとしたアレックス君の表情が、瞳を見開いた驚愕の表情へと変化するまで時間はからなかつた。

「な、殴つた……？ このボクを……？」

「ああ、殴つたさ」

罪悪感がこみ上げてくるが、それを努めて圧殺する。

アレックス君は俺に殴られた左頬を押さえ、内股に座り込みながらブルブルと小動物のように震えながら、微妙に破綻した精神状態で言葉を紡ぐ。

「せ、世界に多くの企業を持つ巨大複合企業経営者の社長の一人息子にして、せ、世界の財閥の五本に指に数えられるほどの家柄の息

子。じ、実はハップブルク家の親戚で、高貴な血筋をひくバグネット家の跡取り主を……せ、政界にまでその実力は及び知れるこのアレックスを……殴った！？

顔がさーっと青ざめる。

人を殴つてはいけないと言う倫理に外れた行為に青ざめると、ついより、殴つた相手が超超大物だと今更に気が付いて青ざめた。

「殴つたこのボクを……コノボクヲ！？」

裏返つたアレックス君の語尾がいよいよ怖い。

アレックス君の震えが激しくなり、まるで痙攣しているかのようだ。

そして彼は絶叫した。

「パ、パパにも殴られたことなかつたのにイイイイツ！？」

「お前はアムロカツ！？」

よせばいいのに、関西人に流れる血がそつさせるのか、つい条件反射で鋭いつつこみを入れてしまう。

「ボクにつつこんだ！？」

「やかましいッ！」

戦慄の表情を見せるアレックス君に、再度つつこみをいれる！とうとうアレックス君は両目に溢れた涙を盛大に零しながら、泣き叫び、滂沱しながら走り去っていく。

俺といえば……なすすべなくアレックス君の走り去る背中を、複雑な心境で見つめていた。

「……やつちやつたな」

随分と時間が経つてからぼつづりと呴く。

アレックス君の言葉が頭の中で反芻される。

今回のいざこやは俺が悪い。

アレックス君に、図星を指されて……我慢ができなかつた。

彼の言つている事は正しい。

だけど……俺は……重たい気持ちが、ため息となつて漏れる。紫苑が戻つてくるまで、右拳の熱い痺れを抱えて立ちつくす。目

まぐるしこ思考の渦に飲み込まれ、そこに佇んでいた……。

《天堂 陸》

今、右手の上には、ホームセンターで購入した扉のカギがある。店員さんお勧めの、強力なカギを取り付た。

相手が恋に狂つた武将である紫苑とはいえ、おそらくこの関所を突破できまい。

多分……いやきっと！

布団を頭までかぶり、部屋の明かりを消す。

闇夜が押し寄せてきた部屋の中は心細い。じつとりとした汗を滲ませ、ただただ部屋のドア　　心の障壁　　をじつと凝視していた。

寝付くまでの間、祈りをこめでずっと……

空音殿にあてがわれた部屋に敷いていた布団からムクリと体を起こす。

今は草木も眠る丑三つ時。

「今宵こそは必ず陸を落とす！」

双眸に凄絶を煌かせると、今宵、必要になるかもしれないモノを手に取り、部屋からそっと出た。

陸の部屋までやつて来ると、寝巻きがわりに着用している陸のYシャツ（勝手に拝借したでござる、忍々）の胸ポケットから針金をキュピーンと取り出す。

あたかも必殺仕事人の如く。

紫苑ちゃんは瞳を闇の中で、血に餓えた獣のようにギラつかせる。精巧にして緻密な動きで鍵穴に針金を突き刺すと、長年の勘とプロ意識を信頼して、ガチャガチャする。

数秒して、ある感情が私を支配した。

「……飽きたでござる」

やはり、こうこうチンケな夜這いは紫苑ちゃんらしくない。

ここは大胆不敵、容赦無用、強大無比に夜這いせねば、ご先祖様に申し訳がたたないというものだ。

必要になると思って持ってきたモノはズバリ、腰にさした日本刀だ。

日本刀をスラリと抜き放つと、膨れ上がる乙女パワーを剣氣に変え、ぬううううんと刀身に注ぎ込む！

「これぞ乙女の障害を薙ぎ払う必殺剣、

「オオオオオオオオオオオオ——ツ！」

紫苑ちゃん七つの大技の一つ、その名も……

『乙女ザムライ斬鉄剣だ！』

既に七つでているかもしだれないが、関係ない。ゴルゴ13風に言えば問題ない。

恋する乙女は日々進化しているのだ。恋するバトルサイボーグとは紫苑ちゃんのことなのだ。

私の放ったピンク色の斬撃は、扉を真っ二つに切り落とす。

「俺の心の障壁が真っ二つ！？」

鋭い尾をひく悲鳴を上げて、陸がバタバタと四肢を痙攣させて後退る音が聞こえる。

だが、そんなの関係ない。

どこかの裸の芸人の如く、そんなの関係ない！

時は深夜 ラヴ嵐が轟く夜這い時、今、押し倒さずして、

いつ押し倒す！

紫苑ちゃんは先手！ 先手、先手の鬼！

押して押し倒して押し倒して、押し倒し続けることこそ、我が生き様！

「こーやああああああああああ——ツ！」

気分は戦国時代。

日本刀を床に置くと勝ち鬨を上げて、モモンガの如く両手を広げて陸に襲いかかる。

「や、やめてくれツ！ パジャマを引き千切らんばかりの勢いで引つ張らないでえツ！」

バリツ。

紫苑ちゃんの気合と情熱、そしてねちっこい欲望がブレンズしたラヴは、陸のパジャマを縦横無尽、四面楚歌、絶体絶命の強引恋愛最高と言ひ塙梅に引き千切る、乱れ千切る、砕き千切る！

ぬふふ……ラヴでいざれり

粉碎、玉碎、大喝采！

どこの玩具会社の若社長のように雄叫びを上げ、双眸に星を宿す。

（　　）
「い　やああああああああああッ！？」

体の上半身を覆う邪魔なパジャマを破かれて、陸は私の快楽中枢が刺激されるような色っぽい悲鳴を上げる。

全く……私をこんなに昂りせるなんて、なんて罪なやつだ。許し難い。お仕置きの時間だ。

愛の極刑に値するなこれは

が、しかし！

パジャマが破れたせいで、当然の如く、陸の上半身が露になる！海へ行つたせいで程よく日焼けした褐色を帶びた肌。均等のとれた体格には、綺麗に筋肉がついている。

もし私が吸血鬼ならば噛み付きたくなるような首筋。キスマーカの欲求に駆られそうな纖細な鎖骨の輪郭。胸からあばらの流麗なフオルム、引き締まつた腹筋に細い腰元。可愛い《おくそ》と来たら、もう堪らないッツ！

「陸うつうつうつうつうつ！」

むう「ううううん！－ キタキタ！－ 紫苑ちゃん覚醒の波動で霸道、破道でいざれり－」

「私は　　乙女をやめるぞおおおおッツ！－」

鼻血ものの破壊力を秘めていた恐るべきカリスマボディを前にして私の理性が音速で飛ぶ。

大気圏突入だ！

だが、あまりの興奮を前にして鼻に熱い衝動。

「むう、鼻血が……」

鼻に流れる赤い液体の存在を感じて、慌てて顔を上に向かって……

「助けて、神様ツ！」

「ぬ、迂闊ツ！？」

鼻血に気をとられ、陸を拘束していた手を緩めた一瞬の隙をつき、陸は脱兎の如く逃げ出し、素早く押入れの中に閉じ籠もる！

「おのれ……！」

夜叉の表情で毒づく。

なんという失態、何という迂闊！

インフルエンザ蔓延で臨時休校中、自宅待機せずに遊び歩く中高生くらい迂闊だ！

素早く両方の鼻孔にティッシュを突っ込むと、陸が閉じ籠もった押入れにライジングサンの勢いで駆け寄る。

その勢いのまま閉ざされた襖へと疾走。

足裏の床を鋭く蹴り付け、起立の姿勢で斜め四十五°の角度で跳躍

「ねりやああああああああああ！」

押入れの襖へと頭から突つ込む。

これぞ、紫苑ちゃん七つといつか、もう七つ超えていろいろが、とにかく！

紫苑ちゃん七つの大技の一つ、その名も……

『乙女ザムライ人間テポドン』だ！

どうしようもない貧民国にも関わらず大国と強気な交渉で食糧援助だ！

つまりこの世は先にキレた方が勝ち、ゴネ得ゴネ得と班長も言つてゐる！

破裂音と共に襖の生地が破れ、私の頭は襖を突き破つて押し入れへと、頭のみの侵入を果たす。

暗闇の中で陸と瞳が合つ。

「ぎやおオオオオオん——ツツ！」

アーニー！？

和に呻呻した。隣に、おれはおが悲鳴を叫ぶ。

その勢いで鼻の方は穿き透けていたテッシュが抜けた
ギロリと押入れの隅で震える陸へと双眸を向ける。
「ぎひいいいいいいいッツ！？」

醫夜可車のヘッジアリバの勢いで輝く私の眼光を見るのは陸

アーティストのエッセイ

すぐさま齧えた子羊に襲いかかわつて、身体を、身体を……む、むつ?

「う、動かない……！」

戦慄に身を震わせる。

(おいおいマジかよ、ジー・マー?) 動搖のあまりチヤラ男風
頭は押し入れに侵入を果たしたものの、首から後ろは未だに押し

入れの外た

ぬニ
攻みに押

鳴り響く。

「ひいいいツツ！」

眼前の私が、身動きがとれないと悟った陸が、這うよろづにして押し入れを飛び出す。

「ま、待て——！ 待たぬか！ 私をこのままにしておくつもりか！ これでは痴漢がやつてきたら、魅惑の紫苑ちゃんの安産型でたわわな桃尻を触り放題ではないか！ おぬし、それでも『ものふ』かあーッツ！？」

「そ、そうだよな。このままにしようとまずいよな！」

部屋から逃げ出そうとしていた陸が踵を返す気配が伝わってきて、デスノのライトばりの笑顔で笑う。

（クックククク、馬鹿め！ 自由を取り戻し次第、すぐさま組敷いて一晩中、にやんにやん言わしてくれるわッ！ 今夜は眠れると思うなよ、陸ッ！）

陸の馬鹿さ加減を愛しく思いながらも、憎さ百倍。

愛の拒絶の仕返しは、常軌を逸すると思うがいい！

そう 今宵の紫苑ちゃんは荒武者と知るがいいわ！

普段は清楚で可憐、でも寝床の上では性欲絶倫が紫苑ちゃんの本性よ！

滾るアドレナリンに心をトキめかせていると……ふと違和感。

「む……なにやら私の身体に布団が何重にも巻かれているような気がするんだが……」

あいにくと頭は押し入れの中なので、外の部屋といつか陸の様子は伺い知ることは叶わない。

「ああ、勿論さー！」

にもかからず、じいじのドナルドのように親指をビシッと立てていい笑顔を浮かべた陸が見えたような気がした。

「……どういうつもりでござる？」「

「決まっているじゃないか！ 紫苑の身体を布団巻きの簞巻き状態にして、紐で縛るんだよ！ ジゃないと逃げ出した後に追いかけてきそうだからな。万全を期して紫苑を捕縛しどかないと……」

「な……ッ！？」

やはり頭を襖に突っ込んだまま、暗い押入れの中に戦慄する。

敵軍へと突っ込んだ瞬間、背後から奇襲されたときの武将の気持

ちがわかつた気がする。

し、しかし、まさか。

そ、そう来たか……これは認識を改めなくてはいけないようだ。

坊や坊やと思つていたが、なかなかどうして……！

「陆、まさか縛る性的趣向があつたなんて……なかなかの鬼畜ぶり

に紫苑ちゃんドキドキだぞ？」

両頬を染めて、イヤンイヤンと首を振る。

「な、な、な、な、なんでやねん！？」

「ふふ、隠さなくとも良いぞ。これでも紫苑ちゃんはそういうアブノーマルな嗜好にも対応できるぞ。まあ、私が陸を縛るという当初の予想とは違つたが、なかなかどうして……いうのも悪くはない。そうだ、私の部屋に手錠や首輪、蠟燭に三角木馬があるぞ？」

「ば、ばばば、馬鹿たれ——ツツツ！ そんなの使つかツツ！」

パシン！

「はふん！？」

布団越しに尻へと衝撃を感じて頭が持ち上がる。

「す、スパンキングとは、一体いつの間にそんな高度な性技を……？」

「な、なんでやねん！ 」のいい加減にいい ツ

陸の手が天上高く振り上げられる気配、振り下ろされる陸の手のひらを想像し、振り下ろされるまでの時間 その永遠にも刹那にも似たこの胸に去来する感情は……

「 しろおおおおツツ！」

そして、陸の手のひらが私の尻へと振り下ろされた。

もう信じられない！

部屋のドアを真つ二つにして強引な夜這いもそうだけど、ここ最近……そうナイトパーティーが終わった後の紫苑の勢いは、はつきり言つて異常だ。

いや、前もかなり凄かつたけど、今は前を遥かに増して異常だ。そもそも夜這いというか、なんか夜襲の間違いじゃないだろうか？　だいたいこれが初めての襲来ではない。連日連夜毎夜この調子だ。昼も夜も関係なく飛びかかってくる紫苑に真剣に命の危機を感じる。というか、さすがにこれはやりすぎやろッ！

あげくにすぐに脱出できないように布団で簾巻きにすれば、

『ふふ、隠さなくても良いぞ。これでも紫苑ちゃんはそういうアブノーマルな嗜好にも対応できるぞ。まあ、私が陸を縛るという当初の予想とは違つたが、なかなかどうして……こういうのも悪くはない。そうだ、私の部屋に手錠や首輪、蠅燭に三角木馬があるぞ?』

怒りの余り、俺がドメスティックバイオレンスに走つても仕方ないだろう！？

思わず勢いで紫苑のお尻を叩けば、

『す、スパンキングとは、一体いつの間にそんな高度な性技を……？』

俺の中で何かがキレた。

それも数本まとめてブチブチと、結構太いはずの俺の神経は、この最近の紫苑の言動と行動のせいでズタズタにされていたらしく。そう……これはアレックス君の類を殴つたときと同じ感覚。

駆け巡る灼熱。

やりきれない現状。

(ああ まよい……)

どこかで冷静な俺が言った。

「な、なんでやねん！」「のいい加減にいい」ツ

言つたけど、止まらない。

どうにも止められない。

止められるわけがない。

そして止める気もない。

悩ましく、期待している風に、お尻をくねくねと動かす紫苑のお尻を見ていたら……布団簀巻きでミノ虫ダンス踊られちゃあもう我慢できない！

俺の背後で「ーンンフレークの「ココロの靈が咆哮＆ドリルヒングした。

「…………」

「…………」

そして、俺の手のひらが紫苑のお尻へと振り下ろされると同時に

「ちゅっと陸、うるせこよ？」

「まあまあ陸ちゃん、夜は静かにしないと

部屋へと海と母さんが入ってきた。

そして、絶妙に一拍遅れて、

「はうううーーーーーん

紫苑の快感と快樂の吐息が響く。

まるで狙っているんじやないかと思つくらい、絶妙な……これ以上ないといふくらいの。

部屋が凍りつく。

いや、凍りついているのは俺だ。俺だけだ。

紫苑は布団で簀巻きに丸められているにもかかわらずクネクネしているし、海と母さんは『ああ、なああんだ、なるほどね』というニヤニヤ顔。

クネクネ動く紫苑。

あらうことにか。

「り、陸う……もう少し強くても大丈夫だぞ？ それに布団越しじゃなくて直接でも……」

ダモクレスの剣。

そんな喩えが頭を走り抜けた。

古代ギリシャ神話のとある王が、その繁栄を称えすぎたダモクレスを天井から剣を吊るした王座に座らせたことから、繁栄の中にも常に危険が存在しているという意味にたとえられる。

「の紫苑のお尻は……いや、紫苑そのものが、俺にとつてダモクレスの剣なのだ、と。

俺はそう思い。

「いや～～今夜は大収穫だ！ 紫苑ちゃん、軽くマゾ開眼だぞ！」

今夜、紫苑はマゾを開眼し、

「陸……さすがにＳＭプレイはどうかと思つた（一ヤ一ヤ）」

海には性癖を誤解され、

「まあまあ陸ちゃん、激しいのね。初孫楽しみだわ～名前考えとかなきやね」

母さんには初孫の名前を考えさせるとこり破壊になつた……

「一体全体……なんでやねん……」

未だにクネクネ揺れる紫苑の尻を頭上に、がっくりと頃垂れて膝をつく。

屈辱に囚つん這いになつた俺は部屋の床を涙で濡らすしかなかつたわけで……○～

《アレック

ス バグネット》

「ふう……」

ボクは小鳥の轟りにも似たセクシーなため息を吐き出す。
そして、ゆっくりとリク・テンドウに殴られた左頬を、自分の左手でさわさわと羽毛のようなタッチで撫でてみる。

頬は……あのパーティーの夜に殴られた痛みと驚きの熱を保つて
いるように思えた。

驚きだった。

腰を抜かさんばかりの巨大な驚愕。マジでリアルでクールにしょ
んべんチビるかと思つたさ。

今まで、ボクに逆らう者など皆無だった。
しいて言つならノーチェーン。

それも当たり前。

麗しく、華麗で、優美で、コケティッシュで、美しく、この世の美
と権力を掌握し、財力も、知性も、品格も、全てを兼ね備えたこの
ボクに歯向かう者など いるわけがない。

いや、今は……いるわけがなかつたのに、だ。

「このボクを初めて殴つた存在……」

全てを兼ね備えた完璧無敵のこのアレックスを殴つた男、……リク・テンドウ！

取るに足らない矮小な存在だったはずなのに、今やリクはボクの網膜に、そしてハートに鮮烈に焼き付くほど、無視できない大きな存在になつていて。

思えばボクはあまりにもリク・テンドウのことを知らなさ過ぎる。ここにはリクを念入りに多角的な視線で分析する必要があるだろう。確かシオンの身辺調査したときに、リクのことも調査させたはずだ。

「エドワード……エドワードいないか！」

「はい。坊ちやま、いかがなさいました？」

すぐにエドワードはボクの許に駆けつける。

なぜか……ボクは緊張し震えながら言葉を口に出す。

「……た、確かにシオンの身辺調査をした時に……その……リクのことも調べさせたと記憶しているんだが……」

「はい。テンドウ様の調査も仰せ付かりました」

「そ、それに少し目を通したい」

「畏まりました。只今、お持ちいたします」

「あ、ああ……頼むよ」

用件を伝え終えただけなのに、なぜか緊張で喉の乾きを覚える。

忠実に、無駄のない動きでエドワードはリクの調査書を保管している部屋へと急ぐ。

エドワードが調査書を持つて来たのは、時間にして僅か数分だったはずなのに、不思議と長い時間がかかつたように思えてならなかつた。

「お待たせいたしまして申し訳ありません、坊ちやま」

頭を下げるエドワードに、首を横左右に振つて調査書を受け取る。

「ありがとうございました」

「は、失礼いたします」

懇懃に頭を下げるエドワード。

エドワードが部屋から退室したのを確認してから、ボクは調査書に視線を走らせる。

リク・テンドウ／天堂・陸。

性別・男。身長172?。体重60kg 血液型・O型。

備考に目を通す。

性格は穏和で実直な人柄。成績は優秀で、クラス委員を務めているらしい。

だけど

「これだけではな……」

ボクは情報の少なさに落胆のため息を吐く。

やはり、ここはリクにもう一度会いに行く必要があるだろう。決意を瞳に込め、窓から見える澄んだ青空を見据えた。

焦つていた。

その焦りを少しでも紓らわせようと、空音殿からあてがわれた部屋の窓を開ける。

どうして、夕焼けと言つやつはいつも何かに急き立てられるような気分にさせるのだろう?

私は陸と私の現状に歯噛みする。

アレ公が催した夜会での踊り……あのときの私は幸福絶頂だった。しかし、現状は最悪とまではいかないが、漠然と好まない方向に徐々に向かっていると思つ。

(あそこで畳み掛けるべきだつたのだ!)

ほぞを噛むが、いまさら後の祭りだ。

と、夏の終わりを感じさせる夕凪が私の頬を撫でる。
それが私の焦燥を一層かきたてた。

陸の夏休みは残り少ない。

それは即ち、私の時間が少ないということに繋がる。

「いや……」

私の居所がもう完全にお爺様にばれてしまつていて、

本家から迎えがくるまで もう時間がないだらう。

私だけ、手をこまねいて見ていたわけでない。

毎日、てやんていな感じで『ラヴ アタック』を、昼夜を問わず繰り返した。

けれど、いつも焦つて陸を怖がらせてしまい、失敗してしまつ。

「どうすればいいんだ……」

私にしては珍なくらい泣き言を吐いて、唇を噛みしめる。

実際にどうすればいいのか…… 答えがみえない。

わからないんだ……

視線を足元の畳に向けて、私は頭を振る。

「…………」

いや 本当はわかっている。

答えは陸の所にしかない。

そして、私の今後の答えを出すのは、陸だけだ。

陸の部屋へと行く。

陸の部屋の入り口には、真つ二つにされたドアがバリケードのように配置されている。

おそらく、私の侵入を拒むための障害なのだろう。胸が痛かった。

寂しくて、苦しかった。

いつもの紫苑ちゃんならば、昨夜のようだ扉を平気で真つ二つにするくらいの行動力とラ、ヴパワーを遺憾なく発揮して、余裕綽綽に目の前にある扉のバリケードを排除する。

でも今の私には

今の私には、目の前のバリケードが陸の明確な拒絶にしか見えない。

陸の拒絶を認識してしまうと、体の中で力が萎るのがわかる。

強い脱力感が全身を襲い、指先まで力が伝わらないような、鋭い無氣力感が私を苛む。

私は拒絕されているのだろうか？

迷惑だと思われているのだろうか？

好きだとは思われていないのだろうか？

何よりも、

(私は陸に嫌われているのか…………?)

頭を横切る答えに恐怖する。

そんなことはない……はずだッ。ないに……ないに決まっている！

それなら それなり、なぜ？

そして、

「どうして……涙が出てくるんだ？」

何なのだ、この胸の痛みは？

どうして……この感情の波はこんなに苦しいんだ？

まるで心臓を握り締められているようだ。

呼吸困難のように息が苦しくなって、背中を壁に寄りかかる。

（苦しくて……それよりも、もつと悲しい）

そんな、軟弱極まりない感情が私を支配する。いや、支配しかけた。

そんな時だ。

私の左肩に手が置かれたのは。

「～ツツ～！」

ポンとこう響きが聞こえてきた。いつな気軽さと優しさが同居したような接觸。

でも、余裕のない私は、そんな気軽さと優しさが同居したよを震わせた。

驚いた私が振り返った先には

「やあ、紫苑ちゃん」

海殿がいた。

第一十七章 もどかしい関係

綾崎紫苑》

『

「海殿……」

振り返った先には、海殿が微笑んでいた。

こうして見ると、陸と海殿の容貌は双子のせいいかとても似ている。

けれども纏う空気が……霧囲気が違う。

同じ顔をしているのに、違う人なのだ。

それでも陸を思わせる微笑に胸が高鳴り、陸本人の笑顔と錯覚する。

けれど、胸を貫くのは痛みだ。

一体、最後に陸の笑顔を見たのはいつのことだろう？

焦つて、陸を怖がらせていた私は、陸の笑顔を曇らせてばかりだったのではないか。

高まる恋慕を押し付けて、ただ陸を困らせていたのではないのか。

私は陸に迷惑な女子だと思われているのではないだろうか……

込み上げてくるものを堪えきれない。

溢れてくるものを零してしまつ。

「紫苑ちゃん……」

田尻から溢れて零れた悲しみの残滓
うに私の田尻をなぞり、涙をすくい取ってくれる。

「つづり、ひづく……か、かたじけないで」

優しくされれば、されるほど。

陸に似た顔で優しくされればされるほど。切なくて悲しくて、どんどん私は泣けてくる。

「紫苑ちゃん、今は泣くべきじゃないよ」

悲しみの底なし沼に沈みこんでいた私は、海殿のやの言葉に俯いていた顔を上げる。
「紫苑ちゃんの今までのやり方が全部間違っていたとは俺には思えない」「ない」「ない」「ない」

ゆづくつと。

噛んで含めるように海殿は静かな口調で続ける。

「でも、陸の声は聞いていた？ 想いをぶつけただけじゃ進展しないんじゃないかな」

「陸の声…………」

それはとても不思議な抑揚で私の胸に問いかけるように響いた。
まるで何か、とても重要な核心によづやく手を触れたときのようだ。

な。

田の前を覆つていた霧が晴れたときのような。

世界が広がり、透明感を増したような気がした。

「陸は奥手だからついつい迫つてこく気持ちはわかるけど……想いをただぶつけるだけじゃなくて、相手のことを見遣つて陸の声を聞いてみたらどうかな」

「私に陸の声を聞くことができるだらうか…………」

自信も余裕も喪失していた私は、ついそんな弱音が突いて出る。
口にして後悔。

眉の形を困難に寄せて、顔を伏せる。

「できるよ」

海殿の強い断言に、私は縋るように海殿へと視線を向けた。

強い……でも優しい。

陸によく似た眼差しが私を見ていた。

「紫苑ちゃんならできるよ」

ひょうひょうとした表情で海殿は笑う。

「俺の知っている綾崎紫苑って女の子は、それができる子だよ」

胸が熱くなつた。

両手の拳をぎゅっと握り締める。

私は……こんなところでメソメソするためだけにアメリカから帰国してきたのか？

否！

断じて否ッ！

泣くなんて、みつともない。強い者は、決して泣きはしない！
そして諦めないはずだ。

お爺様に逆らい、運命に抗い、私は未来掴み取るために陸に逢いにきたんじやないか！

掌で乱暴に両方の瞳を擦ると、寄りかかっていた壁から体を離して、ちゃんと立ち上がる。

「ありがとう、海殿。おかげで勇氣百倍、常勝無敗、天下無双だ。
しいて言うなら顔を取り替えたアンパンマンの如し」

「はは、惚れ直した？」

「ふふ……陸の次にならな

海殿の冗談めかした問いに、私もいつもの調子を取り戻してにやりと笑いかける。

「…………頑張れそつ？」

「無論ッ！」

海殿の問いかけに答えるように背を向け、陸の部屋へと向き直る。

今のは意の気持ちが消えないうちに、扉のバリケードをどけて、

陸の部屋に入つていぐ。

「頑張れよ……紫苑ちゃん」

海殿の応援を背中で受け止めながら……

電灯が消え、闇夜に染まつた部屋は当然ながら暗かつた。それでも月明かりに照らされたベッドは、仄かに明るい。陸はベッドにいた。

連日の襲撃で泥のように陸は眠つている。

耳を澄ませば、規則正しく安らかな陸の寝息が聞こえてくる。夜から深夜へと変わった時間は、部屋を静寂に満たしていた。

窓へ視線を走らせると、風に運ばれた夏の匂いが鼻孔をくすぐる。切り取られたような空間。

そんな穏やかな静寂が部屋にはあつた。

陸のベッドへと近づくと、陸の顔を見つめる。……とてもかっこよかつた。

少し躊躇すると、マナー知らずとは百も承知だが、陸の寝床に邪魔させてもらひ。

陸の顔のアップと体温。

そして陸が私のすぐ隣にいるという認識が、心臓を一際大きく跳ね上がらせる。

動悸を激しくさせる。頬が熱くなるのがわかつた。

そこで駄目押しのようご、陸の無意識の癖が出た。

つまり……その……私は抱き締められることになつた。

承知の事実とはいへ、この一瞬は頭が真っ白になり、まともに思考ができなくなる。

私はあたふたした。

そして、暫くしてようやく落ち着くと、勝手な行動の罪悪感のためか、視線を逸らしながら、けれどしっかりと陸の頭の後ろに両手を回す。

陸が起きないのを確認すると、大胆にも自らの身体を陸の体へと密着するように抱きつく。

いつもなら…………いつも私のなら、抑えきれない笑みが顔に広がるはずなのに……今は……

私は泣きたくなるような幸せと、乾いた笑いを出したくなるような虚無感に囚われた。

(もう……嫌だ)

唇を強く噛みしめる。

このやるせない想いを振り払つよひ、陸に強く抱きついた。

「無意識の抱擁では……もう嫌だ、ツ」

初めは無意識でも私を抱きしめてくれれば、それだけで満足できた。

でも今は違う。

意識している陸に私を 綾崎紫苑という女を抱きしめても
らえなければ、意味がないんだッ！

「わかつ……て、いるの……か？」

涙腺が決壊。

涙で滲む視界。内心の激しい想いを吐露する。

「私はお主が、好きなのだぞ……つ！」

世界中の誰よりも私は陸が好きだ。

それは愛と呼べる感情で、陸と逢った時からずっと私の中にあつた想いだ。

誰にも譲る気はないし、誰にも負ける気はない。

私は陸が好きだ。

大好きだ。

でも、陸はどうなのだろう？

「教えてくれ……陸は私のことが好きなのか？」

第一十八章 告白、そして……

《天堂 陸》

(な、何だ！？)

体が揺らされたり、誰かの声が近くで聞こえたような気がした。

目を覚ましてみれば、腕の中には泣いている紫苑がいた。

紫苑の瞳は涙で溢れ、零れ落ちる涙が両頬を濡らしている。

紫苑の泣いた顔を今まで見たことがない。

だつて紫苑は、いつも向日葵のように笑っていたから……

泣きそうな顔は一度小さい頃にあつたけど、こんなふうに泣く紫苑は初めてのことだった。

と、またもや紫苑が俺のベッドに入り、身体が密着する……と言

うより抱きついている姿勢になつていて、気が付く。

(これは何と言つか…………非常にヤバイッッ！)

理性の警告に従い、慌てて紫苑から距離をとるために体を捻るが、頭の後ろに回されていた紫苑の両手が、俺の体を縫いとめる。

「し、紫苑……っ」

「……嫌か？」

説得しようつと出た俺の言葉は、途中で紫苑の声に遮られる。

「え…… その嫌とかそういうことじゃなくてだな」

「その時、俺は気がつかなかつた。

紫苑がどういう表情で、どういう想いで聞いていたのかなんて気がつけないでいた。

ただ触れ合う身体と伝わる体温に、高鳴る鼓動を聞かれないよう願うのが精一杯で……

「私は陸に抱きしめてもらいたいし、陸を抱きしめたい」いつもと違う紫苑の雰囲気に飲まれてしまい、何も言えなくなる。視線を外せなくなる。

そして、震えた。

これから俺と紫苑との二人の関係の変化に、心が波紋を惹き起こした。

それは未知に対する恐怖なのかかもしれない。決断するべき時の慄きなのかも知れない。

「私は陸が好きだ」

「……ツツ！」

直球が来た。

迂回もなにもない。間も置かずに、ただ真っ直ぐな紫苑の一言。今まで感じたことのないほど強烈で、鋭い熱をもつた衝撃が心臓を突き抜ける。

頭の中が痺れたようにまともに思考できなくなつて混乱する。

「陸はどうなのだ？」

震えた声で紫苑に尋ねられて、俺は……

「俺は……そ、その……」

言葉が出てこなかつた。

肯定の言葉も否定の言葉も俺には出てこない。

パーティーでのアレックス君の言葉が重圧になつてているのか。

それとも恋愛沙汰について、どうじよつもないほど俺は臆病なのが……。

いざれにせよ俺は何も言えないでいた。

「……………」陸は

長い沈黙の後、掠れた声で紫苑は恐る恐る言葉を紡いだ。

「陸は私のことが……嫌いか?」

その質問は俺の心を激しくえぐつた。

その質問をさせてしまったことに、情けなさを感じた。

「そんなわけないだろ!」

嫌いなわけがない!

紫苑は正直に言えば、少し変わっている女の子だ。

言葉づかいも、行動も、思考も、俺が会ったどの女の子よりも、

変わっている。

だけど、他の誰よりも魅力的で俺を捕らえて離さないのは、お前だけじゃないか!

(嫌いなわけないじゃないか……！)

胸中で強く念じる。

そう……念じればこの思いが少しでも紫苑に届けばいいと願いながら!

「なら……私のことは好きか?」

「それは……」

だけど、俺はこの質問には答えられなかつた。

いや答えたけど、好きだと言いたいけど、言つてることができなかつた。

理由は 僕が臆病なのと無力だからだ。

結局、俺は……

「好きだけど……」

そんな曖昧なことを言つてしまつ。

いや、曖昧なんてものじゃない。……最低の考え方だ。

本気で告白してきた人に、適当な答えを返すのは非難されて当然の行為だ。

「……………」

「え……？」

「だけどじや、駄目なんだ……」

「紫苑……」

俯いて、眦を震わす紫苑に俺は……名前を呼ぶことくらいこしかで
きない。

混乱してきた頭。何か言わなければいけないといつ強迫観念にも
似た思い。

焦つて、真っ白になっていた。

「あ、その幼馴染みじやないか、だから……」

何とか出てきた言葉は

「もう、幼馴染みでは嫌なんだ！」

悲痛な紫苑の叫びに俺は何が言えるのだろう？

本気で想いを口にする女性の前で、曖昧な事しか返す事ができな
い俺に何ができるだろう？

「幼馴染じや駄目なのだ！ 私は幼馴染でいることに我慢できない。
幼馴染も友達も親友もそんなポジションはもう嫌なんだ！」

「な、なんで……？」

いつもとは違う紫苑の激しさに田を奪われる。

愚にもつかない答えに、紫苑のきつい眼差しが突き刺さる。

「おぬしは酷い」

「酷い？ 僕が？」

その言葉の意味を理解するまでに数瞬が必要だった。

「私に幼馴染でいると陸は言つ。なら私は、陸に恋人が出来たとき
に『幼馴染』としてそのことを祝わなければいけない！ 私は陸が

好きなのにー。《幼馴染》として「おめでとう」と祝福しなければいけない！ 非難することはできない！ 泣くことは許されない！ 私にそんな嘘の笑顔で笑えと、そう言つのかツツー！」

紫苑は、きつい眼差しだけれども、涙の零れる瞳で言つた。

「……」

何も言えない俺を、紫苑は酷く苦しそうな表情で見つめる。

「私にはもう《百》か《無》しかないんだつー！」

翻り、紫苑の背中

部屋から走り去る背中に伸ばした俺の右手は、しかし紫苑を掴むことができなかつた。

伸ばした右手は、虚しくベッドの上に落ちた。

やるせなさが胸の中に暗雲のように広がる。ひどく鬱陶しい、焦燥に似た思いだと思つ。罪悪感と言つのは……まるで鉄板で炙られるように心を苛むように訴えてくる。

(どうして俺は…………好きだと言つてやれないんだ)

やるせない表情で俺は右拳を握り締める。

そして重く長い静寂が部屋を支配する…………が、

「…………何で「クんないわけ？」

「うわっ！？」

呆れた海の声がベッドの下から聞こえて、俺は体を飛び上がらせる。

「な、な、何でお前…………？」

「あのやー…………我が兄貴ながらマジで呆れるんだけど…………何であそこまで紫苑ちゃんに迫られて、押し倒して一ヤン一ヤンしちゃわないわけ？」

俺の疑問はすっかり無視して、ベッドに顎をのせた状態で海は非難の眼差しを送つてくる。

「よつと」

海は小さな掛け声を一つ上げてベッドの下から這い出ると、布団の上に仰向けになる。

チラリと海が視線を向けてくる。

そのままつきを直視できない俺は顔を伏せる。

「今回の紫苑ちゃん……本気だつたじゃん」

「……ああ

「陸さー、ちよつと悩みすぎ」

やれやれといつのを表現したようなため息を海は吐き出す。

「しゃーないな……あらよつと

腹筋と脚の動きを利用して、ベッドの上に器用に立ち上がる海。そして

「俺たち男の子ー！ チヤラチヤツチヤ イエイエイエイー！
私たち女の子ー！ チヤラチヤツチヤ イエイエイエイー！」

(セリフ)『あなたの瞳を見た瞬間、ビビビときたの、感じたの』

チヤラチヤツチヤ イエイエイエイー！

(セリフ)『俺もだぜ。ビビビだぜ』

チヤラチヤツチヤ イエイエイエイー！

告白したいー、君にー

つ・ま・り 君に興味い津々 だけど言えずに、悶々 「

「な、ななな、何言つてるんだ、お前？」

突然奇妙な歌 しかもなぜか異常につまいまい を歌い

だした海に訝しげな視線を向ける。

「だからさあー……つまり女子に興味を持つのは正常な男子高校生なら当然じやん。別にそれは悪いことじやないと思つよ」

「ウインクを俺に送つて、のんきに笑いかける海。

海の意見を聞いていた俺は言いようのないむかつきに襲われた。したり顔で俺のことを知らないくせに、そう言ひ海に腹が立つた。ただのやつあたりだと理解していたが、俺は言葉を止めることができなかつた。

「何だよ……海に俺の何がわかるんだよ！」

胸から出た激情は口から出るところから止めようがなかつた。

「お前はいいよ！ 不器用で要領の悪い俺と違つて、何でも器用にこなして要領のいいお前と一緒にしないでくれ！」

俺の怒りの声はどう言つ訳か、悲鳴のように聞こえた。

ずっと胸のうちにわだかまつていた弟への嫉妬は、叩きつけた想いは

「だつたら、兄さんも俺の気持ちがわかるのかよ！」

それ以上の咆哮となつて俺に返つてきた。

戸惑い、目を瞬かせる。

「な、何？」

「小さい頃から好きな相手がずっと兄さんの方しか見ていない俺の気持ちがわかるのか！？ 同じ顔をしているのに、なんで俺の方を見てくれないんだ！？ 好きな相手に恋愛の相談された、俺の気持ちが兄さんにわかるのかよッッ！」

「な……」

震える。

どうしようもないほど震える。

紫苑に告白されたときよりも頭は真っ白で、思考停止しちゃうになる。

「何一つだつて俺は兄さんに勝てない！ 勉強だつて恋愛だつて！ 陸は真面目でいい子だつて言われている、優等生だつてさー。どうせ俺は兄さんに比べたら不真面目で劣等生さー。俺はいつも出来そこないみたいな目で見られていた！」

そこにはいつもおどけていた弟の姿はない。

「でも、紫苑ちゃんだけは……紫苑ちゃんだけは俺をちゃんと陸の

付属品じゃない、一人の俺として見てくれたんだ！」「けれど、思考停止は許されない。

目の前にいるもう一人の『俺』の苛烈な視線がそれを許さない。知らない。

こんな海は……俺は知らない。

「俺だつて紫苑ちゃんの幼馴染なんだ。兄さん……兄さんが紫苑ちゃんのことをいらないって言うなら……俺が貰う…」

その宣戦布告は、ずしん、と。

苦痛すら伴つた衝撃となつて胸に響いた。

初めて知つた事実にも関わらず、どこか知つていたような、無意識に気がつかない振りをしていただけだつたのだと気がつかれる。（ああ、やっぱりお前も……そつだつたのか）

俺たち兄弟は、紫苑を合わせて三人で遊んでいた。

けれど、いつの頃か海は仲間に加わらないようになり、ずっと不思議に思つていた。

そして、どこかでほつとしていた。

紫苑と二人でいられることに……

「呆れるくらい真つ直ぐに兄さんしか見ていないよ。俺の恋は自覚したときに、とっくの昔に終わつっていたから」

きつと海はそうと気がついてしまつたから……だから俺たちに近寄らなかつたのだ。

「玉碎覚悟で告白したいとも思つた。でもそうしたら紫苑ちゃんは優しいからきつと遠慮するよつになる。それで彼女の恋を、瞳を曇らすのは嫌だつた」

海の右手が伸びて俺の胸倉を掴んで引き寄せる。

額同士がぶちかりそうな近距離。睨みつけるよつに海が叫んだ。

「道化になるさ、彼女のためなら！ 喜んで道化てやる。チャラい男を演じて、なんでもない振りを裝つて、好きなあの子の恋愛の助言だつてクールこなしてみせる！ 俺は彼女の笑つてゐる顔以外見たくはない！ それが天堂海の生き様だ！」

数年の時を重ね、海は誰よりも強力なライバルとなつて俺の前に立ち塞がつてくれた。

なぜか？

真剣な眼差しで、海の覚悟と決意を聞かされて、心が熱くなつた。情けない自分が許せないと怒りすら抱いた。

「だけど俺じや駄目なんだよ！ 紫苑ちゃんを笑わせれるのは兄さんだけなんだ！ この世界で兄さん一人だけなんだ！」

拳を強く握り締める。

「だから走ってくれよ！ 追いかけて掴まえて、紫苑ちゃんを幸せにしてやってくれよ！」

「ありがとう、海……」

一言、最高の弟へとすれ違ひ様に礼を言ひつ。後は部屋を飛び出し、夏の夜の大気へと飛び出した。

海が俺のライバルとして、立ち塞がつてきた理由。それは俺を奮い立たせるためだ！

ババババババババババババババババ
ツツ！

鼓膜を叩く音はどこか機関銃を思わせた。

その正体は、上空で唸りを上げるヘリコプターのプロペラが産みだす爆音。

夏の夜空に浮かぶ鋼鉄の船は、
冷酷な現実を突きつけるように大
気を切り裂いて咆声を上げる。

引き裂かれた大気は、乱氣流を生み出し、暴風と化して地面に鋭い勢いで叩きつけられる。

はともに立ていらぬないほどの烈風と爆音が、身体を強打に打ちつけた。

それでも、拘束されていなければ立つていられたはずだ。

「紫オオオ苑——ツツツツ！」

喉も枯れよ、と。

ヘリの爆音に負けじとばかりに紫苑の名前を叫ぶ。
だが、紫苑は振り向かない。

いつものように、俺が思わず仰け反つてしまつくりの明るい笑顔を見させてくれない……！

「くそッ！ 離してください、お願ひだ！ 離して！」

どんなに身をよじつても、両脇に立つ二人の黒服が掴む腕を緩めてくれない。

紫苑の家の護衛の黒服は、誰もが屈強な身体つきと体格で、とてもではないが振りほどけそうにならない。

一人の黒服から両腕と肩を掴まれた俺にできることは、身をよじらせて「やめてくれ」「離してくれ」と懇願することしかできないのか！

そして、そんな俺の懇願は決して聞き入れられることはない。

「くそッ！ 離してくれッ！ 離せ！」

だが、抗う俺をよそに、紫苑は地面に着陸したヘリに向かう足を止めない。止めようとしない。

いくらヘリが爆音を立てていると言つても、俺の叫びが聞こえないわけがない。

聞こえていくはずなのに……聞こえてくるのに、紫苑は振り返らない。

回転するヘリのプロペラが叩きつける突風は、きっと田もまともに開けていられないほど激しいはずなのに……その風の勢いは、翻るスカートや紫苑の髪の乱れ具合から、簡単に察することができる。それなのに、全くひるむことなくヘリに歩み寄る紫苑の背中からは、嫌が応にも断固たる決意を感じてしまう。

ただ 紫苑の背中が俺のことを拒絶していた。

声が届かない。

届いても、離れてしまつた心の距離が遠すぎて、紫苑には聞こえない。

「くそッ！」

どんなに叫んでも、紫苑には届かない。

きつとじこかで、まだ何とかなると……そつ

思つていた。

きつとじこかで、謝れば何とかなると……そつ樂觀していた。

きつとじこかで、会えば許してくれると……そつ胡坐をかい
ていた。

紫苑があまりにも臆面なく堂々と、向日葵のよつな笑顔で、いつ

も『好き』だと言つてくれるから……

いつの間にか、俺はそれに甘えて、高をくへつて……好きでいて

くれるからと、紫苑を蔑ろに、天狗になつていて……ツツ。

掌から零れ落ちて……喪失の寸前でようやく気がついた。

自らの愚かさ、を……。

第三十章 ライトニングボルト（前書き）

最近、所属店舗のリニューアルなどで、睡眠時間三時間前後、即出勤、長時間労働、サー残と続いていてなかなか更新できず、すみません。

中盤から年末にかけてペースをあげて、年内完結予定です。

第三十章 ライトニングボルト

『天

『陸』

海の激励を受け、俺は夜の街中を走った。

紫苑の影を追い求め、駆け回った。

時間はすでに深夜。その遅い時刻と暗い街並みは、絶望感を胸に投げかけてくる。

不安は間隙なく胸を襲うが、全身は疲労に見舞われても、紫苑を求めて止まない。

紫苑を見つけると強く主張する。

けれど、一向に紫苑を見つけることはできなかつた。

そんな時 黒塗りの高級外車が正面からやつてきて、大通りの向かい側でゆっくりと滑るようにして停車した。

運転席から執事姿の老紳士 ハドワードさんが降りて、後部座席の扉を開ける。

車の外装の色とは正反対の白いスース。闇の中でも燐然と輝く金色の髪。

黄金を纏つた青年

「……やあ、リク。いい夜だね」
アレックス君だった。

人通りも失せ、大通りにも関わらずに他の車の影すら消えて寝静
まった道路を、臆することなくアレックス君は歩いてくる。

自信に満ち溢れ、非常識を塗り替えるその行動力。

それは紫苑にも通じる 我が道を行く強い信念。

俺に欠けていて、絶対にないもの……

王者ながらの行進で、堂々と道路を横切りアレックス君が目の
前に立つ。

「……情けない顔だね、リク」

「ツツ！」

傲然と笑うアレックス君を目の前にして、唇を噛み締める。

「キミに愛想をつかして逃げ出したプリンセスは見つけられたのか
な？」

「くつ……！」

「キミは愚かだよ。一時とはいえ、先のナイトパーティーではこの
アレックスを差し置いて、自らの胸の中に抱き締めたといつに…
何をやっているのか、理解に苦しむね」

歐米人らしい大げさなリアクションでやれやれといづジンスチャ
ー。

そんな態度を取られて、悔しくても……情けなくとも……何も言
い返すことができない。

なぜなら、アレックス君の言っていることは的を得ているから。
正しくて……痛いくらいに正しくて反論できないから。

拳を握り締めて、身体を震わせる。

本当に俺は今まで何をやっていたのだ？！

紫苑の求めを毎日拒絶しておきながら……あんなに好きと言つて
くれた女の子を拒絶しておきながら、俺は一体何をしているのだろう。

ただ紫苑を傷つけてしまった。

なのに、傷心の紫苑を独りにさせたまま、見つけることもできな
い。

自責。

紫苑を泣かせてしまつたことによる罪悪感。
さつきの告白に最低な返事をすることができなかつた後悔。
どうして喪失つてしまつてから、かけがえのないものだつたと気が
がつくんだろう。

目の前の景色が、アレックス君の顔が歪む。
(情け……ない……ツ、俺は、なんて……ツー)
胸を穿つ喪失感が、罪悪感と後悔を引き寄せる。
その直撃に耐え切れずに、涙腺が決壊した。
「つぐ、……うつ、くツ、くくくツツ」

軋んだ声が、食い縛つた歯の隙間から漏れる。
涙はとめどなく……頬を濡らした。

《アレックス・バグ

ネット》

今宵、人生最大のライトニングが、ボクの胸を直撃した。
我がバグネット家が誇る情報網は、シオンが目の前でみつともな

く泣きべそをかいている愚民ボーイの家を飛び出したことを、当然ながらキャッチしている。

勿論、リアルタイムでシオノの現在地がどこかも知っている。この街の高台にある噴水公園だ。

シオノと愚民。

二人の仲が実ることなどありえない。

そして当然の結果の如く、今夜をもつて二人の仲はThe endだ。

アヤサキ家には連絡し、もうまもなく迎えのヘリが公園へと着陸するだろう。

そして、逃げ出した小鳥はボクというカゴの中に戻つてくる。めでたしめでたし。ブラボーハラショーガンホー万歳ボク。

そして、めくるめくる桃色の日々の到来…………のはずだ。

なのに、ボクの胸はライトーングボルトに撃ち抜かれている。十代も後半にもなつて泣き出す少年を見て。

なんて情けない。

もう数年もすれば成人するというのに、大の男が、大粒の涙をぽろぼろと零しながら、必死で泣き声を堪えている様子は、とても見てられない。

このジャパンという国はおかしい。

とりわけこの国の、田の前の少年は……

いつになつても変らない綺麗なベビーフェイス。

とつぐに変声期を迎えているはずなのに、女性よりは低いくせに、でも男にしては高い声。

男とは思えない華奢な骨格に欧米人のボクから見れば子供のよくな低身長。

田の前の少年はクレイジーだ。

大きな瞳からは透明な雲が後から後から零れ落ちて、なんだか気

になる。

マスクで整えたわけでもないのに、黒くて長い睫。
「いいはほんとに誇り高い男なのか！？」

整った鼻筋と薄い唇のバランスは絶妙すぎて、不思議な引力に満ちている。

柔らかい髪質の、男に似合う長めの髪型も非常に女性しきりぬくしない。

男のくせは綺麗な髪型なのが悪いのだ

~~~~シシシ、シシト---

「泣くんじゃない！」

胸に湧きあがつた戸惑いを隠すよう口元で鋭く叫ぶ。  
そうでもしなければ、田の前の小さく華奢な存在に飲み込まれてしまいそうだから。

「ぐ、ごめん、ぐ、ごめん、アレッ、クス、君？」  
けれど、胸の次には、脳天にライトニングが落ちてきたんだ。  
リクがボクを上目づかいに見つめている。

西脣をハの字に垂れて  
大きな瞳に涙を溢れさせ  
西頬は透明な  
川で彩られている。

嗚咽の漏れる声も、何もかもがみつともない……はずだ。

爽快な、してやつたりの気分の……はずなのに。

「どうして、マイハートせりんなんにも苦しいのか。

空手一勝を力説する。三木に抱き入れば、腰痛の弊病が解消する。

いた。  
気がつけば制御を離れた右手が……リクの両目の縁の涙を払つて

「アレックス君……？」

「スネークに見つめられたフロッグの気分がわかつた気がする。」

涙で濡れた両手で、リクが不思議そうにボクを見上げてくれる。み、み、みみみ、見てんじやねええよ、ドントルックミー！

見るんじやないよ、そんな目で！

一体ボクをどうするつもりだ！

どこに連れて行つちゃうつもりだ！

知らない感情についていつちや駄目なんだぞ！？

扉が、開いちゃうだらうが！！

あてもなく想い人を探す少年に、皮肉を言つ余裕など、もつぢくにもない。

ボクはリクの視線から逃れるように顔を背ける。

それと同時に言つべき皮肉を必死で手繩り寄せる。ボクはこの場に、リクを慰めに来たんではない！

圧倒的な格の違いを教えにきたのだ！

そうこやつを泣かしにきたのだ！……もつ泣いてるけどや。

「……しょ、庶民の自分と財閥のお嬢様。身分のギャップがよつやくわかつたかい？」

「！？」

リクが驚きに身を強張らせる氣配を感じる。

「なん、で……？」

リクの疑問の咳きを最後まで言わせずに、軽快な笑い声で遮る。

「ボクが高貴で美しく天才だからさー。」

よ、よおおし、いい感じだ。

いつものボクらしさを取り戻すんだ。

「それくらいわかるわ」

キランと白い歯を輝かせて、ボクはリクへと笑いかける。

正面からリクの顔を見据え

意識が……容易く、飛んだ。

そりやもうマッハで。

なのに口だけが、言葉だけが乖離したようにな動く。

「……キミのような学のない愚民でもシンデレラのストーリーへらいは知つてゐるだろ?」

あれ……ボクは何を言おうとしているのだろう?

「有名なシンデレラで出てくるプリンスは、シンデレラの身分を気にしたかい?」

「……」

侮蔑を言つんだ。

冷酷な現実を、田の前の甘ちゃん呂きつけやれ!

クールにそれでいてスタイルッシュに!

「惚れた先に身分など関係あるのかい? 身分より先に、プリンスは一人の女性を好きになった。ただそれだけのことじゃないのかい?」

何を言つているんだ、ボクは……?

「シンデレラが涙と言うガラスの靴を落として逃げたのに……リク・テンドウ! キミは身分にこだわって、プリンセス・シオンを追いかけないのかい! ?」

呑きつけるような熱い、必死な口調。

「ためらつて、苦惱して歩いていく。見失つてしまふ」と、色あせてしまうこともあると思う。でも最後はハッピーエンドでいたい……それがジャップの思想なのだろう? イスム

ボクは馬鹿だ……一体、どうして。

なにを好んでアドバイスなど、意味がわからない。

「うん……」

ボクの身体は、ボクのハートを裏切つて、高台を指し示す。

「高台の噴水公園だ。そこにシオンはいる」

「どうして……?」

信じられないほどばかりに見開かれるリクの瞳。

だが一番ビリーブじやないのはこのボクだつてのツツ！－

「ふ、フン！ 勘違いしてもらつては困るな－ もちろん、ボクもその場に行くや。そして、シオンを連れて帰る！ なにせボクは彼女のファインセなのだからね！」

なにこのジャパニーズツンテレッぷりは！ 自分自身に茫然自失だ。

必死でボクは傲慢な仮面を取り繕つ。

自信に満ち溢れている時は、いくらでも溢れてきた単語を、今は必死に書き寄せ組み立てて、いつものボクを装つ。

「キミの田の前でシオンを連れ帰る！ ただ、まあ、最後にお別れくらいは言わせてあげようかなと思つてね！」

「そんな……黙つて連れ帰れば、俺は紫苑がどこにいるかもわからなかつたのに……」

「…………」痛いところをつくなく「…………」このひよはツ！

そんなのボクが一番わかつてゐつゝーの！

シムラ、後ろ後ろつてくらい自分自身に教えてやりたいつての！ 「ええい、シャラップ！ 男が細かいことをグダグダと！ キミは必ずキャラベツを微塵切りにするタイプだね！ まあ、しいていうならば、慈悲だよ。ボクは慈悲深いのさー！」

「慈悲つて……どうして……嫌つて……嫌つて……嫌つて……？」

すぐにシオンの許に走り出そうとしたリクはしかし、ボクにそう尋ねる。

全くもつてその通りだ。

恋敵に、わざわざ応援するよつた真似。正気の沙汰とは思えない。

「…………」

けれど、「どうして？」と聞かれてもボクの方がどうじたなのか、それを知りたいんだ。

当初の予定では、シオンを探し回つてゐるリクを散々馬鹿にして、シオンの居場所を教えずに、このアレックスが寂しげに佇んでいる

シオンの許に馳せ参じようと思つていたのに、一体どうしてこのようなつたんだろう？

「……フン。かの有名な戦国武将ケンシン・ウエスギは、ライヴァルであつたシングエン・タケダに塙を送つたといづ。まあ……そのようなものだよ」

苦しい言いわけ。

そんなことは誰よりもボクがわかっている。

「け、けど……」

「早く行つた方がいいんじゃないかい？」

「あ、ああ……」

強い口調で言うボクに気圧されて、高台に続く道に立ち塞がるよう立つていてボクをリクは追い越して……と、追い越す刹那、リクは夏に吹く涼風のように、すれ違ひ様小さく叫びた。

「ありがとう」

そして殴つてごめん、と。

その瞬間、なぜかボクはハートが締め付けられるような甘い痛みに襲われた。

けれども、その呼吸困難は不快ではなかつた……

「よろしいので？」

待たせていた車に乗り込むと、エドワードが静かに尋ねてきた。

「……ハンデだよ。これくらいのハンデがなければ、庶民と上流階級に生きるボクとの差が埋まらないからね」

明晰な頭脳の持ち主であるボクが生み出したにしては、こわかに  
は信じられない幼稚な虚言をエドワードは一体どう受け取つただろ  
うか？

「さよりですか」

エドワードは短く言葉を発すると、躊躇いの気配を匂わせた後、  
静かに続けた。

「老婆心ながら……坊ちゃんが悔いの残らない」選択をすればよろ  
しいとります」

「…………ああ。ありがとう、エドワード」

加速して流れる車窓の夜景を瞳に映して、ボクはエドワードの言  
葉とリクの顔を、熱に侵されたように向度も反射させた。

《天堂陸》

分厚い壁のように夏夜の大気が身体にからみつく。その中を無我夢中に走る。

獣みたいに荒い自分の息遣いとアスファルトを叩く足音が残響のよに響く真夜中。

「はあッ、はあッ、はあッ……！」

脈打つ鼓動は激しく、汗で額に貼りついた前髪がうつとおしい。背中もジーンズも、噴き出た汗で気持ち悪い。

それでも疲労した身体に鞭打つて、噴水公園に続く長い石造りの階段を一段、二段飛ばしで駆け上っていく。

いや、むしろ疲労など気にならない。

心臓を握り潰してくる焦燥感に比べれば、疲労などなんだというのだろう……ッ！

砂漠を歩く旅人がオアシスを求めるのと同じくらい強い想いで、紫苑を想う。

噛み締めた歯と歯の間から、紫苑を求める声が漏れる。

だから

噴水に到着した俺は切羽詰まつた表情で紫苑の姿を探す。噴水には街灯も人気もなかつた。

噴水のせせらぎだけが周りの音を支配している。

「くそッ……」

不気味すぎる静寂を前に、恐怖にも似た焦燥の舌打ち。

それは迫り来る夜の暗さなのか、人気の消えた公園の様子なのか、夏の陽炎を摑むことができないよう、紫苑の姿を見つけることが叶わない。

「紫苑……どこに……っ」

抑圧しきれない不安が、言葉と表情を伴つて溢れ出す。

見つけられないもどかしさ。

見つけることのできない恐怖。

見つけられるのだろうかと思う不安。

「紫苑……ッ」

呼びかけは懇願を超えて、どうしようもないくらいに震えている。本当に逢いたいと思う人に逢えないとき、人はこんなにも切なく胸が痛い。

心の悲鳴が止まらない。

（まさか　もう……帰ってしまったのか……？）

不安の重圧に耐え切れず、聞こえない振りをしていた心の囁きが耳に木靈する。

神様にはとつぐの昔に祈つていて、悪魔にだつて交わしてはいけない契約でも結んでもかまわないくらい自暴自棄が胸の裡で暴れている。

認めたくない事実。

けれどそういう冷徹な現実こそが、認めなくてはいけないものなのだろうか……。

亡霊のような足取りで公園を歩く。

全身を包み込む絶望を辛うじて拒否するかのよつに……俺は頭を巡らせ

忙しく動いていた俺の首が止まる。

前を見上げる。

「紫苑……」

紫苑は、小高い丘に作られた噴水の前に静かに佇んでいた。そこに姿が見えるのに、今にも溶けてしまいそうな希薄な存在感。昼なら水飛沫を上げ、虹のアーチを描いたであろう噴水の水は止められていてモノを言わないオブジェと化している。人の失せた公園は、どこか触れざる領域のよう。切り取られた夏夜空間。

小高い噴水公園、

紫苑は静かな夜を背負い、

黒い空を見上げ、

月の淡い輝きの中、

独り佇んでいた。

悪い予感が身体を大きく震わし、戦慄が奏でる調べが幻聴のよつに聞こえる。

駆け寄りたくて、風が吹いて、綺麗すぎて、近寄れなくて、俺は動きを止めて、鼓動が熱く、叫びたいように、ただ見つめ続けたいように動けなかつた。

「紫苑……っ」

喘ぐよしみ。

吐き出すよしみ、口から漏れた紫苑の名。その声のなんと小さいことか。

紫苑がゆっくり振り返る。

全ての表情を無くした紫苑は恐ろしく整った精巧な人形を思わせた。

見慣れた顔のはずなのに どこか遠い。

それは消え失せた感情のせいだろうか。

「紫苑ツツツ！」

それでも、まだこのときの俺は……

安堵の余り、喝采と共に彼女の名前を叫んだ。

だから 俺はそのときの、紫苑の表情の意味を知らなかつた。

「お別れだ、陸

だから……静かに宣告された別離に、凍りついた。



## 第三十一章 彼女の宣告（後書き）

物語は終盤を迎えました。

どうぞ最後までお付き合い頂ければ幸いです。

《天堂陸》

会つて言つべきことがあった。

言いたいことがあった。

なのに、紫苑の一言でその決意は凍りついた。  
喉のつ、そこまで、出ているのに……ツ！

紫苑の見つめる静謐な双眸が、俺の発言を許さない。  
視線に物理的な力があるかのように、言葉が奪われる。  
それでも。

両足の裏に力を込め、前を見据え、俺は紫苑に向き直る。  
ここで引くわけにはいかない。

海が、アレックス君が、何よりも俺がツ！  
紫苑を求めているから！

「紫苑、俺はツ　　！」

ババババババババババババババババババ

ツツ！

告げようとした想いは、ヘリの爆音に遮られた。

「なつ！？」

高台の下から、紫苑の背後へと一気に急上昇してきたヘリが夜を背負い、その姿を露にする。

強烈なライトが降り注ぎ、まともに網膜を白く焼かれた俺は咄嗟に右手でライトの光を遮ろうとする。

『ふ、フン！ 勘違いしてもらつては困るな！ もちろん、ボクもその場に行くさ。そして、シオンを連れて帰る！ なにせボクは彼女のファインセなのだからね！』

『キミの田の前でシオンを連れ帰る！ ただ、まあ、最後にお別れくらいには言わせてあげようかなと思つてね！』

アレックス君の言葉が胸の中で木霊する。

このままじや紫苑は連れ去られてしまう。

「紫苑！ 聞いてくれ、俺は……！」

紫苑の許に駆け寄りつとした。いや、彼女を抱き締めようとした。そんな時だつた。

がつちりと両脇を掴まれたのは。

「な！？」

いつの間に背後から忍び寄つていたのか。

それとも、目の前の紫苑の存在に気を取られていたせいなのか、全く接近に気がつかずに、いとも容易く一人の男に拘束されてしまふ。

黒服と襟の所に鈍く光るバッジ。

幼い頃にも見たことがある。綾崎の護衛の人だ。

「申し訳ありません。天堂様、お引取りを……」

護衛の人の低い声が耳朵を打つ。

瞬間、全てを悟った俺は顔が青ざめた。

まさかと思いつつも、見ない振りをしていた現実は、もう逃げられないというまで追いかけて来ていく……嘲笑していたことに。

「いやだ……嫌だッ！」

身体をよじる。

けれども、屈強な護衛一人の拘束は緩むことはない。

たじろぎもしない一人の両手の強さは、抵抗を冷たく跳ね返され

それがいつそうの恐怖を煽る。

目の前で紫苑は俺の前からいなくなろうとしていた。

紫苑は俺から遠ざかつて行く。

（一）ツイッヒニギザガザメのジメル

焦燥が焼けるように脳を責め、打開策をひねり出せと叫ぶ。呼びかけた声は届かず、身体は拘束されて、自らの傲慢に打ちの

めされた。

状況は限りないくらい最悪。

まともに抵抗しても体力と時間を無駄に浪費するだけ。隙をつかないといけない。

地面に倒れこむふりをする。

前へ行こうと力を振り絞り、足がもつれて地面に無様に叩きつけられる……寸前で上着をセミの脱皮のように身代わりに脱ぎ捨てて、低い姿勢で疾駆する。

(掴まえる!)

隙をつき、自由になつたほんの僅かな時間の間に捕まえる。  
なんとしてでも紫苑を捕まえる。

だが、紫苑に触れる寸前で、後ろから追いすがつてきた黒服一人に体当たりをくらい、もつれるように硬い大地へと無情にも叩きつけられる。

「ぐッ！？」

それでも這つてでも逃げようとしたところを、腕を捻られ手首を取られる。

その上、とどめとばかりに持ち上げた頭を後手に鷲掴みにされ、地べたを舐めるとばかりに、地面に叩きつけられる。

「あぐッ！」

ふりほどこうともがく。

だが体格が優に一回りは大きい。こつもがつちりと関節をきめられてしまっては、合気も使い用がない。

絶望を加速させるように黒服たちが、俺の前に幾人も立ち塞がる。紫苑と俺との間に人垣のように壁をつくられる。

その数、十人近い。

強烈なスポットライトと、黒服の人垣の狭間から、たなびく紫苑の服の袖が見える。

「ま、待つてくれ、紫苑ツツ！！」

瞬間、人垣が割れる。

目を見開いた先には、傲然と立つアレックス君がいた。

アレックス君が紫苑の身元で何事か囁く。

それに紫苑が小さく頷き

ただの一度も振り返ることなく、

へりに吸い込まれていく。

「待つ……！」

何か言い終わるよりも早く、素早く黒服によつてヘリの扉が重い響きとともに閉められる。

がむしゃらだった。

獣めいた声を上げて暴れる。

肘を、拳を振り上げ、取り囲む黒服に容赦なく振るう。暴力の躊躇など消えていた。

いなくなる。

失う。失う？

「あああああああああああああああツー!? どけ！ どけって言つてるだろツ！ どけえええツー!!」

鼓動に突き刺さる焦燥に衝き動かされて暴れ狂う。

それでも黒服たちは、微動だにしなかつた。嘲笑も上げなければ、声も荒らげない。

ただ静かに。

ヘリが浮き上がり、見えなくなるまで俺を拘束し続けた……

夜の公園とは虚しいものだ。  
とりわけ人のいない公園は。  
その場には大の字で打ち捨てられた俺しかいない。  
いや……

ただ一人、白いスース姿の彼だけはいた。

仰向けの身体を捻り、起き上がるうとした先で、蒼い視線と絡み合つ。

「ぐツ、～～ツツ！」

だが何を言えばいい。

何を吠え立てればいい。

もう紫苑はいない。

ここにはいない。

俺の隣にはいないんだツ！

どこに行つたかすら……わからない。

振り上げた拳は力なく地面に落ちた。

また爆音が聞こえる。

俺の好きな子を連れ去つた忌々しい音。

きつと田の前で俺を見下ろしているアレックス君を運ぶために来たんだろう。

もう何もする気が起きた。

突風が叩きつけられ、服と髪が無茶苦茶にをかき回される。

叩きつけられる烈風に顔すら庇うのを忘れて、虚ろな視線を向ける。

ガラリと、ヘリの扉が開く。

悠然と背を向け、アレックス君がヘリに近付き、扉に手をかける。

「追つて来い、リク・テンドウー！」

瞬間、ヘリのプロペラ音を圧倒する轟音が聞こえてきた。

「な……？」

沈んでいた意識が浮かび上がる。

「彼女が大切な、彼女が心配なら、彼女が欲しいならー！」

背を向けたままアレックス君が叫ぶ。

その表情は見えない。

「ボクを追つて、アメリカの屋敷に来るがいいッ！」

呴きつけられた言葉は、どんな声よりも強く響いた。

「振られ、捨てられ、碎かれても。それでもシオンが愛しいなら！」

それでもなお諦めないなら！

Boyではなく、manとなつて追つてこい、リクツッ！」

全てを貫くような言葉の弾丸で、完膚なきまでに俺は撃ち殺された。

どれだけ経つたのか。

公園には今度こそ自分独りで、他には誰もいない。

批評總論

膝について、咆哮を上げる。

いや、それは咆哮なのか。  
慟哭の叫びなのだろうか。

もう掌には何もない。腕の中には誰もいない。胸の中には何も残

ほんの数時間前まで、俺の腕の中には紫苑がいたといつのこと……

握り締めた両拳を、石置の地面へと叩きつける。

何度も何度も何度もツ。

「……セツ」

「彼は言った。

「追うセツ！」

追つてこいと。

灼熱が衝き上げてくる。

まだだ。

まだ終わりじゃない。

終わりと思った瞬間、負けたと思つたときが、駄目だと諦めたときがツ！

始まりなんだ！

何度も押し折られる。

常識に、恋に、人生に、現実に、受験に、毎日には、押し折られて、打ちのめされて！

そこから立ち上るのが、始まりなんだ！

終わりにするか。終わりにしてたまるかツ！

アメリカ？

ハツ！ 上等じゃないか。どこにでも行つてやるさ。顔を上げれば、そこには月。

今度は俺の番だ。

紫苑は俺に会いに、アメリカから日本に帰つてくれた。なら次は俺が追いかける番だ。

もし、仮に紫苑が月に行くと言つならば、俺は

「月にだって言つてみせるツ！」



『バグネット』

『アレックス・

「……いいのかい？」

「これでいいはずなのに、なぜかボクはシオンにそう問わずにはいられなかつた。

柔らかいソファに身を沈めながら、対面に座るシオンへと問い合わせた言葉は返つてこなかつた。

まあ期待はしていなかつたけどね。

窓から夜の街を見下ろすシオンの顔は、息を呑むほどに美しい。だけども眉をひそめるほどに痛々しかつた。

本当に田の前に佇む少女は、シオン・アヤサキなのだろうか。人形のように表情の消えた少女は美しかつたが、同時にあまりに

も憐い。

ボクは返事を聞くのを諦めて肩を竦める。

だからさつと聞こえない。

「全く……何をしているんだろうね、ボクらは。そろいもそろつて気持ちと裏腹のアクションばかりする。ボクらには金も物も欲しいものはなんだつてある。何だつてできる。何だつて成功してきて、手に入ってきた。退屈なくらいに」

「…………」

シオンは答えない。  
ボクは気にしない。

「なのにどうしてかな。ボクらはそろつて“恋”がヘタだ」  
シオンの肩が震えている。

でもボクは気にしない。

「こんなヘタな恋、きっと子供でもしない。ボクたちは子供以下だね」

パン、と。

乾いた音がボクの左頬で弾けた。  
まるでそれは銃声みたいだつた。

目の前では、ボロボロと両頬を透明な涙で濡らして、唇を噛み締めるシオンがいた。

シオンは美しい。

でも痛々しくて見ていられないとも思つた。  
だつてシオンはさつきまで涙を流さずに泣いていたから。  
だから、とても見ていられない。

「うるさい！ 私は頑張つた！ 陸に好いてもらおうと……私は、  
つ！ 努力したッ、したんだ！ でも駄目だつた！ 駄目だつたん  
だ！ 陸は私を女として見てくれない！ どうしたつて、どうあつ  
ても思い知らされたんだ！」

私は

私はただの幼馴染だつたんだッ！

両胸をシオンの固めた両拳が叩きつけられて息が詰まつたのは痛みのせいか。

込み上げてくる切なさのせいか。

明晰な頭脳を持つボクでもわからない。

「だいたいお前は構わないだろうが！？ なぜそんな問いを放つのだ！ お前は私を連れ帰れるのだから満足だろ？！？」

「……当たり前さ。もちろんども」

きつと以前のボクなら、コサックダンスを踊つていた。

きつと以前のボクなら、モンキー・ベイビーでケチャ踊りを炸裂させていた。

きつと以前のボクなら、胸に飛び込んできたシオンをこれでもかといつくらに抱き締めていた。キスだつてしちゃうね！

なのにボクの両腕は、拒否したように動かない。

まるでメデューサの瞳を見たかのようだ硬く石化してしまつている。

きつと以前のボクなら…………ボクがボクでなくなつたのはいつなんだろうか。

答えなんてわかつている。  
とうの前から。

リクに会つてからだ。

空港につくまで、ボクらには何も起こらなかつた。  
年頃の男と女がいるのに、何も起きなかつた。  
抱き締めることもなかつた。キスもなかつた。  
シオンの身体はやがて離れ、やっぱり虚ろな視線で窓の風景を見ていた。

いや、きつと見ていない。

彼女の瞳は何も見ていない。見えていない。  
ただ過去の残影だけを追つているに違いない。

夏の思い出を、ずっと。

これからも、ずっと追い続けるに違いない。

(ボクの欲しかったのは、この日の前の彼女なんだろうか?)  
そこははずだ。

そのためにジャパンに来た。

そして、今、勝利者としてアメリカの帰路へと着く。

用意されている自家用のジェット機に乗り込み、ヘリの椅子とは  
段違いの座り心地の椅子に座り、隣にはシオン。

この上ない勝利者としての凱旋じゃないか。

ワインを片手に乾杯していいはずだ。

なのにこの空っぽな玉座は何なのだろうか。この味気なさは?  
身体を包む倦怠感にも似た失望感は何に対しても抱いているのだ?

窓に映るボクの冴えない表情は何なのか。

そして何かを待ち望むこの気持ちは何だ。

ナウンスは給油のために、離陸までに一時間余りの時間がかかる  
ことをボクに告げた。

その一時間は あまりにも長くてボクがハッピーではない

ことを教えてくれるには充分だった。

天堂陸》

『

空港のロビーへと走り込んだ俺は狂おしい目で紫苑を探す。

（いない！ くそつ当然か！ もう飛行機の中なのか！？）

電光掲示板のアメリカ行きの便を見る。どの飛行機に乗っているかわからない。

いや、そもそも民間の飛行機に乗って帰るのか？

アレックス君は海ではクルーザー、陸では高級外車、先ほどはへりまで調達するような資産家なんだ。

なら専用のジェット機を持っているんじゃないか？

そんな情報は掲示板を見上げてもどこにも表示されていない。されるわけがない。

（なら直接、滑走路に出るしかない！）

今更だがパスポートを持つていなることに気がつく。もちろんお金もない。

こんな状態で飛行機には乗れるわけがない。そんな当たり前の出来事ですら失念している。

それくらい俺は焦っている！

「くそ！」

ロビーの外、闇に浮かぶ飛行機。

その視界の端に普通の飛行機とは違つ影が見えた。

（あれだ！）

確信などない。

ただ直感的に“あれ”だと思った。

よくも調べてないし、この距離だ。間違えている可能性は当然高い。

すぐに走り出す。目的地は滑走路！ そしてそこに至る道だ！

悩む時間はない。許されてすらいない。

今まで紫苑のことを悩んで悩んで、それで良い結果は出たのか？  
用意も準備も万端に揃えて、ことを成せればどんなにいいだろうか。

だけど人生においてそんな都合のいい展開はありえない。  
いつだって唐突に。突然、準備をする間もなく人生は展開と選択を人に突きつけてくる。

そのとき今ある手持ちの材料でどれだけやりくりして成し得たか……どんな状態だろうと行動できたか。成功と失敗はそこだと学んだ。

深い喪失と最後の望みさえも断たれようとした今、よつやく気がつけたんだ！

もう迷うくらいなら、俺は走る！

間違いだと気がついてすぐ行動するなり、これより遅いことなんかない。

引き摺られて想いを燻つて、後悔をする生き方はもう嫌なんだ！  
俺の心を今ほど本気に連れ去ったあの子を 紫苑を追うんだ！

温かい笑顔を、愛しい感情を手放したくない！

好きということを諦めたくない。

だから神様、もしいるなら僅かな奇跡を俺にくれ！

迷いはない。

アメリカでもどこまでも追つて行く覚悟だった。

だけどころして逃げ去る前に追いついては、飛び立たせるものかと凶暴に思った。

鳥の羽根を引き裂くほどに獰猛に思う。あれを飛び立たせたくない、あの機械の鳥を！

（逃がさない！）

性格が変わったと思いつくら、血口中心的で向こう見ずな考えが頭に浮かぶ。

作業員専用、関係者以外立ち入り禁止の扉を開ける。

そこに躊躇などない。後がどうなるかとか、常識や道徳などの単語が虚しく頭の中で消え去る。しちゃいけないことを行つたことで頭の中は沸騰しそうだ。

だけどそれすらも強い興奮と想いに搔き消されていく。通路を走り、案内掲示板に従い、貨物倉庫へと辿り着く。夜なお動く貨物倉庫。

機械の音に混じって、人の声が聞こえた。

空港の荷物を運び入れる大型のウォークリフト。

これだ、と。

見た瞬間、天啓のように思つた。

それを操る係委員へと駆け寄る。

「すいません！」

「えつ？」

驚いて声のある方向　　俺を見る男の職員。三十代半ばくら  
いだろうか。驚きに目を見開いて困惑を表している。  
そりやそうだ。

従業員でもない俺がいきなりこんなところにいるのだから。

「おい君、ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！　一体どこから入つたんだ？」

「大変なんです！」

ありきたりな注意をする職員に叫び返す。

「え、どうしたんだ？」

困惑は変わらず、むしろ強くなつて聞き返す職員になお続ける。  
「降りてください！　向こうで大変なんです！」

「え！　ちょ、ちょっと待つてろ」

俺の様子からただ事ではないと悟つたのか、無防備に背中を見せてフォーカリフトから降りようとする職員。

瞬時に野生の獣さながらの俊敏さで飛びかかる。  
職員の首根っこを掴んで床へと引きずり倒す。

「うわっ！？　な、何を！」

立ち上がろうとした所を、即行で鳩尾、胸へと当身をくらわす。  
呻いて体勢を崩した職員の襟首と右袖を掴んで、腰を跳ね上げるよう位員を背負い、地面へと叩きつける。

「がはっ！？」

背中から硬い床に強かに叩きつけられ、職員が激しく咳き込む。  
畳ならともかく、この硬い床に受身も取れずに叩きつけられたら  
それも当然で、これで痺れにも似た痛みで暫くは立ち上がれないだ  
ろう。

素早くウォークリフトへと駆け上がる。

ちなみに俺は原付の免許すら持っていない。

だけどアクセルを踏めば進むだろうし、ブレーキを踏めば止まる  
だろう？  
というか止まる気なんかさららないから、アクセルだけで充分  
だ。

ハンドル横にあるレバーでアームの上下を動かすのを確認。なら  
これが方向指示のレバーで、椅子の左横にあるレバーがギア？  
Pがパーキングだらう。止まるんだよな？

じゃDがなんだ。D1? Rでは……わからない。とりあえずDに合わせて

「わっ!?

止まっていたウォークリフトが動き出す。

ブレーキがどれかわからず近くのペダルを慌てて踏むとエンジンが吼えて急加速、目の前の壁にぶつかり車体が揺れる。

ハンドルを思いつきり左に回す。

車体の右側面を壁に擦りつけるように無茶な前進の後、壁から外

れつつんのめるように左へと旋回。

慌てて今度は右にハンドルを切る。

今度は左後ろの辺りを壁にぶつけ、体勢を取り戻そうとまた左。まるで打ち出されたパチンコの玉のように、あちらこちらに勢いよくぶつけながらもウォークリフトは倉庫から外の滑走路を目指して前進。

「くそ!」

予想以上に運転が難しい。

思つたように動いてくれない。俺は産まれて初めて車を運転できる人を尊敬した。

右に左にハンドルを切る、アクセルらしきペダルを踏む。

壁にぶつかり、扉にぶつかりながらも滑走路へととつとつ躍り出る。

なら後は加速するだけだ。

アクセルを強く踏み込む。

障害物がなくなり、広々とした滑走路の上は、みるみるウォークリフトの速度を上昇させてくれた。

吹き晒しの車体は風の勢いと唸り声を直接身体に叩きつけてくる。見通しの悪い暗い滑走路を猛スピードで走る。

奇妙な浮遊感と不安がない混ぜになつた恐れにも似た心を搔き消すようにアクセルをお強く踏む。

やがて、一台の小型ジェット機が見えた。

ジット機は滑走路から今、離陸せんとばかりに田の前を横切るうとしていた。

止める手段は一つだけしかない。

奥歯を噛み締める。ハンドルを強く握り締めた。

（上）の構造（上）

加速するために動き出しつつあつたジェット機が、横合いから突っ込んできた俺のウォークリフトを見て、直線の軌道を右へと避けるように変わる。

ジエット機が放つ圧倒的な光の渦へと突っ込む。

雄叫ひを上げて、その長い胴体へぶち当てる

上　　詩林卷之六

よつ早く、軌道を変えたジェット機の左翼が右方向から迫ってきた。

「ソノツツ！？」

こちらの体当た

「こちらの体当たりがジェット機の長い胴体に当たるより早く、右方向へと進行方向を変えたジェット機。その左翼がまるで薙ぎ払いの一撃のように俺の乗るウォークリフトを襲う。

アボー！

咄嗟に身を屈める。

瞬間、バキヤとかいう恐怖音。

破壊音と共に頭上の天井とそれを支えていた四本の支柱がまとめて

て相に生き呑む形はひれる

たウォークリフト。

拳句、その勢いで弾き飛ばされた車体が時計回りに猛烈にスピン

この体験をなんて表現すればいいのか。

遊園地の遊具である暴走する「一ヒーカップ？ シートベルトをしていないことに弾き飛ばされそうになつて気がついた。遅すぎる！ 前方にスピンする車体から半ば振り落とされそうになる。必死で運転席から落ちそうになるのをハンドルを握り締めて耐える。

甘かさた

考えて見ればすぐわかる話だ。

たとえば幼い子供が大人に向かつて頭から突撃して行つたらどうなるだろうか。

当然 体重と体格差に軽々と跳ね飛ばされる。  
弾き飛ばされ、尻を強かに打ち、泣きを見ることになるだろう。  
その規模を変えて、試したのが俺だ。

— ! ! ! —

声なき絶叫を上げる。流した涙が叩きつけられる風圧で、瞬時に後ろへと流れしていく。

泣く暇すら与えられず、ふざけるほどの無重力と浮遊感。ウオークリフトは空中に弾き飛ばされていった。

夜空が、灰色の雲が、瞬く星と輝く荘厳な月が見えた。

飛ばされ、上下に回転する車体。すぐ手を伸ばせば届く。

距離で長い胴体が横にぐるぐるぐるぐる駆け抜けで行く

次三

ギロチンのもう片翼。右翼がウォークリフトを直撃。

ギロチンの先づ右翼。右翼がウォークリフトを直撃。

どこか形を成す重要な場所が剥ぎ取られる破碎音。

(死んだ！)

グシャグシャにした紙の中に包まれて投げ捨てられた小虫は、おそらくこんな気分を抱くんじゃないだろうか。

回転する身体。回転する思考。回転する悲鳴。

そして俺は運転席から放り捨てられた。

滑走路の横の芝生に投げ出され、縦横無尽にその上を転がり、転がされ、わけもわからずにされるがままに吹き飛ばされる。

遅れて腹に響く爆発音。

起き上がった数十メートル後方で煙を上げ、盛大に燃え上がるウオークリフト。それを他人事のように眺めて呟いた。

「え？ ハリウッド？」

振り返れば遙か視界の先 滑走路で斜めに止まつたジェット機に気がつき、生きていることがわかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9105x/>

---

なんでやねん！

2011年12月19日09時52分発行